22ジョーカー

蜂夜エイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２２ジョーカー

【Ｎコード】
Ｎ２５１６Ｙ

【作者名】
蜂夜エイト

【あらすじ】
ジョーカーマシンと呼ばれる人型駆動兵器を用いた“第三次世界大戦”。その戦役で“英雄”と呼ばれた男は、戦争が終わると同時に隠居してしまう。
時は流れ、半年後。“英雄”の隠居する屋敷に望まれざる来客が訪れた。
見たことの無いジョーカーマシンと共に現れた女、フェリア。そして、それを追う謎の組織。
“英雄”、リヒト・シュッテンバーグは再び戦うことを決意する。

全てを知るために、そして抗うために。
見所は中学二年生的な能力が付加されたロボット。多分魔術系統のロボット寄り。タロットとか知ってるとニヤニヤ出来る、と思う。

設定画などの置き場所

＞i363372｜4556＜

主人公機であるグラインダーの設定画。

線画は友人の兄二氏に依頼し、書いて頂きました。

今度肉まんでも奢ってあげたいと思います。

色塗りは自分が担当したので恐らく、ってか、見て解るとおりのアレさですね。

アニメ塗りってやっぱり難しいね。

やっぱりロボット物は挿絵とかの絵が無いと分かり辛いものがあるから、書きたいとは思ってたんですよ。

しかし自分が書いてみたら、あんまりにもこういうロボットが書けなくて挫折しました。

実は四肢のバイパスは設定画の時点で追加された武装です。

やっぱりこういうのの発想はセンスが必要なんですかね？

さて、そろそろ２００字行ったかな……。

プロローグ

焦土と廃墟が立ち並ぶ、土色の戦場。
彼はそこに立ち、最期の音を聞いた。

『――――戦！停戦協定が結ばれました！』

電子ノイズと共にその言葉を伝えるスピーカー。
荒れ果てた戦場に一人佇む男は、静かにそのスイッチを切った。
狭いコックピットの中で、自嘲気味に笑顔を浮かべる。

「やれやれ、人殺しは御役御免か。意外と早かったな」

その皮肉に答える者は居ない。
何故なら、彼の周りには既に生きている存在が居なかったためだ。
あるのは焼け焦げた土地と、砕けた鉄色の破片。
それは、ジョーカーマシンと呼ばれた人型駆動兵器の残骸である。
味方を識別するためのカラーバリエーションも、全てが炎により橙色に染まっていた。

「世界大戦も終り、俺は無職……」

世界に齎された新たな技術と要素によって生み出されたジョーカーマシン。

それは世界に第三次世界大戦を引き起こした。
しかし、それも最早過去の事。
今は、何も考えていなかった明日の食い扶持を如何にするかで頭が痛い。

「やれやれ――――っと、通信か」

それは旧知の仲であり、今は別の戦場に居る筈の仲間からのものであった。
しかも、同時に二つ。
苦笑しながらも通信機器のスイッチをオンにすると、途端にけたたましい歓声が聞えてきた。
最も、それはノイズのような音であることから、バックグラウンドミュージック代わりの喧騒なのであろう。

『――――リヒト。生きてるか？』
『リヒト、大丈夫ぅ？頭打って馬鹿になってたりしなぁい？』

二人の言葉に、リヒト、と呼ばれた男は苦笑。
馬頭文句の一つでも吐いてやろうと、静かに笑みを湛えた。

「五月蝿ぇ、テメェら揃いも揃って……」
『だって、ねぇ……？』
『“英雄”最期の任務地だろう。ハイにでもなっているかと』
「酷ぇな」

ぼやきながら、リヒトはウインドウパネルを操作する。
手馴れたもので、彼の乗った人型駆動兵器は背部のバーニアを噴かせ始めた。

『そういえば、“英雄”さんはこの後何するのかしらぁ？あ、私のところに永久就職ってのは――――』
「勘弁してくれ。頼む。それだけは死んでも嫌だ」
『しかし、実際お前は傭兵のようなもの。戦争が終われば、食い扶持はゼロだぞ？』
「そうさな」

ぶっきら棒に返答しながらも、自動操縦の期待の中で思案顔を浮かばせる。
ふと、アイカメラ越しに外を見ると、綺麗な夕焼けが見えた。
大戦の終りに見たそれは、世界の終焉のようだった。

「隠居でもすっか？」
『お前が隠居だと？』

折り返し、驚きの声が上がる。
相手はめったに驚かない性分の人間だったので、その姿に新鮮味を感じた。

「赤ーい屋根の別荘でも作って。そうだな、立地は森が良い。ボツンと、一人で住む」
『やーん、素敵』
「だろ？」
『皮肉だ。気づけ』

不敵に笑みを浮かべて、リヒトは戦場を飛んだ。
これが“英雄”の最期の飛行になると、誰もが信じていた――――

第三次世界大戦終結。

勝者である連合国は敗者への裁きを下し。

世界の全てを巻き込んだ、最大規模の“冷戦”が始まろうとしていた。

「ククク……素晴らしい、な。この力は……！！」

その中で暗躍しようとする者の存在を、まだ、誰も知らない。

プロローグ（後書き）

初めましてでございます、蜂夜エイトです。
厨二病能力ロボットバトルを予定しております。
拙作ではございますが、暇つぶしとなればこれ幸いと。

第一話　美女と英雄

森の中に、その屋敷はポツリと立っている。
夕焼けのように赤い屋根に、中央に聳える不釣合いな尖塔。
広大な庭を持ち、周囲の森は様々な生き物たちが生息している。
それは決して、この世の楽園と言っても過言では無いだろう。

しかし、この建物に普通の人間が立ち寄る事は無い。
それは決して立地条件が悪いとか、ましてや、人が住んでいないといったことでもない。
彼らは恐れているのだ。
この館の主を。
第三次世界大戦中、“英雄”と呼ばれた男のことを。

だから、彼はここに住んだ。
妙な損得目線や、倦厭、好奇の目から逃れるために。
ここを訪れることが出来るのは、日の光と鳥のさえずり、旧知の友。
それと、望まざる来訪者のみである。

「……しつこい奴だ」

森の中を疾駆する影。
長い白髪を靡かせて、黒いコートを身に纏い走る女。

悪路であろう獣道もなんのその、軽業師のような身のこなしだ。
「余りにしつこい男は嫌われるぞ。雑誌に載っていた」
軽口を飛ばしながら、切れ長の瞳で背後を流し見た。
そこにあるのは遠近感を無視したかのように聳える鉄の巨人。
平和なこの森に、余りにも似つかわしくない存在。
ジョーカーマシン・ソードだ。

一対のアイカメラは獲物を常に捕らえ、睨み続ける。
灰色の巨躯は同じく灰色の装甲で覆われ、剛なる印象を受ける。
しかし、その背部にある巨大なバーニアが飾りである筈も無い。

突然、巨人がその拳を握り込んだ。
武装を持たない拳であろうと、人間にとっては一撃で致命傷となる。
だが、それに易々と当たるほど女も甘くは無かった。
素早く横に転がり、何事も無かったかのように逃走を再開する。

「お粗末な操作だ。折角の第二世代機なんだから、もっと努力すべきだろう？」

その機体は機動力と攻撃力に優れた機体であったが、流石に人間を相手取る設計はされていないらしい。
仕方ないこと、とも言えるだろう。
だが、灰色の巨人は突然その両拳を握り込んだ。
まるで祈りのように組まれた拳骨は、一撃の下に女を粉砕する、という気概。
それは、余りにも隙だらけの一撃。
女の隣で、轟音と衝撃。

「地面を叩いてどうする？全く、手が抜けないようだが」

女の皮肉に反応すること無く、巨人はその握ったままの両拳を抜こうと奮闘していた。

両腕の肘関節部分まで埋っていて、簡単には取れそうには無い。

「それでは、去らば」

女は捨て台詞を残すと、暗緑色の森に消えるように姿を消した。

目標は既に、先ほどから見えている。

この分ならば数分で辿り着くことが出来るだろう。

そこからは———

「彼次第、か……」

逡巡するような瞳。

だが、頭を振る。

まずは、全てを知らせなければならないのだから。

“選択”は、“選択肢”が無ければ選択できない。

「オルタ。ハインリッヒ。リヒト……！」

それは名前か暗号か。

誰にとも無く呟かれた言葉が風に乗って消えると同時に、彼女の目の前に屋敷が現れた。

赤い屋根に、尖塔が特徴的な屋敷だ。

＊　　＊　　＊

汚い部屋に、轟音が響いていた。
整理整頓などとは無縁の、積み上げられた本の塔が震動で崩れる。
その麓で眠っていた男の後頭部に、本の角が直撃する。

「……んあっ！？んだよ！？」

間の抜けた声を上げながら、眠っていた男は飛び起きる。
周りを見回し、自分の頭を襲った犯人を知ると、嘆息してそれを除けた。
少しだけ広くなった栗色の長机に、再び頭を突っ伏せる。
もう一寝入りしようと考えた彼に、再び震動が襲った。
覚醒状態ならば、それは確かに知覚できる程度の揺れである。

「――――ったく、寝てらんねぇ。何処のどいつだ、揺らしてんのは」

元軍人である彼には、この揺れの正体が分かっていた。
地響きと共に遅れてやってくる、重い震動波。
大方、爆薬による爆破のものと考えていた。
確かに危険度で言えば同等ではあるが――――彼は、その正体を知ることは無い。

「この近くには鉱山も地雷原もねぇ筈なんだが……」

緩慢な動作で立ち上がる。
ぼやきながら、油っぽい黒髪を掻いた。
だらしなく伸びたそれが、鳶色の薄暗い瞳を隠す。
近くの椅子の背もたれに掛けてあった暗緑色のコートを着込んだ。

彼はそのまま、その部屋を出た。
この地鳴り騒動の正体を探るために。
今居た史書室から、玄関までは遠くない。

空気の冷えた廊下で、彼は背中に走る寒気を感じていた。
寒さからくるものではない。
明らかに、本能からの警告の類。
だが、それでも彼は進む。
安眠を妨害されたことへの怒りと、好奇心が半分ずつの心象で。
洒落た装飾の施された玄関扉を開け、彼はそれを見る。

「――――は？」

目の前には、長い白髪を乱した美女が居た。
真っ黒なコートを筆頭に、ご丁寧にも全身を黒で覆っている。
切れ長で山吹色の瞳は相手を見抜き、威圧感と、異彩を放っていた。
そんな女が、

「捜したぞ。リヒト・シュッテンバーグ」

などと言ったのだから、彼は驚く。

「はぁっ！？」
「もう、来たか。随分と遅かったようだな」
だが、それだけではない。
女の後ろに、鉄色の機械巨人を見た。
「はァあああぁああぁああぁああぁああぁ――――っ！？」
素っ頓狂な絶叫を上げて、彼は。
――――“英雄”リヒト・シュッテンバーグは驚きの瞠目をした。

＊　＊　＊

薄暗い森の中、一人の男が座っていた。
傍らには巨大な黒の物体が鎮座しており、それは高く、男に影を落としていた。
「ヒャハハ、マヌケの“贄”がようやく追いついたか！」
心底楽しそうに、男は下品な笑い声を上げた。
彼が目を落としているのは、地面に直接置かれた携帯電話のモニタ。

そこに映される映像は彼が“贄”と呼んだジョーカーマシンのメインカメラと繋がっている。

「それにしても、随分とヒョロい野郎だなァ。あんなんで“アルカナ”に乗れんのか？」

眉を寄せて男は言った。
だが、その疑問を振り払うが如く、男は己の頭を叩いた。
それはまるで、自らに気合を入れるような仕草である。

「一丁揉んでやるか……ま、揉む、で済めばいいがなァ」

くつくつと笑いながら、男は立ち上がる。
傍にある黒い巨大な物体の脚を愛しそうに撫でた。
置かれたままの携帯電話から轟音が響いた頃、彼はその脚の後ろへと姿を消す。

その姿を見届けた者は、誰も居ない。

＊　＊　＊

目を忙しなく開閉し、口は半開き。

肩を掴もうとした手は宙でふらふらと彷徨っている。
リヒトの驚き様は、“英雄”とは思えないほどのものであった。
「悠長に説明している時間は無い。私の言うことを聞け。質問は手を挙げて、三回まで可能だ」
「まず、お前の所属と階級、あと名前は！？」
「所属は言えない。階級は無い。名前はフェリアだ」

白髪の女――――フェリアは淡々と答えた。
それは聞き手によっては、まるで感情が抜け落ちたかのように冷たい声音だろう。

「じゃあアレは一体――――」
「質問は三回まで、と言っただろう？」
「さっきので終りかよ！？」

などと、即席コントを続けるリヒトはそこまで頭が回らなかったようだが。
兎に角、彼らは窮地に立たされている事に違いない。
視界を塞ぐように聳え立つジョーカーマシンは、間違いなく標的をフェリアに定めていた。

「――――って、コントしてる場合じゃねぇ！どうすんだ！？」
「焦るな。手はある」

落ち着き払ってフェリアは言った。

「アレに対抗するためには同等の力が居る。つまり、ジョーカーマシンだ」
「そうだな」

「で、だ。詰る所君がジョーカーマシン並みの活躍をすれば……」
「出来るかっ！！」

ぜえぜえと息を吐いて、リヒトは恨めしげにフェリアを見る。
当の本人は涼しげに、からかう様に笑っていた。
が、ジョーカーマシンの足音が聞えたとき、その目を鋭く尖らせ。

「冗談はここまでだ。生きたければ、私の言うことを聞け。いいな？」
「……おう」

その剣幕に、リヒトは圧された。
まるで親の敵でも見るかのような目でジョーカーマシンを見上げたのだ。

「自動操縦でここにジョーカーマシンを呼んである。君はそれに乗って戦え」
「到着まではどうすんだよ？」
「私が時間を稼ぐ」

言い放ち、リヒトに背を向けた。
人間がジョーカーマシンと対峙するなど、前代未聞である。
確かに人対ジョーカーマシンという光景は、過去、戦場では度々見られたが――――

「無茶だ。死ぬに決まってるだろ？テメェ馬鹿か？」
「死なない」

その根拠の無い言葉。
そして、振り返ったフェリアの瞳に、再び圧された。

先ほどまでとは全く違う。
それは一種の、覚悟の輝きであった。
まるで、戦友の背を護るような。
そんな“圧”を、フェリアの瞳は発していた。

「……」

無謀。
余りにも無謀なその行為に、でも、リヒトは言う。

「……なら、俺が来るまでに倒されないようにしておけよ。心中は御免だ」
「無論」

その覚悟を無碍にすることなど、リヒトには出来無かった。
軽口を叩きながらも、再び、その瞳を見つめた。
覚悟の篭った瞳には、同じく、覚悟を込めた瞳で返す。
互いが互いの意思を確認し、僅か一秒。
二人は既に、全ての意識を“二人での勝利”へと向けていた。

「場所は？」
「屋敷の裏へ回れ。そこに現れるだろう」

リヒトは言われるがままに屋敷の裏へと駆けて行った。
それを見送り、フェリアはゆっくりと振り向く。
先ほどまでの鬱憤を溜め込んだ、凶悪かつ強大な敵が居た。
質量差は歴然。
フェリアが手に握るのは、豆鉄砲にもならない拳銃だけ。
———だが。
彼女の頭には、“負ける”という言葉は浮かんでこなかった。

「さて、戦おうか」

＊　＊　＊

屋敷の裏庭。
色とりどりの花が咲く花壇があり、リヒトの密かな趣味である家庭菜園もある。
いつ来ても癒される空間であったが、今のリヒトにとってもそれは同様であった。

「しかし、一体何なんだ？フェリアとか言うあの女、怪しすぎる」

癒され、落ち着いた影響だろうか。
気が動転していたため浮かばなかった疑問が、次々と浮かび上がる。

何故、フェリアは追われているのか。
何故、フェリアはここへと来たのか。
何故、ジョーカーマシンを持っているのか。

疑問は尽きない。

しかし、その疑問を吹き飛ばすようにリヒトは頭を振る。
今は、生き残るための。
そして、フェリアを助けるためにも、勝つことだけを考えるときである。
密かな決意を新たにした瞬間。

「――――ッ！！」

轟音。
衝撃。
砂煙。

三つの要素が辺りを襲い、リヒトも例外なくそれを受けた。
幸いにも、身体に影響は何も無い。
砂煙が晴れれば、自動操縦で飛んで来た件のジョーカーマシンがある筈である。
リヒトが、黒いシルエットの奥の機体を視認した。

「これが……！」

まず目に付く事は、その小ささだった。
通常のジョーカーマシンに比べ、一回り小さい。
１８メートルほどが一般的だから、この機体は１２メートルかそこらか。
暗緑色のなだらかな装甲は、風の影響を極限まで減らすためのものなのだろう。
風を切るようにしなやかな肢体は、歴戦の格闘家を髣髴とさせる。
両腕両脚から伸びた鉄色のバイパスは一体何に使うのだろう。
リヒトの興味は尽きない、が。

「まずは、一刻も早く助けに行かねぇとなんねぇんだ。乗せてくれよ、“切り札”」

赤い瞳が、リヒトを射抜く。
まるでパイロットを品定めするかのような瞳。
だが、リヒトはそれに臆する事は無かった。
堂々とその胸を張り、静かに一歩踏み出す。

呼応するかのように、機体背部のコックピットが露出された。
乗れ、とでも言うというのか。

「生意気なマシンだ。だが、俺には調度良い」

呟いて、リヒトは滑り込むようにコックピットへと入った。
それなりに狭い機体内部は、通常のジョーカーマシンとの相違は無い。
ウインドウパネルを手早く操作し、ジョーカーマシンの戦闘状態起動へと移行する。

「これなら操作出来そうだ……っと。こいつは、パイロット登録か」

画面一杯にでかでかと現れたウインドウは、パイロットの名前を要求していた。
リヒトは素早く、“リヒト・シュッテンバーグ”と打ち込む。
認証されると同時に、彼の元に新たなパネルが現れた。
それは、この機体を示す固有名詞。

「――Ａｒｃａｎａ　Ｍａｃｈｉｎｅ　０４　Ｇｒｉｎｄｅｒ。“粉砕機”、か」

何回か、呟く。
その名がしっくり来たのか、リヒトは躊躇い無くフットペダルを踏んだ。
同時に操作する手の中のレバーで、忙しなく機体制御を行う。
“切り札（ジョーカーマシン）”改め、“Ｇｒｉｎｄｅｒ（グラインダー）”は、その場に堂々と立ち上がった。

「元第十五遊撃部隊隊長、リヒト・シュッテンバーグ。階級は元陸曹。あー、っと。あとなんかあったかな……」

おどけた調子で、リヒトは言う。
そこに、戦場に対する恐れや不安は一つも無い。
彼の頭に“勝ち”以外の未来は、一つとて存在しなかった。

「――――まあいい！コードネーム“グラインダー”、行くぞ！」

第一話　美女と英雄（後書き）

次回バトルが出来ると思います。
そこまで大したモンじゃあない気もしますが。

第二話　全力前進

咄嗟に、前へと飛び込んだ。
背中を撫でるような圧倒的プレッシャーが、一瞬送れてその場を穿つ。
土埃を払うような暇も無い。
そんなことをしていれば、次に訪れるのは“死”のみだ。

「くっ……！！」

最早、軽口を飛ばすような余裕も無い。
フェリアの美しかった白髪は土埃で汚れ、珍しく焦りの表情を浮かべていた。

「全く、次から次へ……っ！！」

言った傍からフェリアは横へと飛ぶ。
再び、真上から落とされたジョーカーマシン・ソードの拳。
地面を穴だらけにしながらも、その狙いは次第に定まってきていた。
まるで、“次は捕らえる”とでも言うように、ソードの目が光った。

「貴様如きに盗られるほど易くは無いぞ」

だが、彼女の動きにも限界があった。
いくら体力に自身が在ろうとも、もう横へも、後ろへも、前にも

跳べない。
四方を完全に穴で囲まれた。
一度穴に落ちてしまえば、二度と日の光を浴びる事は叶わないだろう。

だが、彼女は最期まで信じていた。
命を託した、男の存在を。
だから。
この局面でも、その瞳に篭った闘志は消えない。

アイカメラ越しにそれを見たソードのパイロットは、恐怖した。
それはまるで、肉食獣を目の前にした小動物のように。
食物連鎖にも似た、本能からの恐怖。
だから、ソードは――――躊躇い無く、拳を振り下ろした。

『――――!!』

最初に気付いたのは、ソードのパイロットであった。
明らかに地面よりも高空の位置で、振り下ろしたはずの拳が浮いている。
まだ腕が直角を描いており、力が地面に伝わった様子など微塵も無い。
ならば、拳と敵の間にある物体は何なのか――――

『教えてやろうか？三流パイロット』
『……っ！？』
『こいつはグラインダー。テメェをぶちのめす為の秘密兵器ってトコロか』

初めて、掠れた呼吸音のような音が漏れた。

息を呑んだのか、息が詰まったのか。
ただ、ソードのパイロットは間にある物体からの通信を聞いていた。

『よぉ、フェリア。生きてるか？』
「遅すぎるぞリヒト。危うく死に掛けた」
『死なねぇって言ったのは何処のどいつだよ』

グラインダーの集音マイクとスピーカーで、リヒトは会話していた。
無論、この間にもソードはグラインダーを叩き潰そうと力を込め続ける。
しかし、潰れない。
それどころか、少しずつ押し返しているようだった。

この小柄な機体の何処に力が――――
ソードのパイロットがそう考えたとき、一段と激しい揺れがソードを襲った。
狙っていた場所には、豆粒のような小ささのフェリアのみ。
気付いたときには既に、機体がダメージを受けている。
腰部装甲破損――――

『グラインダーの特技は急襲、翻弄。テメェのスピードじゃあ一億光年掛かっても追いつけない』
「リヒト、光年は距離だ」
『分かってる！冗談を察しろ！』

戦場において相応しくない会話は、ソードの後ろから発せられていた。
振り向き様に、裏拳を叩き込む。

だが、それは当たらない。
アイカメラには何も映ってはいないのだから。

『よそ見してたら――――』

リヒトの声。
方向は四時――――

『……こうなった』

右脚部破損。
ソードのコックピットに赤いサイレンと警戒音が鳴り響く。
アラート、アラート、アラート。

「調子に乗るのはいいが、さっさと終らせてしまえ。誰かに見られたら面倒だ」
『こんな森に誰も来ないだろ、っと』

会話しながらも、左腕にダメージを与えた。
最早どんな攻撃かすらも理解できない。
考える内に、今度は左足。
影も形も見えない。
武器は何か、どんな手段で移動しているのか。
それすらも、理解できない。
人知を超えた脅威の性能に、ソードのパイロットは考えることを放棄した。

『もう動かねぇのか？根性のねぇヤツだな』
「気づけ。もう殆どイモムシ状態だ」

そう、残ったのは既に右腕だけ。
その右腕すらも、風のような機体に掠め取られる。
思考を放棄した視界の中で最期に見つけた、その光景。
暗緑色の悪魔が、在り得ないほどの速度で右腕を力任せに引き千切る。
武器など一切無い。
グラインダーは、素手で、ジョーカーマシンを解体して見せた。

＊　＊　＊

「――――で、だ」
リヒトは思い詰めた顔で唸った。
「何で、テメェは平然と、コックピットに乗ってやがる？」
「外は危険だからに決まっているだろう。それに、この機体は元々私の物だ。私が乗っても不思議ではあるまい」
当然だ、とでも言うようにフェリアが言う。
パイロットシートの後ろ、僅かに開いたスペースにフェリアは立っていた。

コックピットは狭く、二人が入るには両者の身体を密着させなければならない。

「じゃあ俺は降りる。手をどけろ」

「生憎、今は操縦できないのでな。このまま乗っていて貰おう」

挙句、手を肩にまわしてがっちりと固定されている。

このままでは抜け出す事は適わない。

「今は操縦できないって、どういうことだよ……」

げんなりと呟きながら、リヒトは諦めてモニターを眺めた。

先ほど破壊したジョーカーマシンからパイロットが降りてくる気配は無い。

恐らく内部の衝撃で頭を打ったか、気絶でもしているのだろう。

これ幸い、とばかりにリヒトは問いかける。

「取り敢えず、聞かせてもらうぞ。このマシンと、テメェと、それらを狙ってる組織についてだ」

「組織……か。いつ、気付いた？」

「ジョーカーマシン・ソード。第二世代機か？こんなモン、一個人や弱小組織が用意できる訳ねぇだろ」

ジョーカーマシンは戦場において強大な武力となる。

が、反面、それは国家レベルでなければ用意できないほどの代物でもある。

この国ではジョーカーマシンを個人が持つ事は未だ禁止されている上、組織レベルとなってもそれは厳重に制限、管理されているのだ。

特に、戦時後期に開発された“第二世代ジョーカーマシン”など、

以ての外。
一般レベルでジョーカーマシンを拝むには、内戦や紛争の起こっている地域にある一世代前のものを見なければならないだろう。
「ふむ……成る程な。頭は悪くないらしい」
「俺を馬鹿にしてんのか。これくらいジュニアスクールの洟垂れでも分かるわ」
「いいだろう。リヒト・シュッテンバーグ。貴様に真実を伝えよう。ただし……」
「まさか、“知ったら二度と引き返せない”とでも言うつもりか？」
リヒトの釘を刺す言葉に、フェリアは返事を返さない。
だがその沈黙は雄弁にそれを語っていた。
「一つ、言っておく。引き返すかどうか決めるのは俺だ。テメェに心配されるほど落ちぶれてねぇよ」
「そうか。自信満々だな」
「俺はいつでも、どこでも、何でも出来るんだよ」
その言葉は不器用なリヒトなりの優しさであったが、フェリアはそれに気付く素振りも無い。
一呼吸置いて、フェリアは口を開く。
「第三次世界大戦の裏で暗躍していた組織がある。その名は――」
『デイブレイク』
若い男の声。

フェリアの言葉を継いだのは、点けっ放しだったグラインダーの通信装置だった。

『ってんだ。どうよ？カッケーだろ？』
「……誰だ？」
「久しいな、ファウスト戦闘員」
『今はもう戦闘隊長だぜ？ちょーっち情報が遅ぇなァ』

フェリアが通信を介して、ファウストと名乗った男と会話する。
会話からは余り良好な関係とは思えない。

「戦闘隊長……っ！？」
『そゆこと。サインは全てが終わった後にしてくれよ？』

フェリアが明らかに狼狽した。
リヒトは顔を動かすことは出来ないが、肩に触れていた手が微かに震えたのを感じる。

「どうした、フェリア。何かマズイのか？」
「リヒト。お前の機体はかなり特別。それは分かるな？」
「そりゃ、分かるけどよ……？」

リヒト自身、グラインダーのハイスペックさは自覚していた。
オーパーツと呼んでも差し支えないほどの性能だ。
所々は魔法でも使っているのでは無いか、と疑いが掛かる。

「今乗っているグラインダー……これと同等の力を持つ機体が、今、こちらに向かっている」
「なっ！？」

リヒトは驚きの声と共に、備え付けられたレーダーを見た。
周囲一キロにはジョーカーマシンの反応は見られない。
だが、リヒトは確実に予感していた。
強敵の登場と、それに伴う絶望的な窮地というものを。

「――――ッ！？」

メインモニターを見たリヒトは目を見開く。
目の前の、何も無いはずの空間が、ひしゃげた。
その隙間を抉じ開けるかのように、薄暗い灰色の腕が姿を現す。
余りにも非常識な光景。
濃灰色の機体は、空間を抉じ開けている。

『到着、っと』

戦場に似つかわしくない、余りにも軽い声。
同時に、ファウストの機体がその姿を晒した。

大きさはリヒトの乗るグラインダーの二倍ほどはあり、圧倒的な質量差を見せ付ける。
両手には銃器、背中や肩には砲。
“火薬庫”――――そんな言葉が、リヒトの思考を過ぎった。
濃灰色の装甲は余りにも厚く、大きく、聳える。
頭部に配置された深紅のモノアイが、静かにグラインダーを見下ろす。
視線は、まるで死神の瞳のように冷たい。

『ビビッたか？怖気づいたか？だが、どうしようもねぇ。これが現実だ』

ファウストの言葉は相変わらず軽い。
だが、その言葉すらも、どこか真実味を増していた。
純然たる力の象徴が、目の前に聳えているのだから。
『Ａｒｃａｎａ　Ｍａｃｈｉｎｅ　１６　Ｂａｂｅｌ！“塔”の実力、身に刻みなァ！』

＊　＊　＊

「フェリア……質量差って、スゲェな。迫力がダンチ過ぎるだろ……」
「ぼやいても始まらないぞ。アレを倒すしか、生き残る術は無い」
リヒトは呆然とした声を発しながらも、素早く操縦桿を倒した。
操縦者の動きをダイレクトに伝えるその操作性が、彼らの命を救う。
先ほどまで居た場所には、吹き飛ばされた土砂が噴水の如く舞っていた。
「あぁ、クソ！あんなモン喰らったら死ぬだろうが！」
大きく横へと動いたグラインダー。

ぼやきながら、リヒトは巧みに機体を制御する。
この時点でジョーカーマシン本来の二倍ほどの速度が出ていたが、動きにぎこちなさは見られない。

「このマシンの特徴は、運動性能だ。翻弄していけば攻撃を喰らうことは無いだろう」
「分かってる！」

このグラインダー、あまりにも動きが早い。
その制動に追いつけるのは、かつて“英雄”と呼ばれていた故のことだろう。
速さを三倍にまで上昇させ、グラインダーは地面を蹴った。
質量を持った暗緑色は、全体重の乗った拳をバベルに叩きつける。
狙うべきは、防御力の脆弱な脚部関節。
だが――――

「……こいつは、関節にオリハルコンでも使ってるのか？」

弾かれる。
巨大な装甲の合間に刺さった拳は、しかし、意味を成さない。
ファウスト本人もまるで気にした様子は無いことから、本当にダメージにすらなっていないのだろう。

『蝿でも止まったかァ？』

不意に、バベルの装甲が震えた。
舌打ちしながら、リヒトは素早く判断を下す。
グラインダーは全速力で脚部装甲を蹴る。

「――――やはり、かっ！」

せり出したバベルの装甲から、砲口が覗いた。
一瞬の邂逅の後に、放たれた砲弾は的外れの方向へと飛んでいく。
「堅固な装甲に、全身に砲口。完全な防御馬鹿……！！」
『防御だけじゃないんだぜ？』

素早くグラインダーを立て直し、再び飛び退く。
一瞬遅れて着弾した弾が、再び轟音と共に土砂の噴水を作った。
リヒトは相手の攻撃を全て避けきる自信があった。
だが、攻撃力が無ければ倒すことは適わない。

急制動からの奇襲、狙いは背部の首関節。
打突、だが、弾かれる。
その隙を狙うように、装甲から這い出した砲口が火を噴く。

幾度かのやり取りを繰り返し、互いは一度、距離を取った。
今もまだ、バベルの山の様な巨躯は雄雄しく聳えている。

「埒が明かねぇな……」
『同感だ。もっと攻撃力のある技ってのはねェのかよ？』
「確かに、武装の一つぐらいあってもバチは当たらねぇ筈だぞ……」

呟くリヒトに、フェリアは断じた。

「無いな。男なら拳一本で闘って見せろ」
「テメェは死にたいのか？馬鹿か？先に死ぬか？あァ？」

正気の沙汰ではない。

だが、フェリアはまるで気にした様子も無く、ただ前だけを見つめる。

「――――信じろ」

「は？」

「機体を、そして、己を信じろ。今の私にはそれしか言えん」

「そいつは一体――――っ！！」

リヒトが問おうとした瞬間、衝撃が走った。

グラインダーの近くに着弾した砲撃が、コックピットの中の二人を揺らす。

『相談事は終わったか？こっちも時間が無いんでな……手早く、行かせて貰うぜェ？』

言葉に次いで、バベルの巨躯が動き出した。

鈍重そうな外見とは裏腹に、素早く、滑るように移動する。

その姿は這い寄る蛇にも似ていた。

「っ！クソ！」

回避行動を取りながら後退。

バベルはなおもその身体を引き摺りながら、着実に距離を詰めていく。

「ゴキブリ野郎がっ！！」

『誰がGだって？飛び回るカトンボよォ！』

バベルの脚部、腕部、胸部に備えられた砲口が姿を現した。

まるで弾幕のような砲弾の雨。

だが、グラインダーの速度を捕らえることは叶わない。
冷静に回避した一方、リヒトはその実、焦っていた。
有効打を与えることが全く出来ていない現状、取れる選択肢は二つしかない。
―――諦めるか、命を賭けるか、だ。

『オラァ！動きが鈍ってるぞ、カトンボ！』

未だ、砲撃を盾に暴れ回るバベル。
その強固な装甲の隙間を縫う一撃。
唯一、露出した部分で試していない一撃。

（砲撃直後の、胸部の砲口―――）

だが、それは弾幕の雨を突破するということ。
お世辞にも褒められたモノではない、そんな戦い方。
グラインダーは愚か、パイロットすらも無事ではいられないだろう、正真正銘の賭け。
だが、時は決断を迫っている。

「フェリア」

リヒトは、窺うように問う。
名前を呼んだだけ。
だが、そこには様々な意味が込められていた。
対するフェリアは、そんなリヒトを鼻で笑い。

「好きにしろ。私の命は、お前に預ける」
「そーかい」

リヒトは、静かに目を伏せた。
見開いた先の光景が最期となるかどうかは、自分の腕と――――グラインダーに、掛かっている。
グラインダーを、己の腕を信じるほか無い。
ただ、それでは突破に足りない。
だからリヒトは、もう一つだけ信じる。

「フェリア、オペレーション任せた。出来るだろ？」
「……任せろ」

謎の女、フェリア。
彼女を信じることで、リヒトは全てのパーツが揃った感覚を得た。

フットペダルを操作し、操縦桿を握り、インフォメーションスクリーンへ目を走らせる。
全ての条件を確認して、リヒトは戦いを組み立てた。
“英雄”の戦略は、戦場で再び蘇る。

「シートベルトは締めたか？」
「後部座席には付いてないぞ」
「大丈夫、今日だけは赦して貰えるさ。今までの法規違反の暴走だって、赦されてる」

そのとき、リヒトの背後でフェリアが笑った。
少しばかり口の端が上がっただけの笑みだが、リヒトにはそれが分かっていた。
そして、それが少しばかり誇らしい。

「さーて、じゃ、行きますか。弾幕シューティングの始まりだ―

――」

グラインダーの目に、灯が燈る。
決して困難に屈することの無い、力と誇りの光。
それは、“決意”という名の炎。

＊　＊　＊

静寂。
それは、戦いに身を置くものが最も警戒する一瞬である。

「何をするつもりかは知らないが、俺様に勝てると思わないことだなァ……」

バベルの全ての砲身を準備しながら、ファウストは警戒する。
近辺にグラインダーの反応は見られず、レーダーの範囲外に居るのだろう。
武装は無いので狙撃などの警戒をする必要は無い。
その速度を活かしての特攻を仕掛けてくるであろう事は容易に想像がついた。
飛んでくるカトンボを撃ち落とす。
その程度の気軽さで、ファウストは薄く笑った。

瞬間、緊張の糸が震えた。
レーダー上に静かに点滅する、通常の十倍はあろうかという速度のジョーカーマシンの反応。
間違いなく、奴だ。

「――――ヒャハハハハ！来たかッ！！」

笑いながら、全ての砲身の火器管制システムを起動した。
データを取得した管制は自動的に迎撃に最適な射線を構築していく。
砲撃の最も遠く、離れた着弾地点にグラインダーが差し掛かるとき、一発の砲撃が放たれた。
それを皮切りに、大量の砲撃が放たれる。
砲門は決して大砲だけではない。
機関銃、電磁銃、レーザー光、ありとあらゆる火器が一機を狙う。
まるで光の奔流。
局地に対する圧倒的な砲撃こそ、バベルに隠された一面である。

「この弾幕！避けれるモンなら避けてみろやァ！！」

たった一機の“カトンボ”を落とすためだけに、彼は本気だ。
だが、彼が“カトンボ”と呼ぶ存在は果たして何なのか。
それを知るのは唯一人。
勝者のみである。

＊　　＊　　＊

「発見された！攻撃が始まるぞ！」
「っ！やっぱ速度頼みじゃキツいか！」

フェリアの警告に、リヒトが舌打ちした。
通常のジョーカーマシンの十倍の速度とはいえ、レーダーに映る暇すらなく攻撃するのは不可能。
だが、その初撃は十分に撹乱できる。

「砲撃来るぞ！」

鋭いその声に、リヒトは躊躇わずに加速した。
前へと抜け出したグラインダーの遥か後ろで、派手な爆縁があがる。
それとほぼ同時に、グラインダーのレーダーには多量の攻撃予測が打ち立てられていた。
おおよそ、回避は不可能であろう程の量である。

「左へ避けろ！バルカンの方がマシだ！」
「クソッタレ！！」

グラインダーが最高速を保ちながら、左へと滑った。
同時に、内部に居る二人に多大な衝撃が走る。
相対性理論によって破壊力を増した銃弾が、グラインダーの装甲を叩いた。

「っ！！」
「シートベルトが欲しいところだな……っ！」
結果、装甲には多大な弾痕が刻まれる。
砲撃による爆風の煽りを受けながら、グラインダーは空間を奔る。
左腕の制御が利かなくなっていた。
「だが！」
すぐ隣に走ったレーザー光に当たるよりは遥かにマシな損害である。
思い直して、リヒトは再び目の前を見据えた。
メインカメラが辛うじて捕らえたのは、時間旅行の最中のような光溢れる光景。
それら全てが致死性を持つ攻撃力の塊。
幻想的な風景に時折響く、硬質な残響音が不安を煽る。
「地上に降りろ！高出力砲だ！」
「合点！」
返答と同時に、リヒトは目一杯加速させて機体を地上へと下ろした。
着地と同時に右足の調子がイカれたが、結果的には少ない損害で済んだのだろう。
グラインダーの真上を通る強大な光線を見て、リヒトはつくづく安堵した。
しかし、地上を走るには片足では不可能である。
故に今、地に足を着けず、持ち前の飛行能力で低空飛行している状態だが――

「クソ、爆風に煽られて上手く動かねぇ！」
地上にほど近い場所は、爆風の影響を最も受ける場所だ。
ふらふらと、先ほどまでの半分の速度でグラインダーは進んでいた。
気付けば、住処である洋館の麓だ。
隣で、一際大きい爆発が起きる。
「甘い！」
「待て、それは――――」
避ける。
だが、しかし、その爆風に煽られた機体は確実にふらつく。
そこを狙って、一筋の煙が飛んだ。
対ジョーカーマシン用ミサイルが、死を撒き散らしながら迫る。
だが、リヒトは何でもないように笑った。
「俺に掴まってろよ」
「……っ！」
言葉の真意を察し、フェリアはリヒトを後ろから抱きしめる様に掴まる。
がっちりと、離れないように。
「飛ぶぞ！！」
次の瞬間、二人を襲ったのは無理にかけられた多大な重力負荷。
足元で爆発したミサイルの爆風が、グラインダーを無理やり空へと打ち上げた。

その際に両脚は壊れ、装甲が無残にも崩れていく。
だが、そんなことはお構い無しに、グラインダーは進む。
目標のバベルを、遥か高空から見下ろした。

「待ってろよ……今に、喰らいついてやる！」
『楽しみに待ってるぜェ、“英雄”サンよォ！！』

砲撃に一瞬の空白。
不意に繋がるノイズ交じりの声。
互いが、互いへと宣戦布告。
同時、不敵な笑みを両者が浮かべ。

『ここまで来れたらの話だがなァァァァァァッ！！』

ファウストが叫ぶ。
胸に開いた装甲の穴からは、巨大な砲身がせり出していた。
そこから放たれるモノは間違いなく、グラインダーを一撃で葬る。

「……ォ」

だから、リヒトは。

「オォォォォォォォ――――」

回避行動でも、防御行動でもなく。

「オォオオオォォオオォォオオォォオオォォオオォォオオオオオオ――――ッ！！」

前進する。

踏み壊さんとする勢いでペダルを踏み、操縦桿は常に前進の一手。
見据える先には既に砲口の赤く染まったバベル。
愚直。
それは、愚直過ぎる突撃。
自暴自棄の神風特攻と言い換えても良い。

だが、リヒトには相討ちなどといった考えは毛頭無い。
あるのは一念。

――――ただ、前へ。

既に手足は機能せず、自慢だった暗緑色の装甲は見るも無残に崩れている。
通常の三十倍にも及ぶ速度の代価として、在り得ないほどの重力負荷が二人を襲う。
だが、それでも、リヒトは速度を緩める事は無かった。
否、だからこそ。
リヒトは更に、限界を目指す。

「突き抜けろォオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

刹那、リヒトにとって、世界がスローに流れた。
頭に血が上っているのが解る。
目を落とした速度計は壊れて、正確な表示を無くしている。
メインカメラに映るのは既に発射されたビーム粒子が、今、まさに牙を剥かんとする様。
だが、まだ手遅れではない。

リヒトは最初に乗ったときから感じていた。
この機体のポテンシャルを、余りある強大過ぎる力を。
だから、リヒトは信じる。
そのポテンシャルを、それを操る自分自身を。

「――――ッ！！」

光が、メインモニター一杯に映る。
最早視界は光に包まれ、何も見えない有様。
だが、しかし。
リヒトは確信していた。
己と、グラインダーなら越えられると。

刹那すら凌駕する、須臾（しゅゆ）に近い時間。
その間に、呟く。

「Ａｒｃａｎａ　Ｏｖｅｒ――――」

それは逆転の鍵語。
常識を越え、人知を越え、全てを越える為の言霊。

如かして、グラインダーは。
「うおおぉぉおおぉおおぉおおぉおおりゃあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！」
ビームを、縦に裂いた。

『――――ッ！？』

バベルから見れば、その現象は不可解に見えただろう。
まるで、ビーム自身がグラインダーを避けるように霧散していく様。
ファウストの息を呑む音。
それとほぼ同時に、グラインダーの拳が放たれる。

「これでッ！！」

突き立つ拳。
それは最早グラインダーを介し、リヒトの拳へと伝わっている錯覚があった。
胸部砲のエネルギーが暴れ、グラインダーの右腕を蹂躙する。
それと同時に、バベル自身の内蔵機関も次々と破壊されていく。
連鎖的に崩れるバベルの鉄壁。
あと、一撃。
「終いだッ！！」

もう一度、拳。
振りかぶった右腕の先の原型は無い。
が、気に入らない相手をぶん殴るにはそれで十二分。

突き立つ、二回目の拳。
一瞬の後、砲口から溢れたエネルギーが光を放った。
それは最期の抵抗か、グラインダーを吹き飛ばす。

「ざまあ見やがれ――――」

そこで、リヒトの視界は、今度こそ真っ白のまま、閉ざされることとなった。

第二話　全力前進（後書き）

それなりにバトル。
次のロボットの登場はいつになるやら……。

第三話　ジョーカーマシン

がたがたと揺れる単車。
それもその筈、単車は人ですら通るのを憚るような獣道を突き進んでいるのだから。
常人では操作不能なレベルの揺れでも、英雄は淡々と乗りこなす。
偏にそれはジョーカーマシンの操縦経験が好を奏した形であった。
本人の顔は明らかに不満だらけの仏頂面であっても、だ。

「……絶対、狙ってただろアレは。マジで」
「何度言うつもりだ？既に聞き飽きたのだが」

恨み言を吐くリヒトに、冷たく声を返したのはフェリア。
彼の腰に手を伸ばしシートの後ろに座る彼女は、呆れたような調子だ。

「だってよ、俺の家がぶっ壊れされたんだぜ？そりゃ大したモンはねぇよ？金も無事だし。けどな、家が無くなるっつーのは幾ら温厚な俺でも許容範囲外ってーか」
「女々しい」

フェリアは断じた。
既にこの問答も幾度繰り返されたか分からない。

――――黒いジョーカーマシン、“バベル”との戦闘で、リヒトの屋敷は崩壊した。
敵機が逃げ去った後の戦場でリヒトが見たのは、焼け野原である。
唯一の娯楽とも言えた裏庭の庭園が瓦礫に押しつぶされ、こげ跡

すら残っていなかったのは流石に可哀想なさまであった。
が、現実は非情にも、リヒトにホームレスという不名誉極まりない称号を与えたのである。

更に追い討ちをかけたのが、フェリアの存在。
デイブレイクから彼女を護るための手段“グラインダー”は、既にボロボロの体であり、修理を必要としていた。
最も、リヒト自身がこの『戦闘限りである』と見て酷使したのが問題であったのだが――――

「とにかく！巻き込まれちまった以上は全部ゲロって貰うぜ！？」
「ふむ。貴様ならこのまま逃げるかと思ったが」
「悪いが豪邸ぶっ壊されて笑ってられるほど俺は寛大じゃねェ。次に会ったら絶対ぶっ殺す！」

自棄気味に叫ぶリヒトに、フェリアは淡々と言う。
しかしその声音はどことなく感心しているように聞えた。
が。
その理由自体は八つ当たりに近い。
というか、八つ当たりそのものである。

「まぁ、理由は何でも良い。とにかく、私はこの“グラインダー”を護りたいのだよ」

言うと、フェリアは撫でるように首にかけたネックレスを触る。

「私の息子も同然の機体を、変なことに使われては堪ったものではない」
「我が子ォ……？テメェ、軍学者か何かか？」

当時のジョーカーマシンは一部の軍学者のみが開発を担当していた。
徹底的に情報規制され、乗り込む人間はその動力すらも知らないほどである。
それ故一般にその製造法が知れることも無かったし、無駄な戦火を招く火種となることを防ぐことが出来たのだ。

「確かに、広義では軍学者かも知れんな。まあ、そこらは置いておけ。とりあえず、今は“グラインダー”をデイブレイクに渡してはいけないということだけ知っていれば良い」

有無を言わさぬ口調に、リヒトはそれ以上に踏み込めなかった。
否、踏み込ませなかったというべきだろう。
リヒトも勿論、これ以上の厄介ごとに付き合う気概は無い。

「で、要はデイブレイクの奴らが襲ってくるからそれからコイツを護れ、ってことだろ？」
「そういうことだ。ただ、くれぐれも大事にはするなよ？」
「へぇへぇ、分かりましたよっと……注文の多いヤツだな、オイ」

ぼやき、リヒトはバイクを走らせる。
既に屋敷のあった森を抜け、走る道も獣道からコンクリートの道路へと変っていた。

「んで、デイブレイクはいったい、“グラインダー”で何をしようとしてやがるんだ？」
「ふむ……。それを話すには、ジョーカーマシンの成り立ちから話さなければならんだろう。長くなるが———」
「どうせ直ぐには辿り着かん。道中の子守唄みてーなモンだ」

単車を走らせ向かう先は、グラインダーを修理する設備のある場所だ。
そこまではまだまだ時間が掛かり、長話には調度良い。
軽口を飛ばしたリヒトだが。

「寝るなよ」
「冗談を察しろ。いやマジで」

――――この女、マジで扱いづらい。
思わずこめかみを押さえたリヒトに、後ろに居るフェリアは静かに話し始めた。

＊　＊　＊

「信じらんねぇ……」

フェリアの話が終わるやいなや、リヒトは呟いた。
それも仕方の無いことと言えよう。
今まで頼りにしてきた戦場の華、ジョーカーマシンの動力が“魔力”だ、などという荒唐無稽な話だったのだから。
彼女が言うには、ジョーカーマシンのエネルギーは“魔力”と呼

ばれる空気中の成分をエネルギー変換して使用しているらしい。
一般に浸透させなかったのは、国が利益を独占するためとも、単に利用効率が悪いこととともされていたという。
ただ、その情報が魔力の真贋を明らかにすることは無い。
しかし、リヒトは半分納得した気もあった。
何せ、“グラインダー”の出力は通常のジョーカーマシンとは桁違い。
それこそ、規格外の代物であったからだ。
鋼鉄製の巨人を音速に近い速度で飛ばすのは、現代科学では不可能であろう。

「マジで荒唐無稽だな、オイ」
「まだ、話は続きがある。“グラインダー”は、その核に特殊なエンジンを積んでいるんだ」
「大方“魔力のエネルギー変換効率が高い”とか、そんな感じだろ？」
「よく分かったな。その通りだ」

そのことに関しては、概ねリヒトも見当がついたらしい。
納得したような声音で言う。
グラインダーの特異さは、操縦した本人が一番分かっているのだろう。

「問題は、そのエンジンが世界に限られた数しかない、ということだ」
「なるへそ、そりゃあ争いも起きるわな」

あれほどのスペックを持つグラインダー。
戦時中にあれば、どこの国もが喉から手を出してでも奪い取るだろう。

そして、それを狙い暗躍する組織、デイブレイク。
危険な存在である事は、既にリヒトも察していた。

「読めたぜ、テメェの経歴。概ね、エンジンを狙うデイブレイクから、同じくエンジン持ちのグラインダーを持って逃げ出してきた、って感じか」
「そうだ。デイブレイクの掲げる野望は……余りにも、危険すぎる」
「んで、その危険な野望ってのは一体？まさか世界征服でもやらかす心算か？」
「確かに、エンジンがあれば一国程度ならば落とせるだろう。だが、そんな生易しいものではない……」

いつものリヒトならば一笑に付す所であったが、既に当事者であった故に、半ば本気で問う。
しかし、フェリアは浮かない声音で言葉を止めた。

「じゃあ何だよ。もっと、世界的規模の野望ってのか？」
「……聞きたいか？」

続きを促すリヒトに、フェリアは躊躇いがちに一度だけ問う。
だが、リヒトの腹は決まっていた。

「当然。既に俺ァ当事者だぜ？俺にも、知る権利っつーのがあるだろうが」
「……そうか」

リヒトが初めて、この面倒ごとに自ら肯定する意見を出した。
その理由は、決して子供じみた八つ当たりのためではない。
彼の心に確実とされる理由は見当たらなかった。

が、強いて言うなれば、リヒトの腰に回されたフェリアの細い腕。
それが、まるで不安を訴えるように力強く締め付けていたからであろうか。
フェリアが安堵の息を漏らした後、リヒトは腰に回された腕を叩いて続きを促した。

「奴らは新しい世界を創る気だ。２２のエンジンを使ってな」
「世界を創る……正直胡散臭い話だが、マジなのかそれは？」
「残念ながら大マジだ。貴様の考えているものとは少し離れているかもしれないがな」
「ふーん……」

興味無さそうにリヒトが鼻を鳴らした。

「興味無いのか？世界の危機だぞ？」
「要は俺が“グラインダー”をデイブレイクに渡さなきゃいいんだろ？なら、起こらない。起こらないことを心配してもなぁ……」

最早、不遜とも呼べるほどの大した自信だった。
しかしその表情には何ら揺らぎは無く、至極真面目に放たれた言葉であるのだろう。
それに頼もしさと危うさを感じながら、フェリアは呆れたように首を竦めた。

「それよりも、だ。２２のエンジンってことは……」
「そう。エンジンは全て、タロットカードの大アルカナに擬えて作られている。数も合計、２２だ」
「やはり、グラインダー起動の時のアルカナマシンってのは、そういうことかよ」

心の中の疑問一つ片付けると同時に、懸念も生まれる。
２２のエンジンの一角、グラインダー。
前回の敵ファウストの駆るバベルもまた、アルカナエンジンを積んだものであろう。
でなければあの、物理法則を無視した空間跳躍は不可能である。
そして、未だ発見されない総計２０のアルカナエンジン――――

「ぞっとしねぇ話だ」
「だろう？各地に争いの火種が残っているようなものだ。私はこれを除く為にデイブレイクを抜けた」

言うに易し。
しかし、その言葉の軽さからは分からぬほど、その行動は簡単ではない。
斥候としてジョーカーマシンを繰り出せるほどの組織を、一人で相手取るのだ。
並みの決意で出来る話ではない。

改めて、リヒトはフェリアと名乗る女をバックミラー越しに見た。
長い白髪は日の光に煌き、その表情に変化は無い。
だが、その顔は出会ったときよりも強く、美しく見えた。

使命感――――そんな安い言葉では表現できないほどの、重い決意。
魂に刻まれたその誇りが、リヒトの魂にも火をくべたのか。
朧げながらもまた、リヒトも決意を固めようとしていた。

「仕方ねェな。リターンマッチのカードが組まれるまでは、俺も協力してやるよ」

そう宣言するリヒトに、フェリアは頷く。

「助かる」

と、一言残して、腰に回す腕できつく抱いた。

嘗て戦場にて孤独に戦ってきたリヒトにはそれが、とても暖かいものに感じられた。

＊　＊　＊

目的地である場所は、再び森の中であった。

しかしその様子はリヒトの屋敷周辺とはうって変わり、しっかりと整地された森だ。

これが戦災の焦土の上に、人の手によって作られた森である事は記憶に新しい。

そしてその森を分割するように、一本のコンクリートの道が通っていた。

その先には、この地方の守護を担当する存在がある。

「地方守備隊機動兵器駐屯基地……本当に、大丈夫なんだろうな？」

「安心しろ、ここの隊長とはダチだ。グラインダーの情報は漏れねぇだろう」

まだ訝しげな視線を送るフェリアに対し、飄々とその基地の廊下を歩くリヒト。
すれ違う人間が時々挨拶をしてこなければ、その言葉の信用性は欠片も無かった。
だが、目の前の存在は“英雄”。
第三次世界大戦の最大功績者なのだ、ということをフェリアは実感させられていた。

「それに、あわよくば協力が得られるかも知れねぇぞ？」
「一体、どういうことだ？」

その言葉に、リヒトは笑って答えた。

「人間、お人よし過ぎるのも困りものってコトだよ」

言葉の意味が分からないフェリアは首を傾げる。
そうしている間にも、目の前を行くリヒトは廊下の突き当りで立ち止まっていた。
鉄の簡素な扉に掛けられたプレートには“隊長室”と乱雑に書かれている。
戸を二度叩き、リヒトは扉を開いた。

「――――久しぶりだな。大戦以来だから、ざっと半年か。しかし、いきなり女連れとは、やってくれる」
「そう言うなよ、ベルランド。俺だってんなことになるたァ思わなんだ」

ぼやく男は、精悍な顔つきを一切崩さずにいた。
ぱりっとした軍服は新品同様であり、撫で付けられた黒髪もその

几帳面さを表すようである。
吊り気味の瞳の色は燃え上がるようなバーミリオン。
「改めて、我が基地へようこそ……“英雄”リヒト・シュッテンバーグ」
「存分にサービスして貰うぜ。“猛禽”」
その名を、ベルランド・ヴィスビューと言った。
リヒトと同じく、第三次世界大戦中に多大な功績を残した一人である。
「……で、お前の後ろの御仁は一体？」
「あ？まぁ、色々あるのよ。今は差し詰め、俺の依頼主ってトコか」
「依頼？探偵業者でも始めたのか？」
「始める訳ねぇだろ。絶賛隠居中だったトコに、コイツが上がり込んできたんだよ」
「ほう、押しかけ妻、と」
「殺すぞテメェ。言っとくがアイツと何ら関係は無い」
「嘘吐け」
「マジ殺すぞ」
……だが、この会話が英雄二人の会話に聞こえるであろうか。
ただ能天気にその日の話をしている学生と何ら変らない問答である。
フェリアは無表情に確かな怒りを浮かべると、問答を続けるリヒトの耳をつまんだ。
「……リヒト。いい加減にしろよ」

あまりにも冷たい一言に、リヒトは額に汗を浮かべて頷いた。
その声は戦場の誰よりも冷たい声だった――――と、リヒトの言は後世に語られている。

「本題なんだが……あー、それがだな。格納庫の隅と、ついでにジョーカーマシンの修理パーツを回して欲しいんだわ」
「何だと？何処かで戦闘したのか？」

驚きの声を上げるベルランド。
それをからかおうかと声を上げかけたリヒトだが、背後からのプレッシャーにてそれを断念する。
言い淀みながらも、何とか続ける。

「そんなようなモンのような、そうでないような……。ともかく、ジョーカーマシンを修理させてくれ。これじゃあ商売にならん」
「むぅ……暫し、待て」

言い、ベルランドは執務机に備えられた内線電話を取った。
恐らく格納庫の人間に連絡でもつけるのだろう。

――――商売に、の件は完全にリヒトのアドリブである。
しかし、こう言った方がベルランドの協力を得やすい事は分かっていた。
見た目や態度に反して、彼は情に篤く、困った人間を見捨てられない性格なのだ。
卑怯な気もするだろうが、リヒトはそれを特に気にしていなかった。

「一つだけ、条件を付けさせろ。貴様らが何を隠しているか。それを話すことが、条件だ」

「オイオイ……何言ってんだよ。疑り深いヤロウめ……」

リヒトは困り顔で背後のフェリアを見た。
寡ばかりの沈黙があったが、フェリアは静かに頷く。
きっと、背に腹は変えられないようなものだろう。

リヒトはベルランドに、荒唐無稽なその話を語り始めた――――

＊　＊　＊

「はぁー……。今日はどっと疲れたわ……」

ベッドの上、リヒトは盛大に溜息を吐いた。
両手を後ろ手に組み寝転がる。
疲れた心身にその柔らかいマットレスは非常にありがたかった。

「まさか、殆ど知っているとはなぁ……。俺だけ知らなかった、ってのも癪な気分だぜ」
「仕方があるまい。それに、一般人であれほどの知識を持った人間は稀有だ」

ベルランドは、リヒトの話したデイブレイクの存在以外は知って

いた。
魔力のことも、それに伴って巨大な魔力反応が存在することすらも、だ。
それら全てを独自の趣味で解析した、というのだから手に負えない。

「昔から知識欲はハンパなかったが、あのレベルになると流石に引くわ……。人間って怖い」
「独自研究で魔力を明らかに出来る人間など、そうそう存在しないから安心しろ」

アルカナエンジンの存在もあり、ベルランドは想像以上に快くグラインダーの改修を受け入れた。
が、変りに提示された条件がある。
そのことを考えると、リヒトは再び憂鬱気に溜息を吐いた。

「模擬戦……ねぇ。しかも、俺のグラインダーはまだ使えないんだろ？」
「私のグラインダーだがな」

模擬戦。
リヒトは、アルカナマシンを託すに相応しい存在かを試す、という建前だ。
が、実体はベルランドからリヒトに対する一方的な挑戦といっても良い。
何せ、戦時中は互いに腕を競い合った仲だ。

「勝っても負けてもいいんだ。気楽にやれ」
「しかしなぁ……この基地にはっつーか、アイツの近くにはアレが居るからなァ……」

アレ、というリヒトの言葉にフェリアが首を傾げる。
それとほぼ同時に、客室である扉のドアが激しい音と共に開いた。
「よーっすリヒト先輩！元気してたましたか！？」
「来たよ、ハイテンション小僧……」

ハイテンション小僧、と呼ばれたが笑う。
金髪ににきび跡の残る顔で、満面の笑みを湛えていた。
それはまるでハイスクールのお調子者、と言った風体だが、実際にそうなのであろう。
騒々しいその男に、フェリアは僅かに顔を顰めた。
なるほど、アレが、アレか。

「ハイテンション小僧なんて呼ばないで下さいよぉ、俺にはジョークって名前があるんですから」
「冗談は名前だけにしておけ……。んで、何の用だ？」
「へへ、実は明日、先輩とウチの隊長が模擬戦やるって聞いたんでねぇ……！」

軍服の胸ポケットから、数枚の紙を取り出した。
チケットサイズの、長方形の紙である。

「明日の試合のベットっすよ！先輩の連れのねぇさんに一枚差し上げようと思いまして！」
「わ、私かっ！？」

話を振られると思っていなかったのだろう。
珍しく驚いた声を上げたフェリア。
そんなフェリアに近づき、ジョークはその手製のチケットを握ら

せた。
紙面に躍る文字は“リヒト・シュッテンバーグ”である。
「テメェ、いつもの事ながら人の戦いを勝手に賭けにすんなよ！」
「じゃあ、明日の試合頑張ってくださいよ！今回も俺、先輩に賭けてるんすからねっ！！」
言いたいことを言って満足したのか、駆け足でジョークは去っていった。
肩を怒らせるリヒトに対し、フェリアは笑っている。
「ちょ、テメェ、何がおかしい！」
「いや、貴様も存外、愛されているなと」
「誰がだっ！！」
そこで、リヒトは気付いた。
フェリアの笑顔を初めて見た事に。
いつもの無表情に比べて、その顔の何と可憐なことか。
まるで、無垢な少女のような、自然な笑み。
それを見て、リヒトは———
「くそっ！こうなりゃトコトン勝ってやろうじゃねぇか！完膚なきまでに！」
言いながら、高らかに笑った。
フェリアの笑顔を見て機嫌を直したとしたのだとしたら、現金な男である。

かくして、“英雄”リヒト・シュッテンバーグのとある一日は終りを告げた。
日常は終りを告げ、新たに始まる日常。
そこに、リヒトは一体何を見、何を聞き、何を感じるのか。
彼の人生において、最も激動の一年が始まろうとしていた――――

第三話　ジョーカーマシン（後書き）

説明回ってヤツです、ハイ。
次回思ったより早くバトれると思いますです、ハイ。

第四話　猛禽と英雄

『貴様、舐めているのか？』
「ンな訳ねぇだろスカポンタン。テメェにはこれで十二分だ」
クリアな音声通信の先で、“猛禽”ベルランドは静かに怒っていた。
それを分かりながら、リヒトは挑発するように声を上げる。
辺りは演習場と銘打たれた森の中の広場だ。
機動兵器が暴れても問題ないほどの更地は、既に荒野といって差し支えない。
近くには演習を観測する為の白い観測塔が建てられていた。
その中にはきっと、野次馬好きの軍人が大挙して押しかけているのだろう。
リヒトは、チケットをにやけ面で売り払うジョークの姿を幻視した。
どちらが勝ったにせよ、ジョークはきっと上手く立ち回るのだろう。
それが癪に思え、リヒトの心にはとある考えが浮かんだ。
「負ける気も毛頭ねぇし、手加減する気も更々ねェよ」

『ふざけるのは言動だけにして貰おうか。ならば、その機体は一体何だと思っているのだ』

リヒトが乗り込んだ機体は、あまりにも無骨。
鉄色の四肢はずんぐりとした四角、頭部には赤いモノアイ。
まるでガラクタの寄せ集めの巨人は、俗に第一世代と呼ばれたジョーカーマシンだ。
格納庫の隅に眠っていた物を、リヒトが借りる形で持ち出した機体である。

それに相対するジョーカーマシンは、漆黒。
黒の装甲板の所々に走る銀色の線が威圧する。
巨大な剣の様な頭部から、二対の橙色が怒ったようにリヒトのトランプを睨みつけていた。

「第一世代ジョーカーマシン・トランプ。クッソ弱ぇ雑魚機体だ」
『やはり、舐めてるだろう。そう、貴様はもう少し利口に生きたほうが良い』

ベルランドは大層お怒りのようで、口調がどんどん刺々しくなっている。
しかし、リヒトにはこの展開こそが望んだものであった。

彼が“クッソ弱ぇ雑魚機体”を選択した理由は二つある。
一つは、現状のようにベルランドの頭に血を上らせるため。
ベルランドはお人よしの真面目人間だが、同時に、生粋の武人である。
武人は、戦士として侮辱されることを極端に嫌う。
見よ、彼の怒り様を。

「それに、この機体なら幾らぶっ壊してもいいだろ？」

もう一つの理由。

その言葉の意味は彼にしか分からない。

『もういい。貴様と問答をするのは時間の無駄だ。後悔しても知らんぞ』

「ハッ、誰が。テメェこそ、御託並べてねぇでさっさと掛かって来な」

旧友と呼ぶには険悪で、怨敵と呼ぶには程遠い。

それでも、一触即発的な空気の中、二機のジョーカーマシンは一斉に構えた。

『行くぞ』

冷たい声と共に、漆黒の巨人――――ベルランドのジョーカーマシンは上腕を捻る。

腰だめに構えられた五指の間に、煌く刃が見えた。

ジョーカーマシン専用の大型ナイフ。

それ即ち、ベルランドを“猛禽”たらしめる“爪”であり、“嘴”。

鋭く、一点を狙った突きが放たれる。

「っ！」

空気の抜け出るような音と共に、リヒトは素早く動いた。

卓越した操縦技術が間一髪、猛禽の爪を回避することに成功させる。

無論、虚空を貫いた爪による横薙ぎの追撃を回避することも怠ら

ない。
しかし、猛禽の攻撃は一度や二度では終わらない。
『ちょこまかと……！』
ベルランドの攻撃を回避するため、リヒトのトランプは高空へと跳んでいる。
猛禽はその爪を手首のスナップだけで投げつけると、すぐさまに新たな爪を腰から取り出す。
そして、自らの投げたナイフに追随するように跳んだ。
「そんな攻撃、痛くも痒くも――――」
リヒトは迷わず、左腕を犠牲にナイフを防御した。
その左腕を振り回すように、空中で錐揉み回転をする。
「ねぇんだよッ！！」
『な……！？』
そのまま、左腕をベルランドの持つナイフへと叩き付けた。
弾かれた八本のナイフが宙に舞い、同時に、トランプの無骨な左腕も舞う。
呆気に取られた声を残して、ベルランドの機体は上体を煽られて吹き飛んだ。
これ幸い、とばかりにトランプは着地、距離を離す。
『相変わらず無茶苦茶だな、貴様は』
「けっ！テメェも随分ご機嫌な機体に乗ってんじゃねぇか！」
『第二世代ジョーカーマシンに独自の改造を施した、言わば“第

三世代ジョーカーマシン”だ。負ける道理は無い』
「それに対して、俺のジョーカーマシンは第一世代……ってか。燃えるじゃねぇか」
『こちらとしては、弱いもの虐めをしている気分なんだがな』

やれやれ、とでも言うように漆黒の機体は首を振った。

『“第三世代ジョーカーマシン”……“キリング”は、未だ不敗。仕方ないと言えば仕方ないのだが』
「悪いな、第三世代の不敗神話はここまでだ」
『ほざけ……！』

リヒトの減らず口に合わせて、キリングは飛び込む。
その両手には変わらず、鋭い銀色の爪を覗かせていた。
鋭く、低く踏み込んだ。
差し詰めそれは、肉食獣の構え。
トランプの足元から、掬い上げるようにナイフの光条。
対するトランプは、右足を高く振り上げた。

「潰れろ！」

右足とジョーカーマシン用ナイフ。
二つの兵器が火花を散らし、互いを潰そうと拮抗、磨耗する。
先に折れたのは———右足。

「くそ！整備サボってたろコレェ！」
『整備は欠かしていない。我らが整備兵を愚弄するな』

言葉と同時に、バランスを崩して倒れたトランプに追撃をかける。
次の動作は、飛翔。

両手に持った四対八本のナイフを煌かせ、上空に踊る。
太陽を背にした姿、まさに猛禽。
その爪は獲物を抉り、引き千切る。

『おおおおおおおおっ！！』
「クソッたれ！！」

組み付かれるトランプ。
四肢には既に満足な戦闘力は残ってはいない。
胴体にはがっちりと片手のナイフが食い込み、ちょっとやそっとでは離れそうに無かった。

だが、リヒトはこの程度では動じない。
その証拠に、コックピットで彼は笑っていた。
獰猛な、獣のような笑みである。

ベルランドが違和感に気付いたときには、既に組み付いた後。
戦いの間にできる、独特な“溜め”とも呼べる空気。

「喰らえアホンダラァ！」

トランプに残された右腕。
この模擬戦に挑むに際して唯一追加した兵装。
超短距離にして、絶大な威力を誇る。
その兵装の前に、全ての防御は無意味と化す。
武装の名は———

「パイル」

貫く。

その一念だけで、右腕の武装は放たれる。
しっかりと組み付いてしまったキリングに、避ける術は皆無。
『うぉおおおおおおおおおおおッ！！』
だが、ベルランドは吼える。
全力で後退しようと、負けてなるものかと、叫ぶ。
決して諦めぬ、武人としての誇りが、彼の機体を動かそうとしていた。
しかし。
「――――バンカぁあああああっ！！」
一切の容赦無く、右腕の武装は漆黒の装甲を貫く。
燃え、橙色に染まった装甲片を撒き散らし、キリングはその場で踏鞴を踏んだ。
『貴様……！最初からこれを狙って……！』
「近接攻撃に頼り過ぎる節があるからな、テメェは。それが分かればあとは簡単よ。秘儀・やられたフリ……ってか？」
『屁理屈を……！』
リヒトは、最初からこの一撃に賭けていた。
圧倒的な性能差を埋めるには、パイロット自身の慢心を突くしかない。
故の、第一世代ジョーカーマシン。
結果は、見ての通り――――
「言っただろ。テメェの不敗神話は俺との“相打ち”で終わりだ。

俺も負けてはいないぜ？」

何よりも、とリヒトが続ける。

「ジョークの掌で踊らされるのは御免だね。相打ちが一番、上等な結果だ」

『……馬鹿だろ、貴様』

ベルランドは、諦めたように溜息を吐いた。

＊　＊　＊

「払い戻しはコチラでーす……はい、コチラ払い戻しになりやーす……」

がっくりと肩を落としたジョークは、観測塔の隅にいた。

軍人に売り払った紙切れを再び回収する作業に追われている。

心なしか、その金髪もへたったようにも見えた。

「なるほど、確かに勝ったな。模擬戦にも、ジョークにも」

「それってどういう意味っすかぁ！こっちは商売上がったりですよぉ！」

呟くフェリアに、形無しといった体でジョークは泣きついた。
「昨日アイツは完膚なきまでに勝つ、と言った。詰まり、ベルランドには負けず、貴様に儲けさせないのが勝利条件」
「ってことは……」
「相打ちという結末が、一番貴様が儲からないことを知っていたのだな」
講釈するフェリアに、ジョークは再び声を上げた。
「そりゃあ嫌がらせじゃないっすか！そんなんねぇっすよぉー！」
「まあ、自業自得ってヤツだな」
納得するように頷くフェリア。
無表情ではあるが、その心はいつもよりも穏やかなものであった。
だが、その折。
「緊急警報！緊急警報！」
観測塔内にサイレンの様な音が響いた。
「な、なんなんすかぁ！？」
「５時に１００００の距離から熱源反応！この反応は――――」
狼狽するジョークの声に応えるかのように、オペレーターの一人が声を上げた。
「電熱反応……！？」

訝しげな声に、ただ一人、フェリアが反応する。

「レールガン……完成させていたか、デイブレイク……！！」

「何だって！？レールガンだと！？」

その驚きが周囲へと伝播していく。

まるで蜂の巣を突付いたような騒ぎの中、ジョークだけはただただ目を丸くしていた。

「アネさん、レールガンってまさか……！」

「電磁加速で鋼鉄の弾を放つ銃。恐らく、貴様の想像通りの代物だろう」

「じゃあ……遠距離狙撃！？」

ジョークの顔からさーっと血の気が引いていく。

在り得ない筈だ、だって、レールガンは――――その言葉がジョークの口から飛び出すことは無かった。

この時代、レールガンを製造する技術は未だ生まれてはいない。

だが、一般人の知らない要素――――魔力を用いることで、それは秘密裏に実現していた。

尤も、それを知るのは魔力の存在を知る一部の科学者のみであったが。

「発射予測シークエンス、カウントダウン！」

「隊長に通信繋げ！早くッ！」

喧騒の中、髭面の男の怒声が響いた。

一つずつ減っていく発射までの猶予、果たして何を理解しろと言うのか。

ようやく通信が開いたときには、残り三秒を切っていた。

「隊長！避けて下さい！！」

髭面の男の声は届いたのか。

その答えを知ることなく、管制塔の面々は視界を襲う白色に目を閉じた――――

＊　＊　＊

『――隊長……けて――さい……！』

「……ッ！？」

コックピットには、ノイズ交じりの酷く焦った声が響いた。

それが己の部下の声で、ベルランドは狼狽する。

満足に動かないキリングで、それでも何とか回避しようとした。

「っ！！」

が、動かない。

胸の直下に穴を開けたジョーカーマシンは、微動だにしなかった。

微かに制御の利く腕を、コックピットの前で構えた。

銀色のナイフは総て取り落としてしまっている。
己の命を護るのは、漆黒の装甲板のみ。
そう思っていたベルランドの前に、立ち上がる影。

ボロボロの体。
左足だけで器用に立つ機体。
第一世代ジョーカーマシン・トランプと、その搭乗者リヒト。

「馬っ……！！」

叫ぼうとした時にはもう遅い。
蒼い光の奔流が、トランプの肩越しに見えていた。

圧倒的な質量。
そして、圧倒的な速度。
進路の総てを破壊する、一筋の禍星。

「鹿野郎っ！！」

だが。
ベルランドは見る。
立ち上がったトランプから発せられる、ただならぬ“白い障壁”。
比較的大型なジョーカーマシンであるトランプの身体を包んで、なお収まらないこの波動を。
言わば、それはバリア。
白銀の盾が、この場の二人を護るように展開された。

それはこの場に在り得ない筈の力。
この場にフェリアが居たのならば、驚いたのであろう。
その反応は、彼らが“エンジン”と呼ぶ存在を起動したときに訪

れる光。

『Ａｒｃａｎａ　Ｏｖｅｒ――――！！』

刹那、聞えるはずの無い、リヒトの雄叫び。

守護の鍵語。

護るの一念で開放される、魔力の力。

それはあらゆる存在総てを不貫とし、護れるモノは無いと語る。

その証拠に――――見よ、その後姿を。

「……！」

トランプは、その場に立つ。

威風堂々と、その片足立ちのままで。

消し飛んだ荒野の中央に、護るべき者を引き連れて。

リヒト・シュッテンバーグは、倒れない。

『生きてるか？“猛禽”』

人を小馬鹿にするような調子で、言う。

聞きたい事は多かったが、それでも、ベルランドはこの言葉を選んだ。

「助かったぞ……“英雄”」

＊　＊　＊

「レールガンを放った輩は取り逃した。目撃者の話によると、突然“空間の割れ目”に消えたらしい」
「っつーことは、やはり……！」
「間違いない。デイブレイクの仕業だろう」

リヒトの言葉に、フェリアは同意を返した。
レールガンを製造し、尚且つ、“空間の割れ目に消える”不可解な現象を引き起こせるのはデイブレイクのみ。
リヒトは、耳朶に響く軽い声を幻聴する。

「撃ったのは黒くてデカイ機体か？」
「いや、報告によれば、白い翼を持った機体だと聞いたが」
「っち、ファウストの野郎じゃなかったか」

半ば本気で悔しがるリヒトに、ベルランドが冷徹な視線を送った。
それを尻目に、フェリアは考え込むように目線を下ろす。

「“正義”……グレイヴキーパーか」

呟いた。
その声音にはどこか恐れのようなものがある。

「正義……ってことは大アルカナの八番。また、アルカナエンジ

ン搭載型かよ」
「……これで、敵に二機目の強敵が確認された訳だな。他にも居るのか？」
ベルランドが警戒するように言う。
フェリアはリヒトの頷きを見ると、再び口を開いた。
「私の知るところで実戦投入されているのは“女教皇”、“正義”、“塔”。使われてはいないが所持を確認しているのが“運命の輪”だな」
「うへぇ、三機も居んのかよ」
吐き捨てるようにリヒトは言った。
一機だけでも戦力のバランスを崩壊させる機体が、三機。
そのいずれも敵という現状に、誰もが頭を痛めていた。
だが、一人だけが静かに顔を上げる。
「この大陸の東端に、ハルピュイアという街がある。そこには魔力研究に付き合ってもらった知り合いの科学者が居るんだが」
それがどうした、とばかりの視線と、意図を読めない冷徹な視線。
二つの視線が刺さり、一息置いてからベルランドが言う。
「そこには新たなエンジンがある。俺も現物を見た。今も、その科学者が管理している筈だ」
「マジかよ！っつかそんなアッサリ見つけられて大丈夫なのかよ！？」
「……つくづく驚かされるな。幸運の神にでも惚れられているのか？」

二者二様の驚き様を呈する二人。
しかし、当のベルランドは興奮も無く、至極淡々と事実を述べる。
「フェリア。君には少尉相当の権限をやろう。アルカナエンジンについて、調査しに行ってきてくれ。バックアップは、全責任を持って俺が担当する」
「助かる」

短い言葉を返すフェリアに、ベルランドは満足そうに頷いた。
横目でリヒトを見ると、期待と不満が入り混じった珍妙な表情をしていた。

「俺は？」
「貴様にやる官位は無い。強いて言うならば———“お手伝いさん”なんかはどうだ？」
「オイ、マジで屋上来い。大体、何で俺じゃなくてコイツの方が上なんだよ」

文句をつけるリヒトにベルランドは、敵わないとばかりに両手で耳を塞いだ。
納得のいかない顔をしているリヒトの肩にフェリアの手が置かれる。

「まずは落ち着くことだ。貴様の今の言動こそが“お手伝いさん”であると知れ」
「はぁ？意味わかんねぇ」
「そういうことだ“お手伝いさん”。分かったら、さっさと行ってきてくれ」
「けっ！わーったよ！人使いの荒いヤツだぜ……」

リヒトは面白く無さそうに鼻を鳴らして、隊長室を出た。

「アイツは戦えるが、多少性格に難がある。子守、頼まれてくれるか」

聞えないであろうと高をくくりつつも、ベルランドは言う。

それは貴様も同じでは――――言いかけて、フェリアは言葉を飲み込んだ。

「悪いが、保障しかねる。アイツは一人で勝手に飛び出す“馬鹿”だからな」

「ああ、分かっているとも」

ベルランドの言葉を背に、フェリアはリヒトの後を追って部屋を出た。

その姿を見て、ベルランドが口の端を上げる。

「“英雄”が変人なれば、その友もまた“変人”か……。存外、様々な人間に見つめられているようだぞ、“英雄”よ」

狭い隊長室では、ベルランドの押し殺した笑いが響いていた。

第四話　猛禽と英雄（後書き）

予定していたプロローグ的なパートが終わりました。
次回から多少、毛色の違う感じになるかもしれません。

第五話　吹雪の夜に

同緯度に存在しながらも、ハルピュイアはリヒトの居た地域よりも寒かった。
それは山脈を隔てた北風が吹き降ろし、この盆地となった場所に寒さを齎しているせいでもある。
季節は秋の終り口であり、粉雪が積らない程度に降っていた。

「寒ぃ……マジで、寒ィいいいい……」

そんな中、リヒト・シュッテンバーグは歯の根も合わない様子だった。
がたがたと震える身体には、いつも通りの暗緑色のコートのみである。

「“英雄”ともあろう者がだらしない。兵士の時に贅沢は言ってられなかった筈だろう」

吐き捨てるは、階級上は“少尉”となっているフェリア。
黒いコートの前を開け放っているにも関わらず、一切、彼女は寒がる様子を見せなかった。

「ジョーカーマシンのコックピットは空調が付いてるんだよ……！寒い外に生身で出た事は無いっつの……」
「軟弱者め」
「五月蝿ぇ……勝手に言ってろ……」

リヒトは再び、現地で買ったマフラーに口元を埋めた。
そもそも、この地方が寒いなどとは聞いていなかった――と、リヒトは主張する。
防寒着の一つも無い格好で、この時期を歩くのは身体に悪い。

自然と早まる脚が、目的地に急ぐ。
一刻も早く暖を取りたい。
その一念で既にリヒトの頭では地図が出来上がり、目的地に辿り着くを今か、今かと心待ちにしていた。
既に心此処にあらず。
故に、リヒトは気付いていない。

「ところでリヒト。先に行くのはいいのだが、目的地が分かっているのか？」
「あぁん？当たり前だろボケ。こっから先へ直進して……アレ？」

リヒトは周りの町並みを見渡すと、近場にある道路標識を見つけて歩み寄る。
その青い標識を見つめる内に、見る見るとリヒトの顔まで青くなっていく。
一方その事実を先んじて知っていたフェリアは、その様子を淡々と眺めていた。
そこにある感情は“呆れ”。
何故なら、彼女は決して寒いわけでは無いからだ。

「マジかよ……通り過ぎたとか……」

絶望した声でリヒトが呟いた。

「貴様はもう少し、日常生活での観察眼を磨くべきだろう」

「……」

返す言葉も無く、リヒトは己の踏みしめた雪の足跡を辿っていく。
その後ろを、呆れたような目のフェリアが追った。

———歩くこと、更に二十分半ば。
リヒトが歩くことに疲れを感じてきたところに、それは見つかった。

「……マジでここか？本気か？ベルランドの野郎、嘘吐いてんじゃねぇよな？」
「違うと、信じたいところだが……今回ばかりはお前に同意だ」

何故、リヒトが目的地を見失ったか。
それは、彼が道中にそれらしき物を見つけられなかったことにも一因がある。
“猛禽”ベルランドに渡された目的地を記したメモ。
そこには『ウエマツ研究所』と書かれていたのだが———

「ただの、アパートじゃねぇか」

その実、住所にあったのは小汚いアパートメントであった。
築何年かすら分からないコンクリートの壁は、塗装が剥がれてボロボロ。
錆だらけの梯子に、荒れ放題の裏庭を見るに、それは廃墟として認識されていてもおかしくないほど。

「ま、まあ待て。地下研究所とかかも知れんぞ」
珍しくうろたえた様子のフェリアが、フォローをする。
訝しがるリヒトは、それでも渋々、といった体で敷地へと入り込んだ。
――――その瞬間である。
「隙アリだ、侵入者っ！！」
「ぐぉうッ！？」
リヒトの顎に、上昇志向の拳骨が入った。
揺れる脳髄、込み上げる吐き気と痛みに耐えながらも、リヒトは何とか正面を見ることに成功する。
そこに居たのは、珍妙な少女。
「むぅ、コレに耐えるとは中々にタフネスだなっ！だがぁ！」
栗色のショートボブに揺れる、ネコミミ。
白と黒の色彩鮮やかな、メイド服。
場違い、そう、あまりにも場違い。
「これでっ！」
素早く、少女はステップを踏んだ。
左右へとダッキングしながら繰り出される、華麗なアッパー。
寸分違わずに、リヒトの顎に今一度直撃。
「オネンネだよっ！！」

その声を最期に、リヒトの意識は途切れた。
糸の切れた人形のように後ろへと倒れ込む。
その様子を見ていたフェリアは、その様子を欠片も気にすることなく言った。

「ここは、ウエマツ研究所で良いのか？」
「そういうアンタ様は誰なんだい？マフィア的な人なら、二人仲良くオネンネして貰うけどさっ！」
「私はフェリア。そこで無様に転がっている男はリヒト。ベルランドに要請を受けて来た」

少女は品定めするようにフェリアを眺めた。
その挑発的な視線を気にもせず、フェリアは胸元のポケットから紙を引き出す。
ベルランドが直筆した紹介状だ。
少女はそれを受け取って一瞥すると、それをぽいと捨ててしまう。

「なーるほどねー！ベルランド様が言ってた助っ人ってのはアンタ様達か！確かにここは、ウエマツ研究所！アンタ様達の目的地だよ！」

少女はくるりとその場で回ると、備え付けの階段へと歩き出した。
エプロンドレスの裾が可憐に翻る。

「付いて来るといいよ！御主人に会わせてあげるからさ！」

それだけ言うと、まるで山猫のような軽業で階段を昇っていく。
少女を追おうと一歩踏み出しながら、フェリアは思わず呟いていた。

「……御主人？」

＊　＊　＊

改めて室内を見渡せば、そこにあるのは何の変哲も無い男の部屋だった。
しかも、中は男の私物であろう、漫画雑誌やＰＣソフト、ゲーム等が無造作に転がっており、お世辞にも綺麗な部屋とは言えないだろう。
そんな部屋の中、転がっていた物を適当に避けたスペースに、リヒトら二人は座っていた。
部屋の主はその対面にある椅子に座り、不敵に笑む。

「で、御主人――――ウエマツってのは、アンタか？」
「そう、僕がここの研究所の所長、コージ・ウエマツだ」

コージ・ウエマツと名乗った男。
シャツは緩く、髪は伸び放題のものを後ろで束ね、銀縁眼鏡もずれたまま。
ずぼらな性格が目に見える上に、肉体は少々肉付きが過ぎるものがある。
リヒトは幾日か前にテレビで見た“オタク”なる人種を思い出し

ていた。
言われてみれば、ウエマツの名前は“オタク”で有名な極東の島国でのスタンダードな名前である。

「アンタらは？」
「リヒト・シュッテンバーグ。アンタらみたいなのには“英雄”って言った方が分かり易いか？」
「ふーん」
「ふーん、ってお前……」
「私はフェリアと言う。こいつの保護者みたいなものだ。そっちの少女は？」

がっくりと肩を落とすリヒト。
それを無視して、フェリアが話を進めようとする。
ウエマツの視線で促されて、メイド服の少女が平らな胸を張った。

「アタシはフー！気軽にフーちゃんって呼んでね！」
「無い胸張るなよ。惨めに見えるぞ？」

隣でぼそりと呟いたウエマツの後頭部を叩きながら、フーは満面の笑みで言った。
その珍妙な関係に、彼らの力関係はありありと分かった。
だが、未だ二人には分からないことが多すぎる。

「そのメイド服は一体何なんだよ？」
「御主人の趣味だよ！」
「では、そのネコミミは？」
「僕の趣味だが？」
「じゃあ、何で御主人って呼ばせてるんだ？」
「「趣味」」

綺麗に重なる二人の声に、リヒトは大きな溜息を吐いた。
どうにもこの二人、両者共に変人らしい。

「……関わりたくは無い二人組みだな」
「……全く以って同感だぜ」

小声で呟くリヒトに、フェリアが同調した。
己の部屋にメイド姿の少女を囲み、ご主人と呼ばせる、自称研究所所長。
当の本人はさも当たり前であるかのようにどっかりと座り、足元に落ちていた漫画を手にとって読み始めようとしていた。
今は遠くに居るベルランドを恨みながらも、リヒトは話を切り出そうとする。

「んで、俺達の目的だが……さっきの様子を見るに、ベルランドから話は行ってるのか？」
「先日、電話が来たよ。まあ、僕が直接電話を取った訳じゃあないんだけど」
「アタシが取ったよ！」

ぴょこぴょこと揺れながら、フーは朗らかに笑っていた。
その頭をウエマツが撫でようとするが、髪に触れる前にその手を叩き落とされている。

「じゃあ何で俺を攻撃したんだよ！」
「うーん……怪しかったから、かな」
「……ウエマツさんよ、アンタんとこの番犬はちょっと凶暴すぎるとは思わないか？」

リヒトが話を振ると、ウエマツはフーの顔を横目で見た。
その時二人の目が合うが、とてもドラマティックなものではなく、むしろ、殺伐としたものであり。
冷や汗を流しながら正面に向き直り、ロボットのようにぎこちなく頷いた。

「そりゃあ――――禁則事項の質問だな、ウン」
「まあ、そんな事はどうでもいいんだ」

フェリアが場の空気を戻そうとする。
リヒトはもう少しフーに言いたかった事がありそうだが、渋々と話をする態勢へと戻った。

「私達が遠路遥遥ここまでやってきたのは、“エンジン”の調査をする為だ」
「――――アルカナエンジン。“魔力”をエネルギー変換する脅威の物質」
「そのアルカナエンジンを狙う組織が居る。その組織に対抗する為。そして、あわよくば壊滅させるためにも。それらの所在を知り、手中にすることが求められる。」
「成る程、それで僕が見つけたエンジンを使って、実験でもしようっていう事かい？悪いが、僕はもう実験はしないことにしたんだ」
「そりゃあ、また、どうしてだ？」
「そこまで君に話す義理は無いと思うがね」

リヒトは聞きたそうな表情をしていたが、フェリアによる無言の圧力で再び口を噤んだ。

「とにかく、エンジンの無事を確認するだけでもいい。協力して頂けるだろうか、ウエマツ所長」

「エンジンを狙う組織……ねぇ」
考え込むようにウエマツが唸った。
リヒトが首を傾げる。
「何だ？心当たりでもあんのか？」
「いや、まさかその組織って、マフィア的なものじゃあないよな？」
「マフィアぁ？一体何の関係が？」
「近頃、よく此処の近辺を見回っているようだからね。もしかしたらなー……と」
「はっ！そもそも、そんなちゃっちい組織がジョーカーマシンなんて用意できるかよ」
だよなぁ、と独り言のように呟くと、彼は天井を仰いだ。
再び考え込むウエマツに、何なんだよ、とリヒトが続ける。
答えを待つことなく、フェリアは得心したように口を開いた。
「概ね、事情は理解した。恐らく子飼いの組織か何かにやらせているのだろう」
「子飼いだ？デイブレイクってのはそんなにデカい組織なのかよ？」
「推論に過ぎないが、恐らくそうだろう」
フェリアの推論に、ウエマツが苦心の表情を浮かべる。
「参ったな……監視されているんじゃ、アルカナエンジンを回収できない」
「アルカナエンジンは一体何処にあるんだ？」
「連中のような奴に手に渡ってはならないと思って、とある場所

に隠したのさ。こうなると分かっていれば君たちに手渡したんだが……」
「直ぐに、取りには行けないのか？」
「取っている途中で横取りされるのが目に見えるからね。デイブレイクってのは相当強力な組織みたいだから、それこそ、ジョーカーマシンを使ってでも止めにくるだろうね」

一応、修理の完了した“グラインダー”を持ってきてはいる。
しかし、それを起動するのはあくまで最終手段であり、そうしないことがリヒト達には求められていた。

「じゃあ、俺達はどうするんだよ？ここまで来て、何もなしですごすご帰るのか？」
「ベルランドが動かなければ、どうにもならなさそうだ。私達はここで連絡係とならざるを得ないだろう」

言うやいなや、フェリアは携帯電話を取り出しながら玄関へと歩いていった。
早速ベルランドに報告する気なのだろう。
律儀な女だ、と思いながら、リヒトはふと辺りを見回した。
何かが足りない。
そう、居た筈の存在が足りない、違和感がある———

「大変だ！」

フェリアが声を張り上げながら、再び部屋へと戻ってきた。
何事かとリヒトは思いながらも、嫌な予感は禁じえなかった。

「フーが、メモを残してマフィアに勝負を仕掛けに行ったようだ！」

「さっき“周囲を監視している”っていうマフィアどもか……！！」

二人は顔を見合わせた。
幾らリヒトを倒すほど強いとは言え、少女である。
マフィアなどという治外法権に生きる男を相手にすれば、ただでは済まないだろう。

「俺達も行くぞ！」

リヒトは素早く決断し、玄関へと向かった。
頷きながら、フェリアもそれに従う。
だが、それよりも彼らの前を駆ける影があった。

「ウエマツ！？」
「あの男、いつのまに……」

ウエマツは既に玄関の扉を蹴り開け、二人の視界の外へと姿を消そうとしていた。
その速度たるや、とてもその身体からは想像も付かないほどである。

「追うぞ！」
「クソっ！待てよウエマツっ！！」

二人も一瞬遅れて走り出し、“ウエマツ研究所”からは人が居なくなった。
外に降る粉雪は、その勢いを強めつつある――――

＊　＊　＊

「フェリア、そっちに居たか！？」
「駄目だ。そちらは？」
「何処にも居やがらねぇ！クソ！ウエマツは！？」

雪の降りしきる中、二人は息を上がらせつつも走っていた。
すでに捜索を始めて一時間、そう大きくは無い街であり、通りは殆ど見回った。
既に日も落ち、辺りは夜闇である。
だが、フーは影も形も見当たらない。

「警察とか、そんな感じのヤツに頼れねぇのか！？」
「大事にすれば、即座に感づかれるだろう。フーが人質にされている可能性もある」
「クソったれ！！」

リヒトは悪態を吐き、再び足を動かす。
二人が訪れていない場所は一箇所を残すのみ。
併走して五分ほどの位置にそれはあった。

「ウエマツ！！」

街の外れにある墓地。
そこにある慰霊碑の前に、ウエマツは立っていた。
「フーは居たか――――っ！？」
リヒトは言いかけ、口をつぐんだ。
ウエマツがその手に持っていたのは、ネコミミのバンド。
フーが身に着けていた筈のものである。
「……ご丁寧に、奴らは手紙まで残してあったよ」
ウエマツがネコミミバンドを握るのとは逆の手に、力なく一枚の紙を握っていた。
リヒトはそれをひったくり目を通す。
そこにあったのは、概ね予想されていたケースと一致していた。
「フーを人質にして、アルカナエンジンと交換って訳か。汚ぇ連中だ」
忌々しそうにリヒトが呟く。
フェリアも、その表情には確かな怒りが浮かんでいた。
ただ、ウエマツだけは――――まるで虚無のような、色を失った顔つきであった。
「フー……」
粉雪はいつしか、吹雪になっていた――――

第五話　吹雪の夜に（後書き）

もっとサクっと終わらせる予定が、思ったより長引きそうです。
申し訳ない。

第六話　家族ということ

「――――……ぅあ」

薄暗い空間で、少女は目を覚ました。
まず気付いたのは、両手を縛られ、身動きが取れない状態で地面に転がされているという事。
そして、周りの状況を把握しようと思い瞼を開いた。
だが、辺りを見渡せど、そこには闇しかない。

「ようやく目覚めたかよ？それとも、餓鬼はもう寝てる時間だったか？」

男の声は空間に響いていた。
粘着質の、厭な響きを持ったその声は、少女に嫌悪感を与える。
暗闇の奥から現れたのは、黒いスーツの男だ。

「アンタは……っ！？」
「自己紹介しようか。俺はテメェらの持ってる“ブツ”を有効活用しようと考えている一派さ。なぁ、ウエマツ研究所のクソ餓鬼さんや」

その言葉に、少女――――フーは、無意識に下唇を噛み締めた。

思い出したのだ。
如何にして、この屈辱的な状況に置かれる羽目になったのかを。
それと同時に、後悔していた。
何故、自分はこうも短絡的なのか―――

「黙り込んでれば悪くない“商品”なんだがなァ……如何せん、品がねぇ」
「何ですと？このアタシに、品が無いと？立てばバクヤク、座ればカタン、歩く姿はヤケノハラと言われたこのアタシが？」
「一個もあってねぇじゃねぇか……」

溜息と共に言い、疲れ顔で肩を摩った。
そこには未だ痛みを訴える青痣があり、男はフーを見下し、睨む。

「ったく！阿呆みたいに暴れる所為でウチのメンツが使い物にならねぇじゃねぇか……怪力の餓鬼め！」
「ちょっと待ちなよ！まさかその“怪力の餓鬼”ってのはアタシのことかい！？」
「テメェ以外に誰が居るっつーんだよこのクソ餓鬼ッ！！」

今はこうして縛られているフーではあるが、事実、彼女はマフィアグループを後一歩まで追い詰めていた。
迫る男達を千切っては投げ、千切っては投げを繰り返すその姿は、まさに鬼神と言えよう。
リヒトを倒したその実力は伊達ではなく、しかし、一歩及ばなかったということ。

「いいから黙ってろや。明日になれば、愛しのウエマツ先生に会わせてやるからよ」

その言葉の意味を、フーは一瞬で理解した。
詰る所自分は、人質なのであると。
「アンタ……汚いよ！男なら正々堂々、胸を張って戦いな！」
「これが俺たち“大人”の戦い方よ！餓鬼は黙って、ままごと遊びでもしてな！」

ま、これがある限り俺達は――――そんな言葉を放ち、男は愛しそうにそれを撫でた。
釣られるようにフーが目をやる。
そこには、巨大な人型の影。
忘れもしない。
フーの故郷を、父を、母を、総てを奪い去った巨人の姿を。

「ジョーカー……マシン……！？」
「第二世代ジョーカーマシン、ソードが四機。幾ら相手がアルカナエンジンだろうと……！！」

フーには理解できない言葉を発しながら、男が恍惚した笑みを浮かべる。
その姿を見て、フーは嫌悪感を覚える。
まるで、得体の知れない生物を見たかのような、背筋に来るそれである。

「アンタは……どこまでっ……！！」
「勝って、アレを手に入れさえすれば、過程なんてどうでもいいのさ。そうだろ？」

睨むフーを見下ろし、男は笑みを浮かべていた。
しゃがみこみ、フーの顎を持って目線を無理やりに合わせる。

「恨むなら、あのウエマツって男を恨め。あの野郎が再三の要請に応じないから悪いんだからな？」
「アンタに……！アンタに、御主人を愚弄する権利は無いよ！御主人を馬鹿に出来るのはアタシだけさっ！」

その言葉を、男は鼻で笑った。
興味を無くしたかのように首を振り、男は呆れの目線をフーに投げやる。

「もういい。もういいから、寝とけよ。な？」

言い放ち、片手で持っていたその頭を無造作に落とした。
頭を打ったショックで、フーの意識は断絶する。
最期の一瞬まで考えていたのは、誰でもない、唯一人の男。

「御主人――――」

男が去ってそれきり、暗闇に声が響くことは無かった。

＊　　＊　　＊

「これは、僕への罰なのかも知れないな」

降りしきる吹雪は冷たく、人の心まで冷たくしてしまうようだった。

しかし、その場に居る二人の心は熱く、怒りに燃えている。

反面、立ち尽くすウエマツの心は、凍ってしまったかのように鈍い。

「……かつての僕は、軍属の科学者として雇われて、ジョーカーマシンの研究開発をしていたんだ」

だからだろうか、彼が独白したのは。

それは決して、他人には語ろうとしなかった彼の過去。

「当初は楽しかった。好きな機械弄りが出来て、金が貰えて、祖国も繁栄する」

「ああ、そうだな。それが“正常”だ」

皮肉交じりに、リヒトは呟いた。

戦争に関わってきた者同士、何か通じたものがあるのかもしれない。

「ある日、母の居る故郷が市街戦に巻き込まれたって報せが届いた。僕は急いで故郷へ戻ったさ」

故郷。

それが何処かはリヒトには分からなかった。

が、この街では無いであろうことだけは、ウエマツの表情から、確かに感じ取っていた。

「あったのは母の亡骸と、戦争で壊れた町並みだけさ……。僕は、戦争に加担していたことを初めて実感したんだ」
「だから、軍を抜けたと？ジョーカーマシンに関わっていたなら、そう簡単に抜けられる筈が……」
「僕は精神病に掛かったんだ。辛い……本当に辛い日々だった」

当時の彼を知る人間なら、今のウエマツを見てさぞ驚くのであろう。
精神病を患っていた当時は、栄養失調で倒れるほどに痩せこけた姿だったのだから。

「軍を抜けて、精神病院に入院させられた。何とか治療して、軍に戻れと言われたとき、僕は逃げたんだ」
「追跡は？」
「幸いにも、見つからずに逃げ切れた。当時は第三次世界大戦も一番激しい時期だったしね」

ふう、とウエマツが一息吐いた。
白い蒸気が黒々とした闇に浮かび、瞬く間に消えていく。
しかし、その間にもフーは、何処で何をされているのかすら分からない。
焦ろうともしないウエマツの姿がまどろっこしく、リヒトは苛ついた表情を浮かべた。

「この街に辿り着いて一番最初に出会ったのが……フーさ。そして、彼女は戦災孤児だった」
「引き取って、育てた――――か」

フェリアの言葉に、ウエマツは頷くこともしない。

だがそれが真実であろう事は、何よりも、最初に出会ったフーが証明していた。
同時に、フーにとって、ウエマツにとって、互いがどう思っているかすらも。

「テメェ、罪滅ぼしの心算か？」
「ああ、そうさ。僕の、戦争に関わっていた罪を償えるのはこれくらいしか――――」

言いかけたウエマツの頬を、リヒトの拳が打った。
薄く積った雪の上に倒れる姿を、リヒトは肩を怒らせて見下ろす。

「ふざけるなよ。テメェ、まさか、本当に罪滅ぼしだ、なんて思ってんじゃねぇだろうな」
「ぐ……罪滅ぼし以外の何があるって言うんだい？こんな、最低最悪の男に」

卑下するウエマツを睥睨して、リヒトは怒りの形相を浮かべた。

「フーを助けたいのか、助けたくないのか？それとも、もうどうでもいいのか？どれだ」

リヒトの言葉に、倒れたままのウエマツは唇を小さく振るわせた。
それは、決して寒さに負けたわけではない。
確信し、リヒトはもう一度問う。

「助けたいのか！？助けたくないのか！？」
「……助けたいに、決まってるじゃあないか」

返答は小さく、消え入りそうな声だった。

ウエマツは倒れ、俯いたまま、肩を震わせる。

「助けたいに決まってる……。フーは、たった一人の僕に残された“家族”だ……」

「テメェ、今、“家族”っつったな？」

リヒトはしゃがみこみ、ウエマツの襟を引っ張って顔を向けさせる。

同じ目線で、静かに涙を流す瞳を見据えた。

「“家族”を助けたいって事には、“同情”だとか、“罪滅ぼし”だとかは関係ねぇハズだ。テメェはそいつを言い訳にしてただけだよ。テメェの一方的な“罪悪感”のな」

言い放ち、リヒトはその手を離した。

再び雪上に項垂れるウエマツに背を向け、言う。

「だがな……テメェが家族だと思ってるフーは、誰でもないテメェの助けを待っている。その為には、俺達も協力は惜しまねぇ」

だから、と、続ける。

「立て。振り返らず、前だけを見とけ。フーは、その先に居る筈だ。お前の“過去”には、もう誰も居ない」

数瞬後、ウエマツは乾いた笑いを漏らした。

涙の跡が残る顔を、そこらに積った雪でごしごしと擦る。

「悪かったね。どうにも……僕は、精神的に弱いらしい。フーにはあんな格好させてるのにね。僕の趣味で」

「はっ、全く、その通りだよ」

リヒトの差し伸べた手を、ウエマツが握る。
もう片方の手には、しっかりとネコミミバンドを握っている。
まるで、二度と離さないと誓ったかのように、固く、固く、信念の如く。
立ち上がると、二人は頷きあい、横目でその人を見た。

「ってことで、作戦説明は任せたぜ。フェリア。どうせ何かあるんだろ？」
「ようやく喋れたと思ったら、そんな役回りか……やれやれ」

大げさに首を振って見せて、嘆息。
その姿にリヒトは苦笑し、ウエマツもにやついていた。

「これは……メイド服を着せたくなるね———おぅッ！？」

直後、脛を押さえて転げまわるウエマツを尻目に、フェリアは説明を始めた。

「いいか？今回のフー奪還作戦だが……コイツを使う」

言い、懐から取り出したのは、少々大きい携帯端末だ。
それの用途を知るリヒトは、驚いたような顔をする。

「グラインダーを呼ぶ携帯端末？テメェ、マフィアの野郎を殲滅する心算かよ？」
「その心算だが？」

さらっと言うフェリアに、リヒトは唖然。

彼女はそれを無視して続ける。

「作戦の肝は“相手を騙し切ること”、だ。それを肝に銘じて、作戦に当たって貰いたい」

が、その前に、と、フェリアは提案した。

「一旦研究所に戻るぞ。ウエマツが……死にかねん」

「……そうだな。戻るか」

リヒトの後ろでは、脛を押さえたまま体の半分ほどが雪に覆われたウエマツが転がっていた。

第六話　家族ということ（後書き）

戦闘まで書くと中途半端に長かったのでここでカット。

次回、ウエマツ編は終われ……たらいいなぁ。

第七話　超越するアルカナ

一晩で積った雪が朝日を反射し、煌いていた。
街の外れにある湖畔の表面には薄く氷が張り、静かに水面を光らせる。
静寂が包む森は針葉樹の緑と雪の白が綺麗なコントラストを描いていた。
それは正しく白銀の世界であり、改めてその光景を見たリヒトは感嘆の声を上げる。

「こいつはヤバイな……カメラでも持って来るんだったぜ」
「貴様がそんなことを言うとは珍しい。今日は槍でも降るのか？」

リヒトの隣に立つフェリアが茶化す。
しかし、リヒトが大きく否定することは無かった。
朝の静寂、冷たい空気が、リヒトに言葉を吐かせるのを躊躇わせたのだ。
大声を出してしまえば、その白銀の世界が崩れ去ってしまいそうで――――

「リヒト！例のモノを沈めてきた！」

そんなリヒトの感傷はおかまいなしに、遠くからウエマツの叫びに似た呼び声が聞えた。
静寂の中に響くその声に顔をしかめながら、リヒトは笑う。

「どうやら、大体の仕込みは終わったようだな」

「ああ。準備は万端―――後は、結果を待つだけだ」
同意するフェリアが、湖の方向を見据えたままに頷いた。
「しかし、今回はやけに協力的じゃねぇか。お前なら“エンジンを奪ったマフィアからエンジンを奪い返したほうが早い”とか言いそうだ」
「どういうイメージだ私は」
珍しくもフェリアをおちょくるリヒトは、鬼の首を取ったような気分で隣に立つフェリアを見る。
しかし、フェリアはリヒトの視線など気にしてはいなかった。
それどころか、どこかリヒトを見る目は興味深いものを見つけた研究者のような目である。
「なに、貴様の青臭い説教を聞かせて貰った礼だ。“英雄”なんて呼ばれる割には、随分なお人好しじゃあないか」
「……ぐぅっ！」
そう言われ、リヒトはまず唸り、頭を抱えた。
その顔色は赤く、柄にも無く照れているのだろう。
「違う、そういうキャラじゃねぇんだよ俺は……」
などと呟いてその場にしゃがみこむ。
相変わらずに頭を抱えるどころか、その髪を掻き毟る始末。
「まあ、そういうことだ。気にするな」
「でも、お前……やっぱアレは違うって……ァあぁぁぁあああああっ！クソッタレ！！」

その挙動不審な動きに、フェリアは薄く、氷のような微笑を湛えていた。
頭を抱えるリヒトはそれに気付かない。
が、一人だけ、その笑みを遠目から見ていた者が居た。
「やはり逸材だな……クールなメイドは男のロマ――――ふごっ！？」
「撮影は許可を取ってからするものだ」
ウエマツは手にしたカメラを取り落として、雪の上に崩れ落ちた。
尤も、と付け加えてフェリアは再び微笑み。
「貴様のような変態に撮らせる事は万が一にも在り得んが」
倒れたまま転がるウエマツは、己の股間を押さえて声にならない叫びを上げた。
いつの間にかフェリアによって作られていた雪玉によって、股間を強襲された結果である。
リヒトが正気に戻り、己の股間に手をやる。
怯えたような目で見上げられても何のその、どこ吹く風といった風体で、フェリアは己の腕時計に目を落とした。
「取引の時間まであと一時間か……」
時間の指定。
マフィアとの取引は、この静かな湖畔で行われる。
人質である少女フーと、ウエマツの持つアルカナエンジンの交換取引。
卑劣で愚直な連中が、純粋で素直な少女を悲しませる。

それは、まるで――――

飛来する思いを振り払って、フェリアは背後に位置する森の奥を見据えた。

そこにある筈の物を思い描き、同時に、己の無力を呪う。

フェリアが無意識に握り締めた拳に、何かが触れた。

「何を考えてるかは知らねぇが、あんま怖い顔すんなよ。なるようになるさ」

いつの間にか立ち上がったリヒトが少し強く、拳をぶつけたのだ。

その不器用な励ましに、フェリアは無表情で言う。

「セクハラ」

「おい、テメェ、おい。今そういうシーンじゃねぇだろ。雰囲気丸っきりぶち壊しじゃねぇか」

なにやら抗議するリヒトを尻目に、フェリアは再び湖を見据えた。

いつの間にやらその心は、その湖のように晴れやかに澄み渡っており――――

「……助かったぞ、リヒト」

「は？何？聞えなかったんだが？」

「何でもないさ」

微笑を浮かべながら、フェリアは振り向いた。

湖をバックに薄く笑う彼女の姿は、眩しく、輝いていた。

＊　＊　＊

「――待たせたなァ。取引に来たぜ、所長サン？」

現れた男は、卑小な笑みを浮かべたスーツの男だった。
睨むようなウエマツの顔色を気にすることなく、飄々と笑う。
距離を開けたまま、ウエマツと男は対峙する。

「……フーは何処だ？」

怒りを堪えきれないように、ウエマツは言った。
男はからからと笑う。

「開口一番、他人の心配かよ？テメェの命でも心配してたほうが有意義ってモンだぜェ？」

「……貴様！」

ぎりり、とウエマツが歯を噛む。
その姿を見て男は、まあ、と続けた。

「約束は約束だからな。会わせてやるぜ、来い」

男が合図すると、地鳴りのような音が響いた。
同時に、ウエマツが異常に気付く。

男の背後から、何か、巨大な物体が起き上がる。
鋼鉄の巨人――――ジョーカーマシンだ。

「よォ――――く手のトコを見てみなァ……？」

男の言葉に釣られるように、ウエマツは巨人を見上げる。
ジョーカーマシンの手の上には、確かに、黒い、小さな影が存在していた。
距離があるにもかかわらず、確信する。

「……フー！！」

思わず叫ぶ。
届くわけが無いその叫び。
衝動のままの行動は、男に歪んだ笑みを作らせた。

「ヒャハハハハハっ！必死だな！そんなに大事か？あァ！？」
「いいから、取引だ！エンジンの場所は教えるからさっ！」

まるで命乞いのような姿。
必死に叫ぶその姿を見て、男は哀れみに満ちた視線を投げやる。

「仕方が無ェなァ。こっちも時間が無いし、さっさと吐いてもらおうか！“アルカナエンジン”を何処に隠した！！」

大仰に、男は叫んだ。
観念したかのように俯き、ウエマツは呟くように答える。

「……そこの湖の底に沈めた。大きいから、見れば解る」
「オーケー、そこで待ってな。あのクソ餓鬼は、引き上げるまで

はまだ人質だ」

男は言うと、手元の携帯電話に幾つか呟いた。
同時に、男の背後に存在していた巨大な人影が動く。
しんと冷えた湖へと歩み寄り、片手にフーを乗せたまま、片腕を湖へ入れた。
引き上げたのは、鉄色の円筒――――

「これが……アルカナエンジン！！」

それを見た男は、高らかに笑った。
まるで世界の全てが面白い、とでもいったような風体である。
対照的に項垂れたウエマツが、その物体が“アルカナエンジン”であることを暗に肯定していた。
壊れたかのように笑う男が、ウエマツを見下している。

「アリガトよォ！！これで、俺も“新世界”に生きられるぜェ！！」
「さぁ、渡したぞ！フーを返せ！」

その言葉に、男は再び笑う。
その高笑いはまるで悪魔の哄笑。
ウエマツは背筋に寒いものが走るのを、確かに感じた。

「……そういう“約束”だったな。あァ、返してやるよ！！」

まるで役者のように男は、その腕を高らかに掲げた。
同時に、男の背に居るジョーカーマシンはフーの乗った片手を振り上げ――――

「受け取れェ！！」

投げた。

空を飛ぶフーの身体。

その姿はまるで、飛行能力を失った鳥のように、空を滑る。

墜落。

その瞬間を思い浮かべ、男は下卑た笑みを浮かべる。

その瞬間を思い浮かべ、ウエマツはきつく歯を食いしばる。

だが、土壇場でウエマツが叫んだ言葉は———

「リヒト！！」

“英雄”と呼ばれた男の名を呼ぶ。

そして、それに答える影がある。

『任せろ！そしてフェリア頼んだ！！』

ウエマツの背後。

巧妙に隠されたジョーカーマシン、暗緑色の装甲を持つ“グラインダー”が立ち上がった。

その装甲の色と大きさゆえ、森に隠されていたことに気付けなかったのだ。

グラインダーは走りながら、手を伸ばす。

上を向いた掌の上には、人影があった。

見上げるウエマツに向けて、任せろ、とでも言うかのように頷く影は、フェリア。

猛進するグラインダーの上でバランスを取りながら、その両手を広げた。

フーは、その間にも落ちていく。
放物線を描く軌道が、グラインダーの進路と重なろうとしていた。

「届け……！！届いてくれッ！！」

ウエマツは、願った。
改めて認識した、“家族”としてのフー。
それを救うための、大切な一歩を踏み出そうとしていた。
だから、今は———祈るしかない。
フーにも聞こえるように、叫ぶ。

「帰って来い！！フー！！」

グラインダーの掌が、フーの落下予測地点に入り込んだ。
間を置かず、場には静寂が戻る。
その場に居る全ての人間が、一機のジョーカーマシンの掌の上を見ていた。
不安と、祈りと、願いとが交錯する。
そして、静寂は———

「御主人！！」

フーの声によって、破られる。

『降ろすぞ！！ウエマツっ！！』
「合点！」

同時に、時が動き出した。
ウエマツは男達に背を向けて走り出す。
目指すべきは後方に存在するグラインダーの掌の真下。
既にグラインダーの掌は高度を下げ、人が飛び降りられる程度の高さになっていた。

「“アルカナエンジン”を知る者を生かして帰すな！！追えッ！！」

男が命令を下すと、どこからともなく現れたスーツの男たちがウエマツの背を追いかけ始める。
ウエマツの足は遅く、いかに距離が開いていようと、その差は直ぐに縮められる。
スーツの男の手がウエマツの服の端を掴もうとした瞬間、男は体勢を崩してその場に倒れた。
混乱したように足を止める男たちの前に、黒いコートの女が立つ。

「悪いが、感動の再会を邪魔する無粋者にはお帰り願いたい」

土産だ、と呟くと、フェリアはその手に隠していた拳銃を構えた。
男たちが色めき立つ間に、ウエマツはグラインダーの掌の下へと辿り着く。

「御主人ーっ！！」
「フー！！」

掌から飛び降りたフーが、ウエマツに飛びついた。
衝撃でその場に倒れるものの、ウエマツはしっかりとフーを抱きしめている。
ふと、頬に垂れ落ちる雫。

ウエマツを押し倒すかのような形になったフーを見上げる。
フーは、泣いていた。

「御主人、ただいまっ！！」

寂しさ、悔しさ、後悔。
様々な感情が入り混じった涙。
その姿を見て、ウエマツは優しく、その頭を撫でた。

「ああ、おかえり……フー」

＊　＊　＊

「何とか作戦成功か。わざわざジョーカーマシンまで持ってくるとは、肝が冷えたぜ」

森の中へと逃げ込んだウエマツを見送って、リヒトはパイロットシートで安堵した。
地上に存在する敵の対応はフェリアに任せてある。
多少は心配もあるが———ジョーカーマシンを相手取り戦った女だ、少々の事ではくたばらないだろう。
楽観的に考えて、グラインダーのメインカメラを動かした。

先ほどまで取引に応じていた男が、右手に“アルカナエンジン”を持ったジョーカーマシンに乗り終えたところだった。
相手が取る行動は把握している。
故に、リヒトはフットペダルを踏み込んだ。

「ったく、面倒この上ねェな、オイ！」

ジョーカーマシン・ソードの肩に装備されていたショルダーキャノンが火を噴く。
それと同時に回避するグラインダーは、そのまま相手の周囲を旋回するように空を飛んだ。
速度は通常の三倍ほどで、敵はまず追いつけないであろう、というリヒトの確信があった。
そのまま、鈍く旋回しようとするジョーカーマシンの背後を取る。
グラインダーの真骨頂、超近接格闘による攻撃で終わらせようと、腰だめに拳を引き絞った。

「――――んなっ！？何だァ！？」

だが、返って来たのは轟音。
足元が抉れ、グラインダーのコックピットを少量の揺れが襲う。
攻撃を中断しその場を飛び退いたグラインダーを見つめる、ジョーカーマシン・ソード。
空対地で、二者は対峙した。

「っ！！そういう、ことかよ……面倒くせェ！」

――――否、それは、二者ではない。

『ボス、遅くなりましたァ！』

『今から加勢しますぜ！』
『たかだか一機、サクッとやっちまいましょうやっ！』
『油断するなよ。あの機体は“アルカナ”を持つ存在だからな』

四機。
白く輝く山のシルエットを背景に、四つの巨大な影が立つ。

「ジョーカーマシン・ソード、ワンド、チャリス、ペンタクル……第二世代総出演かよ！懐かしくて涙が出てくるぜ！」

立ち塞がるジョーカーマシン。
ただでさえ小さいグラインダーにとっては、その四機は正しく“壁”と形容するに相応しいものであった。
だが、リヒトは笑う。

「いい機会だ！試させてもらうぜ、“グラインダー”の可能性！」

それは挑戦。
しかし、見据える相手は四機のジョーカーマシンではなく、己とグラインダー。
“アルカナエンジン”の可能性を捜す戦いである。

『ほざけ！』
『さっさと落としたらァ！』

リヒトの目に入っていた筈の“壁”は既に“壁”ではなく、ただの哀れな実験体。
それすら解らぬモルモットは、掌の上で踊るのみ。

二機のジョーカーマシン———ワンドとチャリスは、それぞれの

火器を構えた。
大きな体躯に鋼色の身体、丸みを帯びた、亀のような身体が特徴の機体であるワンドは遠距離狙撃用のジョーカーライフルを。
角ばった装甲に背負った、巨大な通信設備と重火器が特徴のチャリスは背中から突き出した大砲を。
二つの照準がほぼ同時に定められ、銃弾と砲弾が殺到する。
着弾と同時に、土煙の柱が上がり、その場にあった雪を吹き飛ばした。
しかし、そこにグラインダーは居ない。

「遅ぇ……っ！」
『なっ！速っ！！』

獣のように姿勢を低くして、グラインダーは前へと突っ込んだ。
そして、残像を残しながら、右へ、左へとステップを刻みながら全身。
続けて放たれる銃弾、砲弾の全てを紙一重で避ける。
殺到した攻撃のすべてを蛇のようにするりと抜け、その拳を再び腰だめに。

男は直感的にワンドを動かした。
そして、その勘は男の命を救うことになる。
振り向き様に振り回した左腕とジョーカーライフルが吹き飛ぶのと引き換えに、ではあるが。

灰色の腕が弾ける刹那、男は確かに暗緑色の装甲を見た。
その手には何も持たず、ただ、拳を正拳で降り抜いた様。
在り得ない――――その言葉は出ない。
何故なら、彼が相手取ったのは第三次世界大戦の“英雄”と“アルカナエンジン”。

その速度に不可能は、何一つ存在しない筈なのだから。

『お次だ！』

『見切れるかッ！？』

ワンドが体勢を立て直すのとほぼ同時に、グラインダーの真横から二機が斬りかかった。

鋭角的な装甲に赤い単眼、背部に巨大な推進バーニアを積んだソード。

小さく纏まった鉄色の装甲の所々から突起を生やしたペンタクル。

互い、一対の熱剣を構えて振り下ろそうとした。

「角砂糖より甘いな！」

グラインダーはその場で地を蹴った。

跳躍する方向は、先ほど左腕を失ったワンドの下である。

対象に命中しなかった熱剣は地面に刺さり、雪を猛烈な勢いで溶かした。

そして、グラインダーは誰よりも早く、体勢を整えた。

着地地点は、ワンドの胴体部分――――

『回避……！！』

「させるとでも思うか！？」

リヒトは叫び、連動ペダルの隣にある、もう一つのスイッチを足で押した。

同時に動かしたグラインダーの手の先には、腕部装甲から迫り出した鉄色のバイパス。

そしてそこから、強烈な、指向性の光が放たれた。

回避行動を取ろうとしていたワンドは、その場で、糸の切れた人

形のように立ち尽くす。

『なっ！？』

ワンドのコックピットからは驚愕の声が漏れた。
が、リヒトはお構いなしに、グラインダーの足を突き立てる。
一段と激しい音を上げて、ワンドの胸部装甲にグラインダーの脚が埋った。

「濃密な魔力を一気に受けると、通常ジョーカーマシン程度のエンジンじゃオーバーヒートするって話らしいぞ？」

又聞きなんだけどな――――その言葉を残して、リヒトはワンドに蹴りを入れた足を再び伸ばす。
跳躍。
高らかに跳んだグラインダーが頂点に達するのと、ワンドが小爆発を引き起こしながら倒れたのはほぼ同時。
周りのジョーカーマシンは、呆けたように空を見上げていた。
だが、ただひとつだけの例外。

『空中じゃあ身動きは取れねェよなァ！！』

チャリスは、空へと跳んだグラインダーの動きを見ていた。
ワンドが隣でやられる一方、密かに背中の兵器を稼動させていたのだ。
チャリスの背の誘導ミサイル群が、天へと牙を剥く。

『これで終り――――』

それを見下ろし、リヒトは悠然と呟いた。

恐れは無く、諦めも無い。
あるのはただ、好奇心。

「――いいぜ。そろそろ行くか」

リヒトは思い出していたのだ。
昨日のフェリアの言葉を。
“アルカナエンジン”を操る者にだけ呟かれる、その言葉を。
己が一番知っている――その、逆転の鍵語を。

それは正に、“鍵”。
アルカナエンジンの全ての能力を引き出すための鍵だ。
全てのジョーカーマシンを“超越する”、“アルカナ”の福音――

「Ａｒｃａｎａ　Ｏｖｅｒ……！！」

グラインダー。
その真骨頂は速さ。
故に、リヒトは求めた。
その速さの究極の姿を。

一瞬でいい。
一瞬の内に、全てを極める。
一念は、アルカナを通し、エネルギーとして世界に干渉する。
それ即ち――限り無い時間の遅延。

まるでブラックアウトした、モノクロの世界で、リヒトは自分の感覚が暴走していることを感じた。
血が逆流したかのように全身が痛みに苛まれ、同時に、幸福な全

能感もある。
メインモニターを見ると同時に、モノクロの世界の刻はカウントダウンを告げた。
十秒。
それが、今のグラインダーとリヒトに赦された限界値。

時の止まった世界、直前で止まったミサイル弾頭を回避しようとした。
だが、グラインダーは既に爆発をも置き去りにする速さ。
回避する必要も無い、ただ、爆発を受ける前に離脱するのみ。
リヒトはそれに気付き、回避を止めた。
グラインダーは、無傷で地上に再び立つ。

九秒。

頭上で爆発が始まろうとしていた。
ミサイルの弾頭が破裂するよりも早く、グラインダーは駆ける。
今尚ミサイルのバックファイアが残るチャリスを目掛けた。
四肢に繋がれた鉄色のバイパスから轟々と吹き出るエネルギー。
それは既にビームの類といっても過言ではないだろう。

八秒。

濃密なエネルギーは、アルカナエンジンの力で限り無く固体に近づいていた。
そのエネルギーの吹き出るバイパスを握り、グラインダーは跳躍する。
低く、タックルのように、肩を突き出した形。
しかしその型はタックルではなく、右手を左腰に構えたことによる副次的なポーズに過ぎない。

真の狙いは、右手で掴んだ、右足から伸びるバイパス――――

七秒。

「居合斬り……ッ！！」

六秒。

その声が響くと同時に、グラインダーはくるりと回転した。
降り抜いた手をそのまま遠心力とし、己の頭を軸とした独楽のように。
当然、垂れ落ちるバイパスは引っ張られ、螺旋を描くように回る。
そして、遠心力のままに進む方向には、二機のジョーカーマシン。

五秒。

最早、グラインダーは姿勢を正すことすらない。
寧ろ、回転を早めるために、と地を跳ね、両の手を用いてバイパスを振り回す。
リヒトの脳に、割れるような痛みが走った。
思わず顔を顰めた。
だが、その手は操縦桿から離れない。

四秒。

二機との距離は既に無くなっていた。

改めて、リヒトはフットペダルの隣を踏んだ。
そこにあるスイッチ一つで、グラインダーは踊るのだ。
踏み切るタイミングは———今。

三秒。

光が踊る。
暗緑色の機体とモノクロームの景色を、白色に染めて。
両手両脚から伸びるバイパスの全てから光が噴出し、それら全てが光の剣となる。
呆然と空を見上げたままの二機に、光の牙が食い込んだ。
裁断する感覚すらない。
ただ、リヒトの脳内に映される光景は光である。

二秒。

光を収め、二機を過ぎ去り、グラインダーは雪原へ降り立つ。
振り向くとそこには、何も変らない三機の姿。
そして、今だ爆発を終えていない上空のミサイル群。
モノクロの世界に、少しずつ色が戻り始めていた。

一秒。

そして、リヒトは呟く。

零秒。

「これが“粉砕機”改め――“裁断者(グラインダー)”だ」

時が動き始める。

『だっ！！』

果たして、その科白は断末魔と為る。
音も無く、チャリスは胴体から真っ二つに、ずれた。
ソード、ペンタクルも同様に、その身体を細切れにずらす。
全ての視線は中空に置き去りにされた爆発に注がれた。
それと同時に――地上で、三つの爆炎が咲く。

『ははははは！大命中ってかァ！？』
『“英雄”とやらも大したこと無ぇな！』
『これで私も、あの方の創る“新世界に”――』

何も解らぬまま彼らは爆発したのだろう。
全てを知るのは、“限り無い時間の遅延”の中に居たリヒトのみ。
見届けたリヒトは、コックピットの前面に突っ伏した。

「あー、クソ、しんどい……。こりゃあ、迂闊には使えねぇな…

…」

げんなりと呟き、そのまま活動を停止した。

彼が再び動き出すのは、不審に思ったフェリアがコックピットに乗り込んでくる時であろう。

グラインダーのコックピットに、似つかわしくない寝息が聞え始めた。

＊　＊　＊

「……割とマジで疑ってたが、こいつは凄いな。マジで研究所だ」

「だろう？このアパートは地下が全て研究スペースになっているのさ。上のは、カモフラージュってやつだよ」

リヒトが驚いた声を出すと、先導するウエマツは嬉しそうに説明した。

ウエマツ研究所と名を打たれたアパートの二階にあるエレベーターに乗って、彼らはここまでやってきた。

冷静沈着、無表情の鉄仮面と謗られたフェリアも、これには瞠目する。

エレベーターで辿り着いた地下には、軍基地で見たものと殆ど変らない研究スペースが広がっていたのである。

「ご主人はこう見えても優秀だからね！ベルランド様が援助してくれたんだよっ！」

フーがひょっこりと、ウエマツの背後から姿を現した。

幸い、今回の事件で彼女は特に怪我を負う事も無く、無事に帰ってきた。

尤も、誰よりも心配されていた当の本人は、かなり恥ずかしそうにしていたが———きっと、ウエマツの所為だろう。

「しかし、軍は抜けたのではなかったのか？」

「あくまで“個人間”の研究さ。それに、研究対象は“ジョーカーマシン”ではなく“魔力”についてだからね」

フェリアの疑問に、ウエマツは笑いながら答えた。

屁理屈のような返答に唸るフェリアであったが、それを押しのけてリヒトが言う。

「っつーか、こっちにあるアルカナエンジンってのはどれだ？この間のヤツみたいなモンか？」

この間のヤツ、とリヒトが差すのは、つい先日のフー奪回作戦の折に使用された物体である。

マフィアに一度アルカナエンジンを渡す、という手法を取るが故に作られた、急造の鉄くずだ。

取引の直前、ウエマツはこれを湖の底に沈めたのである。

「うーん、それがねぇ……実は、もう僕の手には無いんだよ」

「はぁ！？」

驚きの声が上がった。
話が違う、とリヒトはがなる。
しかし、その言葉を遮ったのは、意外にも、フーであった。
「御主人はアレが危険だと判断して、手放すことにしたんだよ。信頼できる“友人”に送ったんだ」
「誰だよ、信頼できる友人って……？」
リヒトが尋ねようとした瞬間、携帯電話が鳴った。
フェリアはコートのポケットから携帯電話を取り出すと、応答を始める。
その様子を察したウエマツは、小さく笑った。
「噂をすれば影、ってヤツだね。全く、タイミングのいい」
「意味解らんぞ……一体誰だよ、友人……って、オイ、まさかっ！？」
リヒトはこの街へ来る前に聞いた、とある言葉を思い出した。
———この大陸の東端に、ハルピュイアという街がある。そこには魔力研究に付き合ってもらった知り合いの科学者が居るんだが。
「貸せっ！！」
リヒトはフェリアの携帯電話を引っ手繰るように奪うと、がなった。
「ベルランド、テメェ謀ったな？」
『さて、何のことだ？』

通話先で、ベルランドは淡々と答えた。
収まらない様子のリヒトは罵声を浴びせる。
「クソッたれ！最初っからアルカナエンジンがそっちに行くことが解ってて寄越したな？体の良いボディーガード代わりによ！」
『先見の明があると言ってくれ。それに、満更でも無かっただろう？』
「はぁ？何を言って……」
ふと顔を上げると、フェリアと目が合った。
そして、リヒトは硬直し、形態電話の向こうからは押し殺したかのような笑いが。
『お人好しは恥ずかしがる事では無いぞ？いや、戦士としてはどうかは知らんが……』
「五月蠅ぇえええええええええっ！！」
叫び、携帯電話を投げた。
ウエマツの隣に居たフーが持ち前の素早さでキャッチすると、再びフェリアの手に携帯電話が戻る。
「くそ、何で俺の恥ずかしエピソードが流出してるんだよっ……！」
「まあまあ、落ち着いてくれよっ！スマイル、スマイル！」
「五月蠅ぇ！」
茶化したように笑うフー。
ウエマツがその頭を撫でた。
しかし、フーがそれを拒む事は無かった。

「しかし、本当に助かったよ。一時はどうなることかと思ったが、君が居てよかった」
「けっ、テメェがヘタレてただけだろうが」
「ははは、そうだなぁ……」
そっぽを向いて言うリヒトに、ウエマツは困ったように笑った。
「だけど、お陰で目が醒めた。これからはフーと……家族と、君の活躍を見物させてもらうよ」
「よ！」
言いながら、ウエマツはフーに笑いかける。
フーは笑顔を返し———否、既に笑っていた。
彼女はいつも笑う。
隣にウエマツが居るその限り、笑って生きていけるだろう。
リヒトはその様子を見ると、満足そうに一度頷いた。
「おい、リヒト。次のアルカナエンジンの所在が分かった」
ベルランドとの通話が終わったようで、フェリアが携帯電話を閉じた。
「マジか。んで、次は何処に飛ばされるんだ？」
皮肉交じりの言葉。
それに対し、フェリアはいつもの真顔で答える。
「今度は、赤道直下のジャングル地帯だ」
「———は？」

第七話　超越するアルカナ（後書き）

アルカナエンジンについての詳しい言及はまた次の機会に。
次回、まさかの赤道直下。

第八話　夜明け裏切り者

「――――はっ、はぁっ」

女が、息を荒げていた。
上下する身体、玉のような汗が伝い落ちる。
燃えるように熱い身体を制して、女はその単調な上下運動を繰り返していた。

「想像以上だな……くっ！」

一際大きな声を上げて、女は布の端を握った。
熱く、暴れ出さんとする身体を押さえつけるための行動。
しかし、それは何の意味も成さない。
彼女が掴んだ布は、自らの脱ぎ捨てた衣服の一部なのだから。

「はぁ、はぁっ、もう、駄目だっ……！」

息も絶え絶えに、フェリアは目の前の男に言った。
苦しげな、切なげな声は扇情的に響く。
彼女の身体には、ただ、足の先から痺れていくような感覚が支配していた。
その声を聞いて、女の目の前を行く男は答える。

「テメェ、さっきから五月蝿いんだよ。寒いのが大丈夫で熱いの

苦手って、どこのシロクマだテメェは」
「……ふん。暑さにのみ順応する単純な変温動物の貴様よりはマシだろう」

男―――リヒト・シュッテンバーグは、後ろを歩くフェリアにうんざりした様子で振り返った。
その出で立ちは変わらず、暗緑色のコートのままである。
一方のフェリアはコートを脇に抱え、下に着込んでいた白衣を汗で濡らす。
熱帯の暑さにやられてしまったのか、頭を深く項垂れていた。
白い髪が顔を覆い隠してその表情は見えないが、荒げられた苦しげな息がそれを物語る。
しかし、そんな事はリヒトの知るところではなかった。

「ったく、もうちょっと我慢しやがれ。ベルランドの言ってたポイントまで辿り着けば涼しい筈だ。そこで休憩すんぞ」
「フフ……そこまで、私の体力が、持つとでも……？」

幽霊のように擡げた顔からは生気が消え、顔色が赤いのに青い、という矛盾した状況になっていた。
それを見たリヒトはぎょっとすると、次に呆れの溜息を吐く。

「恨むならベルランドと……そうだな、デイブレイクの連中でも恨め。そしてその恨みをパワーに変えてさっさと歩け」
「最早怒りも沸かん……」

リヒトは無視して先行し始め、のろのろとフェリアもそれに続いた。
二人の周りにあるのは、熱帯に生える独特の植物と、背の高い木々である。

植物の葉が風でざわめく音と、何処からか聞える川の流れる音。
何よりも大きく響いていたのは、得体の知れない虫が搾り出す鳴き声であった。
水気を含んだ空気は太陽に熱され、独特の熱気を孕んだ空気となる。
熱帯ならではの“蒸し暑い”感覚が、フェリアは駄目らしい。
ジョーカーマシンを日常的に操っていたリヒトには、その蒸し暑さは懐かしさすら覚えるものである。
戦闘中のコックピットの中はかなり熱が篭り、暑かったものだ――

リヒトがそれを思い出していたとき、ふと、耳に異音が聞えた。
後ろで遅れながらもついてくるフェリアを尻目に、リヒトはもう一度耳を澄ます。

――――……っ――――――あ……！――――

「……フェリア」

手招きをして、フェリアを呼んだ。
訝しげな顔をしながらも急ぎ近寄るフェリアに、囁くように問いかける。

「何か、聞えねぇか？人の声みたいなのが」
「何？こんなジャングル地帯の奥地で、か？」

フェリアは疑問符を浮かべるが、再び集中し始めたリヒトを見て、自らも聞き耳を立てた。
今度は、二人で耳を澄ます。

っあ―――あぁ……っ―――――ぁああ……！―――――

「これは……！」

「ああ、間違いない。人間の声だ」

頷きあい、二人は耳を澄ませながらも走り始めた。

起伏に富んだ地形ではあるが、二人の前では装甲の妨げにすらならない。

地面を踏みしめる快音が刻まれる度に、声の主への距離も近くなっていく。

やがて、水の流れる音を聞き、リヒトはその場で足を止めた。

「ここは、川か」

「そんなに流れの激しい場所でもない……っつーか、池みてぇなモンじゃねぇか？コレは」

見下ろすのは、対岸までそう距離の無い、小さな池だった。

上空から見れば、緑色の中にぽっかりと開いた穴のように見えるだろう。

穏かな流れの水が丁度、二人の左正面から流れ出てきていた。

「おい、あれは何だ？」

フェリアが指を差した。

周囲を眺めていたリヒトがその指の指す方向へと目を向ける。

そこにあったのは、泥水に浮かぶ何か。

迷彩柄の、布のようなもので、人間ぐらいの大きさで―――

「人間……」

ぽっかりと口を開けたリヒトが呟く。

「って、人間じゃねぇか！！」

はっと気付き、リヒトは湖を流れてきたその人間に近づく。

水に浮かんだままの人間は、まるで水面の枯葉のように優雅な揺られ方でリヒトの居る岸に辿り着いた。

見たところ、意識は無いようである。

全身の力を抜き、水に浮かんでいるのがその証拠と言っても過言ではない。

「コイツは……一体何なんだ？」

思わずリヒトが呟くほどに、男の格好は奇妙。

上下共に迷彩服の繋ぎ姿であり、腰のベルトには様々な道具が詰まっていると思しきポシェット。

同じく迷彩柄のヘルメットは本人の首に引っかかったまま暢気に浮かんでいる。

茶髪に、日に焼けた白人の白い肌。

安らかに閉じた目元は優しげで、眠っているかのようである。

「えー、どうすんのコレ……。つか、ご愁傷様？」

言い、リヒトが手を合わせようとした瞬間。

「———うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「どわァあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

白人が突如叫び、リヒトは腰を抜かして叫んだ。

誰だって、目の前で安らかに眠る人間が突如叫んだら腰を抜かすだろう。
しかし、その場で、フェリアだけは冷静に、耳を塞いで。
「貴様ら、五月蝿い」
とだけ、呟いた。

＊　＊　＊

「いやはや！お見苦しいものをお見せしました」
「耳がキンキンするぜ……」
息を吹き返した男は、まず笑い、そしてリヒトの隣へ座り込んだ。
濡れたままの迷彩服はそのままに、溌剌とした目を輝かせている。
「貴様は誰だ？」
フェリアの簡潔な質問。
尤も、その背格好から大概の人間はこの人物の素性を予測できるだろう。
厚手の迷彩服にヘルメット。

それのどれもこの国の軍では採用されていない、俗に言う市販のレンジャーセットだったのだから。

「私はブライアン・リーマンと言います。職業は冒険家、趣味は冒険、特技は冒険！」

「冒険ばっかじゃねぇか……」

呟くリヒトに、ブライアンは再び笑う。

喜怒哀楽の激しい、気さくな男だ。

だが、その声量はこのジャングルに居る虫を寄せ付けないほどのものであり、躁病の気があるのだろうか。

失礼なことを考えるも、リヒトはそれを表情に出さずに問う。

「んで、冒険家さんがこんな所に何の用だ？まさか、お宝でもあるってのか？」

「んーっ！その通ぉーり！

待ってました、と言わんばかりにブライアンが立ち上がった。

その指が指し示すは、遥か天に存在する太陽。

逆光に満面の笑みを浮かべて、リヒトの姿を見下ろしていた。

「ここの洞穴にはとあるお宝が隠されていると言うのです！その名もズバリ！」

テンションの高いブライアンに呆れながら、リヒトは相槌を返す。

どうせ碌なものでは無いだろうし、第一目的とは全く関係が無い筈だ――――

「アルカナ……」

「ぶっ！！」

言葉の途中、リヒトは噴出す。
何故、ブライアンがアルカナエンジンの存在を知っているのか。
そうすれば、この男は“デイブレイク”の手先なのであろうか―
――

「ストーン！手に入れたものに決して無くならぬ運を授ける宝！」
言い切ると同時に、リヒトは後ろに転んだ。
頭を強かに打ちつけた姿に、ブライアンが豪快な笑い声を上げる。
「紛らわしいわ！ビビリ損じゃねぇか！」
「お？一体、何に怒っているんですか？」
理不尽な怒りにただ、惚けた顔をするブライアン。
リヒトは肩を怒らせながらも、まあいいか、と気持ちを改める。
「そもそも、何故わざわざこんな秘境まで“在るかも解らない”宝を探しに来た？」
何故か訝しげに、フェリアは問いかけた。
ブライアンはふと俯くと、笑顔はそのままに語り始める。
「聞くも涙、語るも涙のハートフルストーリーがあるんですよ。私には子供が居るんですがね？」
「ふーん」
「何か凄い珍しいっていう難病に掛かってしまいまして、手ずっ……手術を受けることになったんですよ」
突っ込みてぇ、と思うリヒトを置いて、ブライアンは何事も無か

ったかのように続けた。
「それで、その手術が確実に成功するように、と、伝説の運気を運ぶアルカナストーンを探しに来たのですよっ！」
「オイ、最期に冒険家モードに戻ってるぞ」
その言葉には耳を貸さず、ブライアンはリヒトに向き直る。
そして、その両手を握ったかと思うと、輝いた顔を接近させて言った。
「そうだ、貴方達にも協力して頂けないでしょうか？報酬は、何なりと、ご随意にぃっ！」
「うわっ！やめろ、近寄るな！顔が近いんだよ！」
それを振り払い、虫を払うように手を振る。
助けを求めるかのようにフェリアを見るが、彼女は顎に指を当て、何かを深く考えていた。
そしてリヒトの手を掴み、言う。
「よかろう」
「は？」
「その“アルカナストーン”を探すのに協力しよう、と言っているのだ」
呆けたままに固まるリヒト。
フェリアの表情を窺うも、いつも通りの冷たい鉄面皮があるのみ。
「ありがとうございます！ありがとうございますっ！」
ジャングルには似つかわしくない、溌剌とした声だけがその場に

響いていた。

＊　＊　＊

「難病。アルカナストーン。どうにも怪しいとは思わんか？」
「は？」

リヒトの間抜けた声が薄暗い洞穴に響いた。
二人はひんやりとした空気に包まれたこの洞穴の中、ブライアンと共に赴いていた。
ブライアンの目的とするアルカナストーンとやらはこの洞穴の中にあるらしい。
だが、座り込む二人の傍にブライアンは居ない。

「アルカナストーンなどという曖昧な情報を流したのは誰だ？冒険家とはいえ、突発的過ぎる」
「と、言うと？」
「冒険家というものは本来、入念な調査などによって未踏破の領域に挑む者を指す」

しかし、とフェリアが続け、ブライアンが落ちたであろう穴を見た。

彼は今頃、洞穴の中を張り巡らされた水流を巡って、約二十回目のウォータースライダーを体験しているのだろう。
そして、三人が初めて出会った小さな湖へと戻されるのだ。
リヒトは小さく、呆れの溜息を吐く。

「どう見ても、入念な調査なんて無いだろコレは」
「そう。せめて、地下水の有無や洞穴内の状況情報ぐらいは無いと“冒険家”としてはおかしい」

“冒険家”の言葉をフェリアは強調した。

「詰まり、ヤツは冒険家でも何でもないと？」
「もしくは、ここの調査を怠ったか……だが、それは“冒険家”としては致命的なミスと言える。そんな愚行を犯すだろうか？」

穴に滑り落ちたブライアンの行方を気にすることも無く、二人は会話を続けた。

「じゃ、まさかデイブレイクの手先ってことか？」
「どれにしろ、あの男には気をつけて進むしかあるまい。我々として、情報はこれしかないのだ」

言うと、フェリアはコートのポケットから小型の端末を取り出した。
小さな画面が付いたそれは、付近の魔力量を表示するための測定器。
これを使用して、リヒト達は“アルカナエンジン”に、着実に近づいていた。

「どの道、あの男の目指す場所と、我々の目指す場所は同じよう

だからな」

締めくくり、フェリアはすくりと立ち上がった。
リヒトが後ろに目を向けると、大きく手を振りながらブライアンが駆けて来るのが見える。

「お待たせしましたぁあああああああああああああーっ！？」

「見ろ、馬鹿が居る」

「何を今更」

指差すフェリアに、呆れの言葉を返すリヒト。
二人の視界の先には、再び穴に落ちたびしょ濡れの迷彩服が居た。
どうせ、また直ぐに戻ってくるだろう。
二人は、互いに頷き合い、フェリアは再びその場に腰を下ろすとした。

「ちょっと待て。何か聞えねぇか？」

「さあな。あの男がお前の事を呼んでいるのではないか？地獄へようこそ、という具合で」

珍しく冗談をほのめかすフェリアに目を丸くした。
が、今のリヒトにはそれよりも気になることがある。
どうにも、地底の底から響くような声は驚きと興奮に満ち溢れているように聞えるのだ。

――――リヒトさぁあああああああああああああああああああああん！！

「五月蝿ぇってか、マジで俺を呼んでたのかよ……」

「ほら見ろ。お迎えが来たぞ」

———フェリアさぁあああああああああああああああん！！

「おい、お前にもお迎えが来たぞ」

「……仕方が無い。丁重に、迎えてやるとしよう」

降ろしかけた重い腰を上げ、フェリアは再び立ち上がった。

辟易とした両者の空気に割って入るように、ブライアンの喜びの声は地底から響く。

———それっぽいところ見つけましたよぉおおおおおおおおおおっ！！

＊　＊　＊

「んで、これがそれっぽいところねぇ……」

「どうです！？いかにもって感じじゃないですか！」

高揚するブライアンが、狭い穴の中で声を上げた。

指差す先にあったのは、人一人分ほどの穴を潜った先の岩に囲ま

れた空間である。
そこの中央には一つの岩が置かれ、恐らく、古代の祭壇のような形をしていた。
「間違いありませんとも！あそこに、アルカナストーンがあるのです！！」
リヒトは思わず耳を塞いだが、それでも、この密閉空間でのブライアンの声は脳にきんきんと響く。
早く行こう、と声をかけようとするよりも早く、ブライアンは身を屈めていた。
誰よりも早くその穴を潜り、先駆けと走る。
呆れたようにその後姿を見送り、リヒトは一度フェリアに視線を送った。
しかし、その意味をフェリアが理解するよりも早く———
「ぐぅっ！！」
銃声が響く。
聞いたことも無いようなくぐもった声に、リヒトは驚いた。
しかし、何よりも先に彼の思考は展開、最善の行動を探し出す。
今出来る事は、ブライアンの安否を確かめ、可能であれば逃げることであろう。
例え、ブライアンがデイブレイクの仕掛け人だったとしても———
「っち！」
「リヒト！」
舌打ちし、リヒトは素早く穴を潜った。

その先に広がる光景は地下とは思えぬほど広く、大きい。
入り口近くに倒れているのはブライアン。
暗くて見えないが、下に流れているのはきっと、彼自身の血液であろう。
すぐさまに駆け寄り、その肩を揺すった。

「大丈夫か！？」
「別に、命に支障はありません……が！」

語尾を強め、ブライアンは苦々しく声を上げた。
迷彩服の肩は血で染まり、苦しげに息を吐く姿は到底無事とは言えない。
が、それでも、ブライアンは意識を固く保っていた。
人差し指を擡げ、呻きながらも言う。

「私は、見ました……っ！そこにある、巨大な漆黒の影を！」
「はっ！？」

暗闇。
そこには既に壊れかけた祭壇があった。
しかし、その壊れ方はあまりにも不自然。
風化は、確かにある。
だが、風化した物はここまで激しく、破片を飛び散らせて壊れはしないだろう。

「まさかっ……！？」

リヒトの頭に、ある可能性が飛来する。
それは偶然と言うには出来すぎた状況と、ウエマツの状況との類似性。

即ち、そこに存在する不自然な影は――――

「――――ジョーカーマシンの、影です！！」

リヒトは見上げた。

空間に存在する、己に陰を差すその存在を。

同時に、ジョーカーマシンも声を上げる。

スピーカー越しのノイズ交じりの声で、笑う。

『くくくくくくっ……遅かったじゃあないか、ブライアン……！』

「ナード君！君なのかっ！！」

その陰険な声に、ブライアンは一際大きな声を上げた。

『そうだとも……貴様に人生を狂わされ、全てを失った、哀れな男ナードだよ！』

宣言する。

恨みを込めた言葉は、確かに、ブライアンに届いていた。

「逆恨みもいい加減にするんだ！そもそも、あれは誰のモノでもない！！」

『何を言うか！貴様が……！貴様が、俺の人生を奪ったのだ！！』

興奮気味に叫ぶブライアンと、激昂した様子のナード。

二人の間に挟まれて、リヒトはただ、ある一つの可能性を考えていた。

概ね、この二人の関係性は推測できる。

フェリアの立てた仮説が正しいのであれば、という条件付ではあ

るが。
だが、だからこそリヒトは確信を持っていた。
それは詰まり、有り得て欲しくは無かった最悪の可能性の一つである。

『どうやらボディーガードを連れて来たようだが、無駄だったな。なぁ、会長』
「君はっ！！」

ブライアンが初めて、その顔に怒りを表した。
話に取り残されたリヒトを見つけたか、ナードは上機嫌に語る。

『取り巻きにすら事情を話していなかったのか。懸命だな。貴様の身分が知れれば、貴様自信にも危険が及ぶ』
「これ以上は！」

這い蹲りながら虚勢を張るブライアンに気分を良くしたか、ナードは高らかに言った。

『なぁ！ブライアン・コーポレーション元会長！ブライアン・オズボーンよ！！』

――――ブライアン・コーポレーション。
貴金属の売買を始めとし、手広く事業を展開する世界有数の巨大複合企業である。
そして、そのトップともいえる会長。
その男こそが、今、地面に這いつくばっているブライアン。

ブライアンは、咄嗟に目を逸らした。
誰の目からかは解らないが、確かに、そういった動きをした。

そこにあるのは、何よりも気まずさ。
まるで旧友に嘘がばれてしまったかのような、申し訳ないような気まずさである。

「やっぱな。そんなこったろうと思ったぜ」

しかしそれとは対照的に、飄々とした顔を浮かべる男が居た。
今まで空気と化していた”ボディーガード”、リヒトだ。

『貴様、知っていたのか？』
「いや。だがな、あんな“冒険家ごっこ”を見せられれば気が付くだろ」

気付いたのは俺じゃないけど、と心の中で呟く。
ナードは、ふん、と、面白く無さそうに鼻を鳴らした。

「すまない……君達を巻き込んでしまったようだ。彼は、私を殺すために……」

項垂れたまま、ブライアンは言う。

「ただ、私はここに“アルカナストーン”があると聞き、居ても立っても居られなかったが……」
『そうだ。全て、私の流した噂に過ぎない』

が、とナードは続ける。

『噂は真実なのだ』

言うや否や、洞穴の中に光が燈った。

それは白色の光ではなく、ほの暗い緑色になった粘ついた光である。
そして、その光の発生源は、二人の遥か頭上。
緑色に光るのは———ジョーカーマシンの双眸。
『アルカナストーンと呼ばれる存在をジョーカーマシンに組み込むと、それは絶大な力を発揮すると言う。それが———』
「“アルカナマシン”」
リヒトが二の句を告いだ。
驚きに、ナードは口を閉ざす。
「ブライアンには悪いが、待ってたぜ……“アルカナエンジン”」
フェリアを呼ぶと、その声は背後から響いて聞えた。
「魔力測定値も異常値。間違いない。“二つ目”のアルカナエンジンだ」
「そうなれば、だ」
リヒトは足元に居たブライアンを抱え起こした。
そしてその肩を貸して、二人で逃げる体勢を取る。
「逃げるぞ！ブライアン！」
『逃がすとでも思うか？舐められたものだな……！！』
二人を掴み上げようと、ジョーカーマシンは巨大な腕を伸ばした。
だが、それを阻む存在がある。
同じく腕を伸ばすのは、暗緑色の装甲を持つジョーカーマシン。
“アルカナマシン”、グラインダーだ。

二機のジョーカーマシンに大きさの差は有れど、それ以外は全くの同一。
巨大な腕同士が接触し、激しく弾きあった。
その隙を突くかのようにリヒトはフェリアの元へと走り寄る。
「やれやれ。これを呼ぶには骨が折れたぞ」
「自動操縦だから何もしてないだろうが！いいから、コイツを頼んだぞ！」
言うやいなやブライアンを預け、均衡の崩れ始めたグラインダーの元へと向かう。
だが、それを呼び止めるかのように唸る一人の男。
「君達は……逃げろ……っ！」
息も絶え絶えに、ブライアンは言った。
その青い表情に浮かぶのは、後悔や責任と言った、ほの暗い後ろ向きの情念。
それは全て、リヒト達へと向けられている。
理解したからこそ、リヒトは振り向かない。
「一丁前に責任でも感じてやがるのか？だとしたら、そいつはお門違いだ」
「だが……っ！」
「自分の所為だと？はっ！自惚れるなよ。テメェは唯の“観客”だ。俺達はお前が居なかろうと戦う」
その言葉にフェリアが頷き、ブライアンは怪訝そうな顔を浮かべた。
リヒトがグラインダーのコックピットに飛び乗る。

同時に、二機のジョーカーマシンが戦いを始めるため、洞窟の天井を突き破り外へと飛び出した。
唖然とした様子で、ブライアンは呟く。
「君達は、一体……？」
“英雄”改め、“切り札（ジョーカー）”リヒト・シュッテンバーグ。そして――――」
目を細めて、フェリアは言う。
“夜明け（ディブレイク）”の裏切り者、フェリア・オルタナティブだ」

第八話　夜明け裏切り者（後書き）

1ピソードを二話分に収めるとすると大分長くなりますね。
次回バトルが始まります。

第九話　蛇の心臓

辺りを見回せば、そこは一面の緑だった。
己の元居た屋敷の周辺とは比べ物にならないほどに、緑の稜線が続く。
それは、改めてジャングル地帯に彼自身が居ることを感じさせた。
足元に開いた穴に目を向ければ、崩壊しかかった洞穴が見える。
が、フェリア達の居る場所は横穴であり、崩壊には巻き込まれてはいなかった。
危惧を解消したリヒトは、再び、目の前に対峙するジョーカー――――否、“アルカナマシン”を見つめた。

洞窟内で見ただけでは明かりが無く、その全容は見えなかった。
だが、今ならばわかる。
あまりにもその姿は、本来のジョーカーマシンからはかけ離れているのだ。

本体のみを見るのならば、緑色の装甲に黒い幾何学線の入った一般的なジョーカーマシン。
頭部は鋭く、扁平上になっており、頭部装甲の隙間から覗く緑色の一対の眼。
しかし、その背には蛇のような触手がある。
その触手の一本一本には蛇の頭部が備え付けられていた。
それが計十二本、うねり、身体をぶつけ合いながら、獲物を見つ

めているのだ。
両腕をだらりと垂らし、猫背で獲物を睨むその姿は、まさに蛇――

『グラインダー……貴様、リヒト・シュッテンバーグか』
「おうよ。俺が第三次世界大戦の“英雄”だ。尻尾巻いて逃げ出すなら今の内だぜ？」
『ほざけ』

何を今更、といった風なリヒト。
その“英雄”の名で戦意を下げようと心中、思う。
しかし、相手はその神経質そうな声を愉悦に歪めていた。

『目の前に“英雄”とアルカナマシンが居るのだ。鹵獲して持ち帰れば、大きな手柄になるだろう』
「出来るかな？」
『出来るさ』

即答するナードに、リヒトは思わず苦笑した。
目の前の蛇は、今か、今かと飛び掛るタイミングを計っている。
そしてそれを目にして、グラインダーもまた構えを作る。
暗緑色のグラインダーと、黒緑色のウロボロスが相対した。

『Ａｒｃａｎａ　Ｍａｃｈｉｎｅ　０１　Ｕｒｏｂｏｒｏｓ』

ナードが名乗る。
その身体を委ねる、寓意の化身の名を。

『喰らい尽くせ』

その言葉を契機に、二機のジョーカーマシンは一斉に動いた。
先手を取るのはウロボロス。
その背からの伸びる蛇がグラインダーを食い殺さんと唸る。
だが、グラインダーはそれを軽く、横に飛んで回避した。
そのまま回りこむような軌道を描き、ウロボロスの側面へと回る。

「しつこい奴は嫌われるぜ！？」

だが、ウロボロスの尾は直角に曲がり、グラインダーを追尾する。
スピードでは遥かにグラインダーが優っている。
しかし、その追尾性能たるやミサイルよりも遥かに凄まじい。
そんな蛇が十二本、常にグラインダーを追いかけている。
幾ら本体を叩こうとも、このままでは背後から喰らい付かれて終りだろう。

「ならば！」

その場でくるりとターンし、グラインダーは己を追尾してくる蛇に目を向けた。
数は九。
残りの蛇は寝首を掻こうと様子を伺い、今直ぐに攻撃してくる様子ではない。

『無駄だ。貴様のグラインダーの攻撃力如きでは、蛇は殺せん』

ナードは嘲笑した。
確かに、グラインダーの短所の一つには攻撃力がある。
性能が速さを求めるあまりに、その攻撃力は速さに頼った拳撃や蹴撃のみ。
そして、その程度の攻撃では“アルカナマシン”の装甲を突破で

きない。
それが“アルカナマシン”の特徴とも言えるユニットであるのならば、尚更。
「本当にそうか？自分の目で、確かめてみるんだな――――」
グラインダーは蛇の群れに飛び込む。
しかし、直前に大きく身体を捻った。
上半身の捻じれは下半身に伝わり、それぞれが独立したかのような回転を生み出す。
それはまるで銃弾。
スパイラル軌道を描き飛ぶグラインダーに付随して、四肢のバイパスもまた、渦巻くように振り回されていた。
飛び込んだ瞬間、火花が散った。
何事か、と目を見開いたナードが見たのは、己の蛇が千切れる様。
断面は汚く、力任せに引きちぎられたことが容易に想像できる。
そして、それを絡めとったのはグラインダーのバイパス。
魔力の淡い光を纏ったバイパスは、引きちぎられた蛇の頭を牽引しながら舞っていた。
「絡め取る、ってのは蛇だけの技じゃあねぇんだぜ。学習したか？」
『減らず口を……！だが！』
ウロボロスは後退しながら、己の背部から生えた蛇を切断した。
その場には蛇の根元の残骸が残され、同時に、ウロボロス本体を護るかのように待機していた蛇が戻る。
三本の蛇は鞭の様にしなり、グラインダーに警告を与えていた。
ここより先へは行かせない。

ここより先に侵入すれば、攻撃すると。

「レッスン2だッ！」

だが、リヒトは躊躇い無くフットペダルを踏み込む。
自律する蛇などよりも、グラインダーの方が速いことを解っているから。
直線における最高速を出しながら迫る。
まず、一本。
前方で邪魔臭くしなる蛇の中ほどを掴んだ。
そしてそのまま往なし、ついでとばかりに裏剣を叩き込む。
反応すら出来ずに、一本目の蛇が砕け散った。
そして、二本目、三本目の蛇を両手で抉じ開けるように逸らした。
目の前にはウロボロスの本体が、間抜けにも仁王立ちしている。
そのまま、動かないウロボロスに渾身の一撃を――――

『この程度で……！』
「な！？」

しかし、その拳は空で止まった。
否、空ではない。
確かに拳は砕いた。
だが、それは再び現れた蛇の一匹である。
背中から回り込むようにして、ウロボロスの身体自体を蛇が堅守していた。

『ウロボロスの能力は背部ユニットの無限生成。これを一度に薙ぎ払う攻撃を持たない限り、貴様は負ける』
「っちぃ！」

グラインダーはその場から垂直に飛び跳ねた。
背後からは、先ほど往なした二本の蛇が向かい来るからだ。

『いい判断だ……が、遅い』

リヒトの顔が、初めて歪んだ。
見咎めたのは、両脚に繋がれていたバイパスが千切れる様。
逃げ遅れたバイパスのみが、蛇の毒牙に掛かる。
その勢いに釣られながらも、グラインダーはどうにかある程度の距離を開けて着地した。

『やはり、絡め取るのは蛇の技だということだ。学習したか？』
「クソッたれ……！」

悪態を吐き、グラインダーの損害状況を確認した。
無くなってしまった両脚のバイパスの他にも、危険な部位はある。
無茶を聞かせすぎたか、両脚の間接部も異常を訴えているのだ。
軋むような音が聞えた気がして、リヒトはやれやれ、と首を振った。

『さあ、どうする。これでもう、貴様の絡め取る攻撃は使えんぞ』

その言葉に、リヒトは深い溜息を吐く。
そして、口の端に自嘲気味の笑みを浮かべて、言った。

「……三秒」
『何？』
「三秒あれば、十分なんだがなァ。流石に、制限が厳しいか」

貴様、という声の後に、がりりと音がした。

歯を噛むその様子に、リヒトはもう一度深く溜息を吐き。

「仕方が無い、そろそろ本気で戦ってやるか」

と、零した――――

＊　＊　＊

ブライアンは戦いの音を耳にしながら、あることを思い出していた。

それは未だ病室に居るであろう息子のことであるし、会社をまかせっきりにしてしまった妻のことでもある。

だが、彼が今一番心配しているのは、他ならぬ戦いの主。

リヒト・シュッテンバーグであろう。

「傷は痛むか？」

「大丈夫です。問題は……っ！」

ブライアンの肩に激しく痛みが襲い掛かる。

思わず身体を丸めたブライアンに、フェリアはその場で薬を取り出した。

「痛み止めだ。これで、少しは楽になるだろう」
「ははは……ありがとう、ございます」
大声を張り上げる元気も無いか、その声はどこか弱弱しい。
物足りない、とでも言いたげに眉を顰めたフェリア。
その薬をブライアンに手渡すと、再び戦いの起こっている方向へと目を向ける。

洞穴が崩れた先にある、小高い岩の山。
崩落のお陰で見晴らしのよくなったそこに、二人は居た。
「……本当に申し訳ありません。私がナード君を説得できてさえいれば」
「何か、因縁があるようだな」
空気を察し、フェリアはその口で続きを促した。
大した話しではないのですが、と前置きし、ブライアンは語り始める。

「あの子は、本来ブライアン・コーポレーションの跡継ぎとなる筈の人間でした。優秀な男でしたからね」
「では、何故？」
「簡単です。彼はとある人間に“心奪われて”しまったのですよ」
苦笑するような、自嘲するような笑みを浮かべた。
「とある人間の名はルチアーノ――――自らを“牧師”と名乗る男です」
その名を聞いた瞬間、フェリアは凍りつく。

同時に、冷静な頭が判断を下す。

「成る程。確かに、この戦い、私達の物だな」

「は、何ですか？」

「いや、気にするな。独り言だ」

フェリアの言葉に疑問を感じながらも、まあいいです、と首を振るブライアン。

どこか遠い目で戦いを眺めながら、話を続けた。

「ルチアーノに何かを吹き込まれたナード君は、ひたすらに全国の拠点で活動を開始しました。不明瞭な、金が流れたのです」

フェリアには大方、予想がついていた。

だからこそ、やれやれとでも言うように首を振り、ブライアンを制した。

「それで解雇されたナードは、ブライアンに復讐するために“噂”を流しておびき寄せた訳だな」

「基本的にボディーガードが居るお陰で、ハンパな戦力じゃあ近づくことすら出来ませんから」

疑問となるのは、何故、ナードがジョーカーマシンに乗っているか、という一点。

だが、ブライアンはそんなことを考えては居なかった。

それをフェリアに問うてもせん無き事であるし、何より、フェリア自身がそういった話を拒絶するような空気を纏っていたからであろう。

「傍迷惑な」

「流石に、街中でジョーカーマシンに乗る事は出来ませんしねぇ」
暢気に言うブライアンだが、その命が狙われていることには変わりない。
今はただ、リヒトの勝利を願うほか無かった。

＊　＊　＊

蛇はくねり、今まで以上に苛烈に攻め立てる。
空間を、文字通り縦横無尽に這い、四方八方からグラインダーを狙う。
が、それら全ては何も無い空間、或いは地面を砕くに留まっている。
グラインダーは留まらない。
そのスピードを活かし、全ての蛇を振り切り、回避し、避け、往なす。
『その体で、良く粘る……』
だが、ナードは確信していた。
その動きは長くは続かないであろう事を。
そうなれば終り。

蛇を食いつかせて、コックピットブロックを破壊してやれば仕事は終了だ。
口の端に笑みを浮かべて、ナードは思い描く。
新世界に立つ己の姿と、這い蹲り命乞いをするブライアンの姿を幻視する。
彼自身は既に、己の勝ちを疑わなかった。

「えぇい！鬱陶しいんだよボケェ！」

一方、リヒトは苦戦を強いられていた。
度重なる無茶な軌道により、グラインダーの脚部には限界が近い。
今はまだ回避し続けられているが、脚が無くなれば最早、羽をもがれた鳥になってしまう。
メインカメラをウロボロスに向ける。
そこにはただ、仁王立ちで蛇を操るのに集中している姿が見えた。

「舐めやがって……！」

一歩も動じないその姿勢は、リヒトの心を燃やすのには十二分。
そろそろ試してみるか、という言葉を切欠にグラインダーのスピードリミッターを解除した。
次の瞬間、グラインダーは加速する。
通常のジョーカーマシンでは到達できない速度の境地へ。

『なっ……！！』

グラインダーの速度は先ほどまでとは比にならない。
それはまるで、銃弾。
一直線に、ウロボロスを穿たんと迫る、一発の銃弾である。
爆発的な加速力は、アルカナマシン故の性能。

反面、それは乗り手に多大な負荷を掛ける諸刃の剣。
速度のあまりブラックアウトしそうな視界の中で、リヒトは薄く笑う。
「俺自身、通常状態でどこまで耐えられるかは分からんが……！！」
『こいつ……！！』
蛇は既に遥か後方で管を巻くだけの存在と化した。
残るのは、ウロボロスの周囲を警戒していた三本のみ。
先ほどと同じ状況に苦笑しながら、リヒトは更にフットペダルを踏み込んだ。
「今回も、勝つのは俺だ――――」
『止める！！』
宣言し、ウロボロスは再び背部の蛇を九本、パージした。
無用の長物となった蛇達が地面に落ちるよりも早く、グラインダーは拳をつきたてる。
守護する蛇の一匹目は、その頭を砕かれ地に臥す。
だが、それはナードも予測のうち。
あらかじめ配置しておいたもう二匹の蛇が、グラインダーの横合いから襲い掛かる。
完璧なタイミングに、ナードは勝ちを確信する。
『貰った――――』
「甘いっつーの」
馬鹿にしたような声。
それはつまり、ナードの蛇は何にも喰らい付かなかったことを意

味する。
だが、それはグラインダーも同様。
直線上に進むことの出来ないグラインダーは素早くその場に伏せるように飛んだのだ。
だが、それではウロボロスに攻撃は出来ない。
グラインダーはスピードを落としながら、ウロボロスの横合いを通り過ぎていった。

『避けたか。だが、背中がガら空きだ……！』

ウロボロスは振り向かない。
最速の攻撃手段を持っているのだから。
背部から生えた合計十二本の蛇が、全て、一点に集中するように襲い掛かる。
対して、リヒトは言った。

「振り向かずに攻撃ってのは悪手だぜ……！！」

グラインダーは振り返りながらも、その片手を高らかに挙げた。
瞬間、ウロボロスに異変が発生する。

『――――っ！？』

挙動を見ることの出来ないナードには、何が起こったのか目視する手段は無い。
ただ、背部の蛇が一斉に行動不能になった、という事実のみがメインウインドウに表示されていた。
そして、頭だけを振り返らせてその姿を見る。
グラインダーが握っていたのは、ウロボロスが引きちぎった“グラインダーのバイパス”であった。

そしてそれが、地面を這い、“ウロボロスが自ら”踏み付け、グラインダーの手が片方を固定する。
十二本の蛇は、細く長い、鉄色のバイパスに半ば無理やり地に固定させられていたのである――――

『ここから、どうする気だ？』

だが、ナードの余裕は崩れない。
グラインダーには、攻撃の手段が無いのだから。

『その手を離せば、蛇は直ぐに戻って貴様を襲う。どの道、終りだ』
「ふーん。終り、ねぇ」
『なにが可笑しい！！』

くすくすと笑うような声に、ナードは怒りの声を上げた。

「俺、言ったよな？三秒で十分だ、能力の制限が厳しい、ってな」
『だから、どうした……！？』
「見せてやるよ。“裁断者（グラインダー）”の能力を」

口の端に笑み。
暗緑色の装甲をがちゃりと構え、リヒトは鍵語を叫ぶ。

「Ａｒｃａｎａ　Ｏｖｅｒ！！」

時間の遅延。
時を止めるともとれるその能力にも、多大な弱点がある。
使用者への負荷、グラインダー自身のエネルギーの消耗などもそうである。

が、最大の壁は“使用条件”。
アルカナエンジンが要求する条件は、時間の集約。
そして、それと同価値の遅延。
詰まり、三秒時間を止めるためには、三秒間のチャージが必要なのである。
そしてその間攻撃を受けてしまえば、能力は失敗に終わる。
グラインダーの装甲には、細かいながらも損傷が見て取れる。
ウロボロスを相手取って、蛇を往なしながら三秒攻撃を受けないのは不可能であろう。
だが、蛇が封じられたこの瞬間なら――――

訪れるモノクロの視界。
リヒトの頭に血が上っていく様子を、本人が一番感じ取っている。
視界が霞み、ぼやける。
だが、その眼光は衰えることなく、ただ一点を睨む。

「背中が……っ！」

グラインダーに残された、腕のバイパスが魔力の光を噴出した。
それに吹き飛ばされるかのように、グラインダーは空間を奔る。
幾多の敵を葬ってきた拳を構え、赤い瞳が敵を射抜く。
そこにあるのは、ただひとつの意思。
リヒトは叫ぶ。

「がら空きだ――――！！」

突破。
その意思が、蛇の心臓を穿った。

＊　　＊　　＊

『重要参考人だ。殺してはいないだろうな』
「当たり前だろ」

通信の向こうから、フェリアの声が聞えた。
ぶっきら棒に言い放ったリヒトは、倒れっぱなしのウロボロスに視線を投げた。
最期の突撃で破壊した背部ユニット及び腰部意外には目立った損傷は無い。
中に居るはずのナードが出てこないのも、恐らくは脳震盪か何かの所為だろう。
それを捕らえるために、ウロボロスの傍にはフェリアが待機している。

「それよりも、ブライアンは大丈夫なのか？」
『幸い、出血量に比べて傷は浅い。元気にお前の戦いを観戦していたぞ』

冗談交じりの言葉に、リヒトは浅く息を吐いた。
溜息か、安堵か、感嘆かは分からないが、それでも、リヒトの向ける感情は穏かなものであった。

『Ａｒｃａｎａ　Ｏｖｅｒ……使ったな、リヒト』
「おう」

フェリアの声はどこか心配するような響きを孕んでいた。
だが、それに気付かない振りをして、リヒトは即応する。
言葉が出なかったのか、フェリアはそれきりに口を閉ざした。

――――リヒトには分かっている。
擬似的にとはいえ“時間を止める”荒業だ、何らかのリスクがあることは。
そう、例えば、使用直後の圧倒的な倦怠感、疲労の蓄積。
“英雄”と呼ばれたリヒトが、敵を倒したからとはいえ、そのままコックピットで寝てしまうことなど無い。
それは油断に他ならず、正しく愚の極みであるからだ。
だが、前回の時は半ば意識を失うようにして倒れた。
それこそが、アルカナオーバー――――強大な力の代償なのだろう。

気にも留めずに、リヒトはふと、レーダーを見た。
備え付けられたレーダーは魔力に反応し、その位置を赤色で示す。
レーダーには、赤い光点が四つ浮かぶ。
一つは、グラインダー自身。
一つは、ウロボロス。
では、後の二つは――――

「フェリア！！」

叫んだ。
その声にフェリアが振り向いた瞬間。

「――――ッ！！」

直視できない、眩い光条が駆け抜けた。
それは、白い色をした“破壊”という概念の塊。
それが着弾した場所は、間違いなく、ウロボロスであった。

爆発、そして衝撃。
辺りを魔力爆発特有の白い光が包み込み、グラインダーの視界が奪われる。

「クソっ！フェリア！！」
『……私は大丈夫だ』

あっさりと言葉を返すフェリア。
しかし、リヒトが目視し見つけたそのときには、その身体は爆風であおられた所為でボロボロになっていた。
白いコートは無残にも吹き飛び、黒く炭化している。
すぐさまにリヒトはグラインダーを操作、コックピットハッチを開放した。

「乗れ！」
「言われずとも」

フェリアはリヒトの手を借りてコックピットに乗り込んだ。
背後でコックピットが閉じていく音を聞きながら、リヒトは再びレーダーを覗く。
四つの赤い反応は変わらずに四つであるが、そのうちの一つは目視できる距離に存在していた。

「……ッ！テメェ……！」

リヒトはその姿を見て、思い切り奥歯を噛んだ。
忘れもしない、その濃灰色の影。
空間を“抉じ開ける”能力を持っているであろう、“？？塔”のアルカナマシン。

『よぉ、カトンボ野郎！元気してたかァ！？』
「ファウスト……！！」

バベルは、静かに立つ。
神の落雷の落ちるその日まで、決して崩れることの無い塔。
立ちはだかる敵を前にして、しかし、リヒトは言う。

「テメェこの野郎！人の家破壊した挙句目ェ覚ましたら消えていやがって！修理費払えクソ野郎！！」
『黙れカトンボ！テメェにうっかり攻撃喰らったお陰で評価がダダ下がりで危うくアルカナマシン降ろされかけたんだぞ！！』
「悪の組織の内部事情何ざ知ったこっちゃねェよ！！」
『テメェの家計事情何ざ知らねェっつーの！！』
「貴様ら、子供か……？」

口汚く言い争う二人を見て、フェリアはげんなりと呟いた。
対照的に口喧嘩が広がる中で、リヒトはふと、素に戻ったように言う。

「何故、ウロボロスを撃った？味方じゃあねぇのか？」
『味方ァ？こいつは道具だぜ、“道具”。アルカナエンジンを掘り返すためのピッケルってトコよ』

ファウストは嘲笑うように言ってのけた。
ウロボロスは既に大破し、中に居た筈のナードは無事では済むま

い。
蛇の心臓は、活動を停止している。
その振る舞いに怒りを覚えたリヒトが、カメラアイ越しにバベルを、ファウストを睨みつける。
対して、フェリアが至極冷静に口を挟んだ。

「エンジンを手に入れさせ、後から奪う———貴様らの常套手段だったな」
『そゆこと。まぁ、今回俺は戦いに来た訳じゃあないからなァ……』

言うと同時、バベルはその右手を水平に構えた。
その手に持つのは、黒く、長い砲身を持ったジョーカーマシン用の拳銃である。
照準が狙う先は、崩れた洞窟の瓦礫、その天辺付近。

『お前らが妙な真似を見せたら、あそこで暢気に寝てやがる男は天国逝きだぜ？』

その行動に、リヒトは無意識下でその言葉を呟いた。
この状況をひっくり返す可能性のある、逆転の言葉を———

『おっと、“アルカナオーバー”なんて使おうとするなよ？速攻潰すからな？』

その潰す、はグラインダーに向けられたものではない。
魔力の膨れ上がるアルカナオーバー。
その発動魔力を検出し次第、無条件で人質は死ぬ。
ファウストの言葉に、リヒトはただ怒りを溜め込むしかなかった。

「目的は何だ？」
『ウロボロス……“Ａｒｃａｎａ　Ｍａｃｈｉｎｅ　０１”の回収。ただそれだけだ』

言うやいなや、バベルはその無骨な片手を挙げた。
その掌が睨むのは、最早沈黙を保つしかなくなったウロボロス。
リヒトは無意識下で息を呑む。
その魔力はレーダー上で、遥かに大きな光量の赤い点として表示されていた。

そして現れる超常、世界を歪める力。
ウロボロスの真下、ジャングル地帯であった空間が、まるで地割れのように崩れていく。
その先にあるのは岩色の地層ではなく、ただ、深淵から這い出してきた闇である。

『バベルの能力は“空間の支配”。自由自在に空間を抉じ開けて、その隙間を移動できるのさ』

ビビったか、とファウストは鼻を鳴らした。
ファウストが言葉を紡ぐ間、ウロボロスは既に飲み込まれていた。
そこには影も形も無く、ただ、“闇があった”という事実を示すジャングルの空き地が存在するのみ。

ファウストの言葉を聞いても、リヒトは未だに深淵の闇を見つめたまま動かない。
リヒトはその事実を認めたくなかった。
が、確かに、意識していた。
――――呑まれている、と。

『さて、仕事もこれで終りだ。俺も帰って、籠球の試合を見たいんでなァ』

そして、前回の戦い。

矮小な存在が、綱渡りのバランスの上で手に入れた“相討ち”という結果。

歯を食いしばる。

だが、同時に思うこともある。

“魔力”、“アルカナエンジン”、“デイブレイク”、“フェリア”――

これらの全てとは行かないが、ある程度の真実を掴んだリヒトなら、或いは。

否、真実を掴んだリヒトなら、目の前の強大な存在にも対抗できる。

知らず知らずのうちに、リヒトの口の端が上がった。

『じゃあなァ、哀れな“道化（えいゆう）”君よォ』

ファウストは皮肉を込めて、そう呼んだ。

再び、バベルの巨体が空間の割れ目へと還っていく。

「……上等」

その姿を見咎め、リヒトは怒りを込め、親指を下へ突き出した。

「ファウスト、次に会った時がテメェの最期だ」

去り際のバベルが、親指の意志を返す。

高らかに掲げた中指は天を向き――リヒトは、まだ顔も知らない男へと再戦の意思を固めた。

第九話　蛇の心臓（後書き）

ここらへんからようやくトンデモロボと戦えますね。
個人的に早く出したい機体も居るので、年末はハイペースで頑張ります。

第十話　砂塵の地にて

「あー、クソ！一体どうしてこうなった！」

直射日光を浴びながら、リヒトは往来の真ん中で毒づいた。
周りにあるのは砂と、石造りの建物と、浅黒い肌の人種の群れ。
彼の探している存在は見当たらない。

リヒトは探し回ることを止めて、沿道の瓦礫に腰を下ろした。
その背後に存在していた建物は崩れ、あちこちに未だ残る焦げ跡がその激しさを物語る。
この町で行われている行為、それは、戦争。
人類が人類を粛清し、信念の名の下にそれは行われる。
だが、そんなものは今のリヒトには興味がまるで無い。

「見つからねェ……手懸りも、何もかも……」

今日で、三日。
探し物を見つけられぬまま、三日が無常に過ぎ去っていた。
楽天家のリヒトとは言え、流石に焦ってくる。
“アルカナエンジン”などという存在を紛争に利用されれば、それこそ、戦いは泥沼と化してしまう。
そこの往来を行く罪の無い人間たちが、無闇に血を流すこととなりえるのだから。

暑さに項垂れるリヒトに、影が差した。
それは決して雲が流れたわけではなく、好意を持った人間が寄ってきたわけでもない。
逆に、その人影は害意のみを持って笑っていた。

男の肌は黒く、そして、全身に傷跡を残した戦士だ。
その識別帽と羽織った黄土色のタクティカルベストから、男は軍人であることが分かる。
ご丁寧にもその腰には大型のアーミーナイフを引っさげ、威嚇するように陽光を照り返していた。
そしてその影を見上げようともせず、リヒトは言う。

「何人目だよ……」
「――――？」

男の喋る言葉は異国の言葉だ。
脳内で翻訳しようと思えば出来たが、それをリヒトはしなかった。
理由は単純、男の言葉を解す必要性を感じなかったから。
それでも、男が呆けた顔をし、次に笑い出したことから、リヒトが馬鹿にされていると言う事実に気付くまで時間は掛からなかった。
だが、それを怒る気力すらも、リヒトには無かったのだ。

「いい加減にしろよ、クソ野郎が。揃いも揃って弱い者虐めしか出来ねェヒヨッコが、ピイピイ喚くな」

わざわざ言葉を現地のものに変えたこともあって、男は途端に顔を真っ赤にした。
そしてそのまま、自慢のアーミーナイフを抜き放つ。
が、その時にはすでに、リヒトの手刀が喉元に刺さっている。
悶絶する男を尻目にリヒトは立ち上がり、アーミーナイフを持つ

右手を踏みつけた。
堪らず、男はアーミーナイフを手放す。
「いいか、ボンクラ。俺は今最っ高に気が立ってるんだ。次俺の邪魔したら容赦しねェ」
涙目の男にそれだけ言うと、リヒトはその足をどかした。
怯えた目で見上げる男を一瞥すると、リヒトは足を振り上げて――
「分かったなら、寝てろ！！」
振り下ろす。
踵落としが決まり、男は無様にも砂の上に倒れた。
残されたリヒトは、一人、空に呟く。
「クソ、何処行ったんだよ……あんのクソ女！」
リヒトの視線は、憎らしいほど晴れ渡る空。
リヒトのポケットには、壊れた携帯電話。
リヒトの隣に、フェリアは居ない。
事情を説明するならば、彼らがこの町に辿り着いた三日前の日まで遡る――――

＊　＊　＊

「お前、暑いのに大丈夫なのか？前より健康的だけど」
「私は寒冷地に棲む動物では無いぞ」

リヒト達が新たに踏み入れた任務地は、ほぼ同じ緯度に存在する砂漠の国だった。
石造りの建物が主流の、まだまだ発展途上の国。
しかし、ここには今、世界の何処よりも“兵器”が溢れている。
紛争地帯となっているこの地域は、今や各国の兵器試験場と化しているのが現実であった。
代理戦争とも呼べるこの紛争は、第三次世界大戦終結後から未だに終わっていない。

「んで、ここにデイブレイクがジョーカーマシンを持って現れるって事か？」
「“アルカナマシン”であるかは分からないがな」

フェリアが吐き捨てるのと同時に、リヒトは賛同の意を返した。
この紛争地帯にデイブレイクのジョーカーマシンが派遣される、という情報は、何処からかベルランドが掴んできた情報である。
果たしてその情報源を信用できるのかどうかは、分からない。
だが、彼らはわざわざ、この地に足を運んだ。
しかし、前回の“ウロボロス”以降手懸りをなくしてしまった彼らには、とりあえず足を動かすしか道は残されていなかったのだから。

「不確かな情報でしか動けないってのは、こう、やきもきするなァ」
「ぼやくな。それは、私とて同じなのだ」
だからこそ、フェリアは自然に足を速めていた。
リヒトには、その表情が心なしか焦っているように見える。
彼女自身が言っていた訳ではないが、リヒトには大まかに彼女の心境を察していた。
きっと、フェリアは“デイブレイク”と深く関わっている。
その上で、“今の”デイブレイクが、決して、許せないのだ。

リヒトは独り、苦笑する。
最初は鉄面皮のような女の表情も、最近になって変化がわかるようになってきた。
ならば。
ならば、今しばらくは彼女の“手足”となって、デイブレイクとアルカナエンジンを追うのも悪くは無い———
二歩ほど先を行くフェリアを追って、リヒトが大股で歩き出した時だった。

「きゃあっ！？」

目の前から、甲高い嬌声が上がった。
一瞬フェリアのものかと瞠目したリヒトだが、肝心の本人は突っ立ったまま首一つ動かしていない。
もしもこの状況でこの悲鳴を上げたのなら、相当珍妙な状況であろう。
下らない考えを巡らせるリヒトとは対照的に、フェリアはいつも通りの冷静さであった。
例え目の前に突然、人がぶつかってきても表情を崩さない。

「大丈夫か？」
「助けてくださいっ！追われてるんですっ！」
が、開口一番この科白を並べられては、フェリアも困惑の沈黙を返すしかなかった。
言う間にもぶつかって来た若い女はフェリアの後ろに隠れる。
その不安定な表情を振り返り、今一度見る前に、フェリアの目の前には複数人の屈強な男が現れていた。
「……逃げられるとでも思ってんのか？この阿婆擦れ女が！！」
口汚く言葉を吐いたのは、先頭を行くスキンヘッドの男。
浅黒い肌はこの地に住む人間の特徴であり、大きな体躯は軍人を思わせた。
事実、彼の黄土色のベストはこの国の国軍正規のものであるが、リヒト達が知る由は無い。
「アンタ等みたいなスカポンタンに触らせるほど、乙女の柔肌は軽々しいものじゃありませんよ！！」
「んだとォ！？」
好き放題に言う女だが、肝心の身体は完全にフェリアに隠れていた。
顔だけ出して舌を伸ばし挑発する女に、男達は怒り心頭、といった具合だ。
しかし、当人らの関係性を全く知らないリヒトとフェリアだけが、呆然とその様子を窺っていた。
「オイ、テメェ！女だろうが、そいつを庇うなら容赦はしねェぞ

！！」
「いや、そんな気は無いが」
「ちょっと！乙女のピンチよ！？ちょっとぐらい協力してくれてもいいじゃないの！」

恫喝する男だが、フェリアはさらりと流す。
それに否定の言葉を投げた女は、どうにも酷く怒っているらしい。
フェリアが、やれやれ、と溜息を吐いた。

「面倒だ！全員、やっちまえ！！」

気付けば辺りに居た人達は全て遠巻きに喧騒を眺めていた。
そして、男の言った“全員”には、遠巻きに離れなかった自分が含まれていることを理解し、リヒトは溜息を吐く。
猛然と腕を振り上げる男に対し、それを制止しようと一歩を踏み出したとき。
その場に居た全員の耳に、頭の割れるような甲高い音が響いた。

「きゃぁあああっ！？」
「な、何だこりゃあ！？」

狼狽する、謎の女とリヒト。
対して冷静なフェリアと、二人ほどではないが焦りを見せる男たち。
そして何よりも、周囲で遠巻きに観察していた人間たちが、慌しく動き始めた。

「成る程、これは警報だな。この町に爆撃機でも飛んでくるのだろう」
「冷静に言ってる場合じゃ———のわっ！？」

フェリアが冷静に考察を述べたが、その言葉は半分ほどもリヒトの耳に入っては居なかった。
知らぬ間に人の流れは大河となり、リヒトや男たちを包んでいたのだ。
喧騒が既に轟音と化し、フェリアとリヒトの会話を阻む。
そして、流れは次第に激流と化し、二人の間を隔てるように太くなっていった。

「――――おい！フェリア……――――っ！！」

それ以上言葉を届けることも出来ず、リヒトは人波に飲まれたのであった。

＊　＊　＊

路地を抜けた先にあった屋台の中で、二人の女性がベンチに腰掛け会話していた。

「いやぁ、助かりましたよ！どうにか、あの馬鹿どもも撒けたみたいで」
「そうか」

フェリアの正面で、女は心底安心したようにからりと笑った。
年の頃はまだ若く、金色の髪がいたるところで自己主張激しく跳ねている。
その姿から想像できるのは、そそっかしいものであったが、実際そうなのであろう。
服装を見れば、この国とは明らかに違う、異国感丸出しのラフスタイルだったのだから。
が、そのことについて言及できるほど、フェリアの服装も馴染んでいるとは言いがたかったのだが。

「私はリラ・アーノート。フリーのジャーナリストをやってます」

リラは薄い胸を張り、自慢げに笑った。
そのしたり顔に思わず、フェリアは苦笑する。
尤も、その苦笑はその表情が殆ど変わる事は無く、リラに気付かれる事は無かった。

「貴女は？」
「フェリアだ」

リラの期待を込めた眼差しに耐えかねて、フェリアは名を名乗る。
出来ることならば今直ぐにリラを振り切ってリヒトと合流したいのであるが、それが出来ない。
先ほどから食い入るように見つめてくるリラを前にして、逃げられるほどフェリアは大胆不敵ではなかった。

「で、フェリアさん。貴女、この国の人間じゃあないでしょう？」

答えるのも億劫で、首肯だけで返した。

まるでクイズ番組で正解したかのごとく大げさに喜んだリラを尻目に、気付かれないように溜息を吐く。

「ジャーナリストの勘は鋭いですよ！」

「……別に、普通だと思うがな」

「何か言いました！？」

「……別に」

リラの迫力に負け、思わず首を横に振る。

本当にジャーナリストかと疑いを掛けるほどに、彼女は猪突猛進であった。

「じゃあ、貴女はこんな噂を知ってますか？」

声のトーンを変えて、リラは続ける。

「この紛争に決着をつけるために、軍部がジョーカーマシンを新たに用意したって話」

「……！」

思わず、フェリアは息を呑んだ。

確信に近い情報が、意外な人間の口から出されたことに、驚きを隠せない。

が、それでも、フェリアはポーカーフェイスを保って言った。

「……知っている」

「そのジョーカーマシンが“ただの”ジョーカーマシンでは無い、って事も？」

「ああ」

短く答えた。
無論、フェリアの返答は全て推測の元に打ち出されたものであり、合否を判断するには直接それを見るしかない。
だが、今は、少しでも“アルカナエンジン”に辿り着くための情報が必要であった。
いざとなれば、リヒトとの別行動も辞さない。
そんな気持ちが、フェリアの胸中に渦を巻いていた。
一方、そんなことは露知らず、リラが隣で子供のようにはしゃいでいる。

「やっぱり、ジャーナリストとしての勘が冴えてるわ！この山場、頂きね！」
「嬉しさに水を差すようで悪いが、まさかこの調子で他の人間にも聞いて回っていたのか？」
「え？そうですけど？」

それが何か、とでも言いたげに首を傾げるリラ。
フェリアは内心驚きながら、同時に納得していた。

「道理で、あんな荒くれ男に目を付けられる訳だ」
「ちょ、私は悪くないですよ！アイツらがですねぇ……！！」

以後、暫く続いた男たちへの罵詈雑言を聞き流しながら、フェリアは考える。
デイブレイクは果たして、本当に紛争へと介入してくるのか。
しかも、わざわざ“軍部”への助力という形で。
それはつまり、デイブレイクは小国ながらも、国の中枢への影響力を持っているということだ。

組織力の高さに驚き、そして、改めて考える。

果たして、一構成員に過ぎなかった自分自身が、牙を突き立てる事が出来るのか。
答えは、否。
圧倒的な力を前にすれば、フェリアなどただの女性に過ぎない。
だが、彼女の掌にはまだ、希望が残されている。
“英雄”にして“切り札（ジョーカー）”、リヒト・シュッテンバーグ。
“稀代の天才”にして親友、ハインリッヒ。
そして、“外なる子（アウトオーダー）”オルタ。
三人の助力があれば、或いは。
デイブレイクを瓦解させることも、可能かもしれない――――

「ちょっと！聞いてます！？」

フェリアの思考はリラのがなる声で中断させられた。
やれやれ、と肩を竦めながらも、隣に座るリラへと向き直る。
その瞬間――――リラの背後から、一人の男が現れた。

「むぐぅっ！？」

そして男はフェリアが応戦するよりも早く、リラの口を塞ぎ、拘束した。
突然のことに身悶えるが、リラの力ではその男の拘束を破る事は出来ない。
そしてもう一人、別の男が現れてフェリアに言う。

「お前がフェリアだな？」
「貴様ら、何者だ？」
「一緒に来てもらおう。拒否権は無い」

その言葉に答える気は無いのか、男は淡々と言葉を紡ぐ。
有無を言わさぬ男の物言いに、フェリアは一瞬考え込むかのように沈黙した。
が、目に涙を浮かべるリラの姿を見て、自嘲気味に首を振って両手を挙げる。

「……仕方が無い。危害を加える気は？」
「無い」

短い問答と共に、二人の姿はその露天から消えた。
後に残されたのは、人込みに紛れたときに壊れたフェリアの携帯電話。
それと、注文者が居ないという状況に疑問符を浮かべる露天の店主のみであった。

＊　＊　＊

フェリアと逸れ、約五日。
既にそれだけの時が経っているのにも関わらず、リヒトは何一つ

探し出せていなかった。
発見したことと言えば、この国の兵隊は酷く野蛮で横暴なチンピラ崩れであること。
そして、異国民ゆえか、彼らに自分自身が絡まれやすいということのみだ。
だがその二つの情報は、肝心の探し人、探し物共に繋がらなかった。

「あぢぃー……クソ、一体、俺が何をした……？」

沿道に座り込んで、リヒトはコートを脇に抱えたまま項垂れた。
そんな彼の姿に、荒くれの軍人達の間で“死神”という渾名が付いていることを知る由は無い。
絡んでくる軍人を悉く力技で排除した結果である。
本人としては五月蝿い蝿を追い払っただけであったが、そのネームバリューは確かに、この町に浸透していた。
そして、この町に居るのは軍人だけではない。

「もし、そこの御方。随分とお困りのご様子ですが、如何しました？」
「……あン？」

この地でリヒトに話しかけてくる人間は、基本的に敬語は話さない。
それが果たして民族柄なのか、単に性格ゆえなのかは分からないし、リヒトは気にしてもいなかった。
だから、いつもならば問答無用で胸倉を掴む手を抑えた。
「私に協力できることならば、何なりと実行できますが？」

独特の口調と訛りを持つ男は、今までと同じ浅黒い肌だった。
が、頭に巻きつけた緑色のバンダナの下に潜んでいる細目は、今までの誰よりも限り無く鋭い。
リヒトは見上げて、開口一番にこう尋ねた。

「テメェ、軍人じゃないなら……誰だ？いや、違うな……“何処”のヤツだ？」
「鋭いですねぇ」

リヒトの言葉に満足したか、男は頷き、嬉しそうに口の端を上げた。
その様子を怪訝そうな目で眺めるリヒトであったが、その正体には見当が付いていた。

この地で起こっている紛争。
そもそも、紛争とは相手が居ることで初めて起こる“戦い”という行為だ。
ならば、現在この地で正規軍と争っているもう一方の組織は何か。

「私は“人民開放部隊”の隊長をしております。イナドと申します」
「そうかい」

リヒトは内心瞠目する。
何故、わざわざ組織のトップに当たる存在がコンタクトを取ってきたのか。
が、表情には全く出さず、己の心の内のみでその言葉と意図を反芻した。

「意外と驚かれませんね。サプライズが必要だったでしょうか？」

「ああ、そうだな。驚かせるには一味も、二味も足りなかった」
リヒトはつんけんとした言葉を返す。
その男の意図が読めないのだ。
“英雄”と呼ばれたリヒトに接触するのならば、やはり、その能力を目当てにしているのか。
だが、リヒトが易々と紛争に介入できるはずも無い。
どうあっても、リヒトは紛争の協力はしない考えであった。
「ならば、この話を聞けばどうでしょうか？」
が、気になる。
何故、こうも、イナドと名乗った男は自信満々の笑みを浮かべているのか――
「貴方の探し人であるフェリアさんを預かっていると言えば、少しは驚いてくれるのでしょうか？」
「……！」
事無げに言うイナドに、今度こそ、リヒトは掴みかかった。
何故、その言葉を聞いただけでそうしたのかは分からないが、ただ、怒りが膨らんだ。
目の前の男がもしも、フェリアに何か危害を加えているのであれば――
「落ち着いてください。我々は、何もしておりません。保護しているだけです」
その言葉を聞いても、リヒトはその眼光を緩めなかった。
警戒を解く事無く、静かに言う。

「ああ、驚いた。物凄くな。だから、一つだけ聞く。クソ女に会うには、どうすればいい？テメェの要求は何だ？」
「要求なんて、ありませんよ。私は唯、貴方が困っていたので助けようと思っただけです」

胸倉を掴まれたままでも、イナドの笑顔は崩れていなかった。
この状況で眉の一つも動かさないのは、胆力の賜物か、相当の自信を持つのか。
その様子に観念したのか、リヒトはその腕を下ろして息を吐いた。

「……案内しろ」
「ハイ、分かりました」

崩れた襟元を直しながら、イナドはにこりと笑った。

第十話　砂塵の地にて（後書き）

やっぱり三話で一つのエピソードとすることにしました。
二話だと走り気味になってしまうので……。

第十一話　死神と龍

それは、砂漠の中の発展途上国とは考えられぬほどの部屋だった。
備え付けられたテレビは大型液晶で、空調設備も整っている。
調度品はまるでホテルの一室のように綺麗であったし、彩る照明は柔らかい光を放っていた。
だが、そんな中に居るのは穏かな様子ではない女性二人組み。

「……」

腕を組み、黙りこくったフェリア。

「あぁ、もう！私はこんなところで死ねないのよ！死んでたまるもんですかっ！！」

泣き疲れたのか、今度は怒り始めたリラ・アーノート。
両者は四人掛けのソファーに腰を下ろして、優雅に紅茶を啜っていた。
尤も、リラの場合は啜る、というよりも流し込む、といった体であったが。

「落ち着け。そう焦っては、いい結果は生まれないぞ」
「大体、何で私が捕まらなきゃならないんですか！？戦争ジャー

ナリストですよ！？」

戦争ジャーナリストだからだ、という言葉を紅茶と共に飲み干し、フェリアは首を振った。

その動きを否定と取ったか肯定と取ったかは定かでは無いが、リラの怒りは更にボルテージを上げる。

怒りの矛先が向かうのは、先ほどから唯一の出入り口に立つ黒服の男だ。

「ちょっと、アンタ！こんな事して恥ずかしくないの！？人間として一片の良心があるなら、早く私たちを解放しなさい！！」

だが、その言葉に帰ってくるのは沈黙であり、リラは悔しそうに表情を歪めた。

焦りが先行している様子のリラとは違い、フェリアは事態を把握しようと努力する。

そもそも、拘束する理由。

それも、二人とも同時に拘束せざるを得なかった理由だ。

どちらか片方が対象であったが、結果、仕方が無いので両者拘束したという線。

これには、フェリアは己自身が狙われる自覚はある。

それ故に、そこに立っている男の所属している組織が“軍”及び“デイブレイク”に関連する組織であることが推測できる。

尤もこの説は、リラの齎した情報が正しければ、という注意書きが付くが。

一方、ジャーナリストであるリラを狙ったというパターン。

これは良くある話で、こういった紛争地帯では人質を取るためにジャーナリストを拘束することがある。

そしてその場合、十中八九バックの組織は“反乱軍”ないし“革命軍”だ。
これは拘束する対象がどちらでも良かった、という例においても通ずる。

だが、だからこそ、フェリアは怪訝に眉を顰める。
何故、ここまでの待遇で人質を置いておく必要があるのか。
ここへと放り込まれるまで意外には目だった拘束は無く、所持品なども無事なまま持っている。
危害を加える気は無い、とまで言った。
普通なら、所持品は全て奪い、抵抗の可能性を無くすはず。
それは果たして、彼らの自信か、慢心か、それとも———

「フェリアさん!!」

現実に意識を引き戻したフェリアに、リラは怒り顔のままで指を突きつけた。

「貴女も、脱出したいでしょう!?こんな訳の分からない連中に捕まったままでいる道理は無いのですから!」

熱の篭った言葉に、フェリアはただ頷くことしか出来ない。
そう、訳の分からない連中。
軍や反乱軍の取る人質と考えるには手緩く、ただの軟禁である現状。
では、彼女らを軟禁状態にする理由が必要だ。
その理由とは一体———フェリアがおぼろげながらも答えに辿り着きかけた瞬間だった。

『———敵襲!!敵襲っ!!』

「きゃぁあああああっ！？」

焦った声は、部屋に備え付けられたスピーカー越しに響いていた。
驚いた拍子にリラはティーカップを取り落とし、鋭い悲鳴が同時に木霊する。

「敵襲……まさか」

男の声で、只管にその事実を告げている。
そして、部屋の入り口に立つ男も珍しく慌てていた。
同時に、腰につけていた通信機器を取り出して耳元へと運ぶ。
恐らく、上のものへと指示を仰ぐための行為だろう。

それは、拘束する者される者、両者共に予定外のイベント。
だが、フェリアにはまたとない状況。
敵となる存在に襲撃され、浮き足立った今のみが。

「リラ」
「きゃあああああああああああああ———って、はい？」
「逃げるぞ」

女性二人が理由見えぬ拘束から逃れ得る、ただひとつの好機であった。

＊　＊　＊

「あの野郎、また何も言わなかった……今度絶対潰す。絶対にだ」
砂地を走る装甲車両ががたがたと揺れる中、リヒトは呪詛の言葉を吐いた。
表情は剣呑であり、それら全ての怒りと怨みは遠くに居る一人の男に向けられている。

「仕方ないです。連絡が来たのは、貴方が到着した次の日でしたから」
「そういう問題じゃねぇんだよ……」

運転席で軽快に車を飛ばすイナドが、苦笑しながら言葉を紡ぐ。
が、それはリヒトの心を静めるには至らない。

イナドが運転する車に乗せられ、最初にした事は全てのネタばらしであった。
彼の所属する人民解放部隊は、この地で圧政を続ける軍をどうにかするために立ち上げられたゲリラ組織だ。
そして、そこに対する援助を担当していたのが、第三次世界大戦時に知り合いであった“三英雄”が一人、“猛禽”――――
即ち、ベルランドは最初から、彼らの存在を知った上でリヒトを寄越したのである。
そう、フェリアが既に彼らの手中に居る事は幸運なことであり。
だからこそ、リヒトは連絡不備という理由でベルランドをうらん

でいた。

「そもそも、一度や二度じゃねぇ。全部だ、今までの仕事、全部で連絡を寄越しやがらねぇ！」

ブライアンの件に関しても、リヒトはベルランドが一枚噛んでいたと見ている。

バベルが去った後に素早く派遣された“ブライアンの執事”が、“軍用ヘリ”を操っていたのがいい証拠である。

「きっと、サプライズが好きなのでしょう」

「笑い事じゃねぇぞ！」

くすくすと笑うイナドに、リヒトは面白く無さそうに鼻を鳴らした。

「あの野郎は昔っから俺だけには適当に当たりやがる。“英雄”ともあろう者だぜ？もうちょっと、良い待遇を期待したいんだがなァ……」

「きっと、信頼しているのでしょう。リヒトさんのことを」

イナドが言うと、リヒトは胡散臭げに首を振った。

その様子をバックミラー越しに一瞥し、イナドがくぐもった笑いを漏らす。

リヒトはその様子を、同じくバックミラー越しに睨みつけるが、イナドが止めようともしない様子を見て嘆息した。

そこから暫く、車内には会話と呼べる物は無かった。
横たわる沈黙。
響く音は、タイヤが砂を噛む小気味の良い音のみ。
いつの間にか、リヒトの意識は眠りの際へと落ちかけていた。

「――――っ！！」

だが、突如その目を見開く。
リヒトの耳朶には、確かに、砂噛み以外の音が届いていた。
車外へと身体を傾け、食い入るように砂塵の奥を覗き込む。
一連の行動に、イナドは緊張の意図を察した。

「まさか……」
「急げ！イナド！！」

口にするが早いか、イナドは言葉とほぼ同時にアクセルを踏み込んだ。
全速力を出した車は大きく跳ね、中に居る二人が一瞬宙に浮かぶ。
そして、どこまでも広がる砂塵の奥で見たのだ。
イナドの目指す先で、戦闘行為が行われているのを――――

『……イナド様。敵襲です』

車内に響いた声は重苦しく、イナドに緊急事態を告げるものであった。
片手で器用にスピーカーの音量を最大に上げると、いつの間にか付けたヘッドセットで返事を返す。

「敵戦力はどうです？それと、姫は？」

姫の言葉には心当たりがある。
恐らく暗号、しかも、リヒトの“相棒”に当たる存在を暗喩した言葉だ。

『敵戦力は歩兵を主力としていますが、装備からしていつもの正規軍です。姫は……』

音量最大のためか、通信機の向こうからは絹を裂くような女の悲鳴が響いていた。
それをリヒトが聞きとがめると同時に、突然通信が途絶える。
が、数秒の後に何事も無く復活。
しかし通信機越しの状況は、劇的に変化を遂げていた。

『今、逃げられました』
「……ッあの、馬鹿女が！」

リヒトは思わず毒づいた。
そもそも、フェリアには何の事情の説明もしていなかったのか。
疑問を篭めてイナドを見やると、イナドもまた、通信機の先を眺めているように見えた。
数秒、緊要な沈黙が続き、通信機の向こうの男は口を開く。

『申し訳ありません。急いでいたもので、事情の説明を忘れておりました』
「……もういいから、君は、姫を捜しなさい。付き人も一緒に、だ」
『了解しました』

言葉と共に、通信が断絶する。

そして、待っていたかのように、車内に二つの溜息が零れた。

「……急ぐぞ、イナド」

「はい。そうですね……」

砂塵を巻き上げ、暴走運転をしながら、全ての役者が揃いつつあった。

全てが目指しているのは、イナドたちの隠れアジトの一つ。

そしてそこに居る、ただ一人の女科学者。

フェリア・オルタナティブ、その人であった。

＊　＊　＊

爆音が響き、甲高い声が上がる。

揺れる白色の廊下を走り、フェリアたちは出口を目指していた。

「ここはどうやら元研究所といった具合か……ならばこの廊下は……」

「っきゃあああああっ！！」

非常事態にも冷静に対処し、先導するのはフェリアだ。
いつも通りの鉄仮面に焦りを映すことは無く、迅速に行動する。
一方、金切り声を上げる女性はリラ。
恐怖を押し殺す事無く声を上げる様は、しかし、一般人の反応には相違ない。
その事に関して責める事も、宥めることも出来ないフェリアは、ただ只管に脱出を目指していた。
背後からの追手は未だ無いことだけが幸いだ。

「イヤぁあああああっ！！」

また、爆音が響いた。
それと同時に上がる金切り声に耳をやられながらも、フェリアは確実に出口へと歩みを進めていた。
既に研究区画を抜け、エントランスへと繋がる一本道の廊下へと辿り着いている。

「うぅ……もうヤダぁっ！」

もう何度目かの、リラの泣き言。
ただし、今回ばかりは切迫した、本気の泣き言だった。
その証拠に、先ほどまで手を引かれていたリラはその場に座り込み、細面に涙を浮かべていた。

「どうした、あと少しで脱出出来るんだぞ？」
「さっきから爆発してるって事は、敵が居るってことじゃない！！」

ヒステリック気味に叫んだリラ。
フェリアは、意外に状況を把握しているな、と、どうでもいい感

想を抱いた。
が、それは今この状況の解決にはならず、溜息を吐きながらリラへと向き直る。

「なあ、リラ」
「囲まれているんじゃ貴女でもどうしようもないじゃない！！」
「むぅ……」

慰め程度としてでも掛けようとしていた言葉を先に言われ、フェリアは押し黙る。
いつの間にか涙は浮かべるだけでは飽き足らず、流れるほどの量となってリラの頬を濡らしていた。

「しかしだな、ここで止まっていても」
「もう、どうしろって言うのよぉ……」

どうにも、フェリアには他人の心の機微といったものは理解できなかった。
だからこそ、彼女は他者よりも深く物を考える。
せめて他人よりは役に立つように、せめて他人の役に立つように。
深慮癖とも言える。
だからこそ、彼女はその背中に迫る黒服の男に気付く事は無かったが———

「えぇい！！もういいわ！！」
「……ぐぅっ！？」

突然立ち上がったリラの拳を顔面に受け、無様に倒れる男。
その姿を見て呆然としたフェリアは、後ろに倒れた男を一瞥することすら出来なかった。

この男はフェリア達を保護しようと駆けつけた人民解放部隊の一員であったが、それに気付けた者は誰一人としていない。

「だったら、最期まで無様に生き抜いてやろうじゃない！！死んだって、諦められるモンですか！！」

「リラ……」

リラは涙を拭いながら、声高に宣言した。

それは覚悟。

死に怯えて生きるのではなく、生きる為に死ぬ程の覚悟。

その意思を受け取ったフェリアは、薄く微笑み。

「そうか。ならば――――」

「女の底意地、見せてやるわっ！！」

リラの威勢のいい声と共に、フェリアは頷いた。

そして、脳裏に“とある男”を思い浮かべる。

「一度死んだ気分で、行くわよっ！！頑張れ、逃げるな、私っ！！」

勇ましく、今にも戦場へと飛び出さんと逸るリラを見てその姿を重ねたのだ。

“英雄”であり、“切り札（ジョーカー）”であり、“相棒（パートナー）”と言える男。

リヒト・シュッテンバーグ、その人の姿を。

＊　　＊　　＊

「クソったれ！！俺が“英雄”だっつっても攻撃が収まらねぇどころか激しくなってねぇかコレ！？」

第三次世界大戦における“英雄”の名はあまり浸透していないようである。

が、その実力はあまりにも高く、彼に向かい来る軍人たちは片っ端から迎撃され、戦闘不能となっていった。

「なぁ、イナド！お前の作戦、大失敗だって！！」

『大丈夫です。貴方の役割は、果たせています』

「それって囮じゃねぇかよ！！」

通信先のイナドは涼しげな声で答えた。

舌打ちしながらも瓦礫と化した住居の基礎へと身を潜め、手にしたアサルトライフルの弾倉を変える。

現在、リヒトとは別行動を取るイナドはこの場に存在せず、リヒト一人で襲撃者を相手取っていた。

元研究所を改造した人民開放部隊のアジト周りには、未だ軍人が多く居座っている。

それらをほぼ一人で相手取るリヒトの負担は、かなりのものだ。

「ったく！モテるならハイスクール時代にモテて欲しかったぜ」

それでも、リヒトは軽口を飛ばしながら笑っていた。
知名度は無いが、忘れてはならない称号、“英雄”。
仮にもそう呼ばれる彼の実力は、並みの軍人では相手にならないレベルだ。
障害物に隠れながら三点バーストのアサルトライフルを確実に、対象の戦闘挙動を奪っていく。

「尤も――――」

切ると、腰につけた手榴弾のピンを外した。
爆発時間を調整するために、高めの放物線を描いて放り投げられる。
その先には、慢心か、暢気に光学照準器を覗く狙撃主が居た。

「男になんて、一生モテたくは無いがな……！」

一人呟くと同時に、爆発が巻き起こる。
高らかに吹き飛んだ狙撃主とライフルを一瞥することも無く、リヒトは再びアサルトライフルの銃把に指を掛けた。
素早く横合いから銃口を覗かせ、研究所入り口付近の敵に斉射を浴びせる。
弾倉を全て使いきると同時に、その場で動く者はリヒトのみとなった。

「流石に、全部相手取るのは無理だな……」

げんなりと呟きながら、弾の切れたアサルトライフルを放り捨てた。
こめかみに指を当てて唸りながら、リヒトは振り向く。

「なあ、アンタもそう思うだろ？」
「っぐぅ……っ！！“死神”っ……！！」

それと同時に叩き込んだ裏拳が立ち上がろうとする男の顔に直撃し、意識を刈り取る。
死んだフリをしていた者を含めて、正面入り口の敵勢力は一人の男の手によって全滅した。

「死神なんてダッセェ名前で呼ぶなよ……恥ずかしいな、オイ」

軍人の最期の一言をぼやきながら、何の気なしに研究所の角を見た。
そこには、新たに現れた敵勢力の姿があり、リヒトは急いで研究所入り口エントランスの柱へと身を寄せる。
数瞬の後に、柱からは小気味のいい音が響き始めた。

「武器は無し、逃げ場も無し、どうすっかな……」

リヒトが打開策を考えようとしたとき、耳につけたインカムにノイズが走った。

『リヒトさん、援軍の準備が整いました』
「言っとくが、今から出発しますなんて言われたら、お前が到着するころには俺が蜂の巣だからな」

流石のリヒトといえど、銃器を持った相手に生身で勝つことなど出来ようも無い。
だが、イナドはそんな事知らないのか、暢気に答えてみせる。

『安心してください、今———』

轟音と共に、イナドの声が掻き消える。
直後、リヒトが背を預けていた柱の奥からは砂の柱が空高く舞い上がった。
その余波を受けたリヒトが受身を取り、振り向いたときには、軍人の姿は無かった。
が、現れた存在もある。

『到着しました』
「やけに時間が掛かってると思ったが、そういう事かよ」

砂塵に立つ、一人の巨人。
その手には巨大なウォーハンマーを持ち、他の種類に比べて小型化された身体にも係わらず、雄雄しい物に見える。
本来は鉄色の装甲は砂色に塗り替えられ、砂漠の兵器であることを主張していた。
突起の多さは威圧感を与え、同時に、仲間への頼もしさも演出する。
ジョーカーマシン・ペンタクルが、立ち上がった。

『大丈夫ですか？お怪我は？』
「もう少し早く来てれば、俺が頑張る必要は無かったんじゃねぇか」

ぼやくリヒトだったが、それも当然のことであった。
自らの体の十倍ほどの鉄の巨人に人間が勝つ術など皆無であろう。
ましてや、それが歴戦の実力者が搭乗するジョーカーマシンならば尚更だ。
ジョーカーマシンに対抗できるのは、同じく、ジョーカーマシンのみ。

『まだ、御二人は捕まった訳では無いようです。貴方は捜索を――』

イナドの声を遮るように、リヒトの背中に直感が走った。
本能に訴えかけてくるこの空気。
人の心を押し潰さんとする圧倒的なプレッシャー。
電気的なそれを感じたリヒトは、本能的にその言葉を口にする。
逃げろ、と、一言。
だが、それが言葉になる前に、爆音はリヒトの耳朶を打った。

「逃げ……ろ……っ！？」

言いそびれた言葉は力なく、零れるように発音された。
リヒトが見たのは、颯爽と登場し、共闘するはずだった仲間の機体。
それが、煙を噴き上げて無様に倒れる様であった。

「イナドっ！！」

砂煙と、時折ペンタクルの身体から散る破片の所為で近寄ることも出来ない。
ただ、その名を呼ぶしか出来ない。
それがもどかしく、リヒトは慌てたように首を回した。
ペンタクルはこちらに前面を向けながら、前のめりに倒れている。
つまり、リヒトの振り向いた視線の先には――――

「アイツか……！！」

ペンタクルを穿った、軍用ジョーカーマシンの姿。

だが、その外見は軍用と呼ぶにはあまりにも“普通”のジョーカーマシンとはかけ離れたものであった。

その異形を表すに相応しい言葉は、龍。

荒々しい四肢は刺々しく隆起し、血の様に赤く、黒い色をしている。

体躯は大きく、身体の正中線上には龍の体躯に相応しい立派な尻尾が揺れていた。

流線型の頭部は動く事無く、その紅い瞳でリヒトを睨みつける。

両肩から生えた巨大な翼を広げ、龍は高らかに吼えた。

それは、勝ち鬨か、哄笑か――――

だが、リヒトは気圧されない。

バベルとの戦いに味わった焦りや憤りが、再びリヒトの心身に沸き立つ。

歯を食いしばり、握り拳をきつくし、リヒトは睨んだ。

それを見咎めたかのように、龍はもう一度吼えた。

今度は、確実に哄笑。

怒りに一歩踏み出そうとしたリヒトを止めたのは、彼女の声だった。

「“アルカナマシン”か……どうやら、リラの情報は確かだったらしい」

「フェリア！？」

驚いて声を上げたリヒトが横合いを見ると、研究施設から現れる二人の女性の姿。

見慣れたコートを脇に抱え、白衣をはためかせるフェリア。

リヒトがフェリアと分かれてしまう状況を作り出した“迷惑女”、リラ。

その姿に目を丸くしたが、同時に、リラが叫ぶ。
「あぁーっ！アンタ、フェリアの腰巾着！」
「誰が腰巾着だテメェ！！」
リラの言葉に怒りを顕にしたリヒト。
だが、その憤怒もフェリアの冷静な視線を浴びせられて沈静化する。
何よりも、目の前で確かに威圧感を放つ“龍”。
それこそが、リヒトの心に冷たい何かを走らせた。
「リヒト。貴様に聞きたい事は山ほどあるが、どうやら悠長に聞く時間は無いらしい」
「奇遇だな。俺も、お前と同じ意見だ」
「既にグラインダーは呼んだ。思う存分、仇が取れるぞ」
フェリアは言うと、その目を龍へと向けた。
それに釣られるようにしてリヒトも目を向けるが、些かげんなりとした声音で言う。
「いや、まだ死んだ訳じゃあねぇ気がするが……」
「そうですよ。まだ、死んではいませんとも」
「うわぁっ！」
リヒトが言うやいなや、その背中からは陽気な声が響いた。
それに驚いたリラが小さく悲鳴をあげ、リヒトは首だけで振り返ってその男を見た。
幾分かその服装に汚れが見えるが、元気なイナドの姿がある。
「逃げ足の速いヤツだな」

「そうしなければ生きていけないのですよ。反乱軍というものは」
リヒトの毒のある発言に動じる事無く、イナドは笑った。
そして、指で“龍”を指し示して言う。
「さあ、仇討ちはお願いしますね？リヒトさん」

同時に、リヒトの目の前にそれは落下した。
暗緑色の装甲はなだらかに、砂塵の舞う風を切る。
半瞬送れて着地した鉄色のバイパスが砂を舞い上げ、肩膝立ちの格好で本体は制止した。
リヒトに背中を向け、同時に、龍を見据える形。
それは、アルカナエンジンを搭載したリヒトの剣。

「行って来い、リヒト」
「仕方ねぇな……ちょっくら、行っとくか」

リヒトがそれに乗り込むことで、アルカナエンジンは息を吹き返す。
身体の隅々へと魔力を行き渡らせ、その双眸に赤い光を宿した。
睨み付けるは、王者のような余裕を見せ付ける“未知数（アルカナマシン）の強敵”

―――

「Ａｒｃａｎａ　Ｍａｃｈｉｎｅ　０４　Ｇｒｉｎｄｅｒ（グラインダー）、行くぞ……っ！！」

“英雄”は駆ける。
己の空を、未知なる敵と共に。
砂塵に舞う陰謀が、大きく口を開けて彼を待ち構えていた。

第十一話　死神と龍（後書き）

ペンタクルのかませ犬っぷりに僕が一番驚きです。
プロットの段階では共闘イベントだった筈なのに……どうしてこうなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2516y/

22ジョーカー

2011年12月17日18時55分発行